

文學士 千秋季隆述

謠物評釋

催馬樂歌東遊歌風俗歌評釋

早稻田大學出版部藏版



謠物評釋目次

催馬樂歌解題

- 一 催馬樂の起原……………一
- 二 催馬樂の沿革……………三
- 三 催馬樂の名稱……………七
- 四 催馬樂譜の撰定……………一
- 五 催馬樂歌の分類……………一三
- 六 催馬樂歌の價值……………一七
- 七 催馬樂歌の異本、註釋書及參考書……………二八

催馬樂歌評釋

律

我駒……………三三

澤田川……………三五

高砂	三七
夏引	四二
貫河	四六
東屋	五〇
走井	五三
飛鳥井	五五
青柳	五七
伊勢海	五九
庭生	六一
我門爾	六二
我門乎	六五
大路	六七
大芥	七〇
淺水	七七

插櫛	七九
鷹子	八一
逢路	八二
道口	八四
更衣	八五
何爲	八七
鷄鳴	八九
老鼠	九〇
隱名	九二
呂	
安名尊	九四
新年	九五
梅枝	九七
櫻人	九八

華垣 一〇一

紀伊國 一〇九

竹河 一一五

河口 一一七

此殿者 一一八

此殿西 一二一

此殿奧 一二二

鷹山 一二三

美作 一二五

藤生野 一二七

妹與我 一二九

淺綠 一三一

青馬 一三三

妹之門 一三五

席田 一三七

蓑山 一四三

眉止之女 一四四

酒飲 一四六

田中井戸 一四七

無力蝦 一四八

難波海 一四九

鈴之川 一五〇

石川 一五一

奥山 一五四

奥々山 一五五

我家 一五五

東遊歌風俗歌解題

一 東遊歌の起原沿革名稱及撰定 一五九

二 東遊歌の分類價值及異本注釋書參考書 一六五

三 風俗歌の起原沿革名稱及撰定 一六八

四 風俗歌の分類價值異本注釋書及參考書 一七〇

東遊歌評釋

一歌 一七八

二歌 一七九

駿河歌 一八〇

求子歌 一八六

大廣歌 一八七

風俗歌評釋

平津久波 一八九

小由流木 一九〇

玉垂 一九二

鴛鴦 一九三

之太乃浦 一九四

君乎置天 一九五

越方 一九七

小車 一九九

陸奥 二〇一

甲斐 二〇二

常陸 二〇三

おなじく 二〇四

筑波山 二〇五

月面 二〇七

大鳥 二〇八

奈末不利 二〇九

荒田 二一〇

案豆末知 二一一

菅牟良	二二二
知々波々	二二三
我門	二二四
伊勢人	二二五
加比加禰	二二六
奈利高之	二二七
八乎止女	二二八
彼乃行	二二〇
宇婆良古支	二二〇
乎之高倍	二二一
多々其女	二二二

謠物評釋目次終

謠物評釋

催馬樂歌解題

一、催馬樂の起原

文學士 千 秋 季 隆 述

歌謡時代ともいふべかりし我が上代の國歌は奈良朝前後に至りて二面の異なり
 たる方向を取りて進みぬ。二つの方向とは記紀時代の歌謡即ち夷曲（ウラノク）來目歌（キタメウタ）思邦
 歌等十餘種を基礎として起りたる大歌所の歌に屬する神樂歌（カミガキ）謠（カミガキ）ひ物（カミガキ）と記紀時代
 の歌謡を繼承し而かも眼に訴ふる方面にのみ發達したる所謂 Written Poetry とな
 りし萬葉集の一部（讀み歌）と此れなり。而して萬葉集は高妙雄渾なる思想を有す
 れども未だ人耳を樂ますに足らず神樂歌は耳に訴ふることをうれども神事の一
 面に偏して思想音調共に普遍ならず。此の時に當りて世人の要求に應じて輕妙
 なる思想と斬新なる聲調とを以て顯はれたるものあり。これ吾人か題目として

次第に説明せんとする處の催馬樂歌なり。[鄂曲秘抄]のうちの「風俗裏書」の條にいはく

催馬樂本路頭之謠歌也、然而後好事之士女取以爲彈琴之歌曲、故其歌因來、甚有古代有中世、厥后更奉諸國、謂之風俗、又後代謠歌謂之今樣、催馬樂風俗固一也、遂概於宮中已久矣。

とある證とすべし。而して催馬樂の歌はれ且つその樂曲の行はれ初めしはいつの頃よりなりしかといふに元より俚巷の俗謠なるを以て定かにその時代をいふをえざれどもかの所謂大歌のやゝ人心に嫌惡せられたる奈良朝の初期なるべし。何となれば或る樂家の記録によれば催馬樂譜ははじめて奈良朝の末平安朝の始めに於て淡海三船によりて撰定せられたるものなればその以前より催馬樂歌及其の樂曲の坊間に行はれしこと明かなればなり。(神樂歌評釋解題中)神樂譜の撰定の條及當評釋中「催馬樂譜の撰定の條參照」かくの如く催馬樂歌はたとひ一種の鄙調に過ぎずといへどもその淵源する處の遠きこと上に述べたるがごとし。さ

れば苟くも文學に携はるもの豈に輕々に看過して可ならんや。况んや催馬樂歌はその思想に於てその樂曲に於ていと面白きものなるをや。またいはんや催馬樂は神樂と共に今日に至るまでその原歌古調を傳へ洋々たる宮中の儀式に多大の感興を與ふるものなるをや。

二、催馬樂の沿革

奈良朝の末淡海三船によりて較ぼその躰制を定められし催馬樂は稍々同じ頃より或は神樂の附屬として大前張小前張以下をなし或は獨立對等のものとして一部の催馬樂譜を爲し入つて宮中樂及び上流樂の地位を占むるに至たり。此れ催馬樂の沿革として第一に特筆せざるべからざる所にして亦た催馬樂がもと俚巷の鄙歌よりいてしにかゝはらず永く上流の樂とのみ限定せらるゝ起因なりといふべし。かくて催馬樂はやうく上下の社會に勢力を得たるものゝ如く三代實錄にも

貞觀元年十月廿三日、尙侍從三位廣井女王薨、廣井者二品長親王之後也。(中略)廣

井少修德操舉動有體以能歌見稱特善催馬樂歌諸大夫及少年好事者多就而習之焉至于殂沒時人悼之

とあるを以て見れば清和天皇の御宇の前後にあたりて催馬樂の流行最も隆盛なりしを知るべし。殊に少年好事者とあるに至りてはその行はれし範圍の弘く周かりしを察するに足るなり。催馬樂を傳習するものしかく多數となりしと共にこの樂は嵯峨仁明の頃唐樂の最も隆盛なりし時代より唐樂と結び付きて永く後世宮中の式樂となれり。さてこの樂の唐樂と結び付きしゆゑは唐樂は舞ありて歌なければ催馬樂歌を以てその缺を補ひ唐樂の曲と催馬樂の歌とかはるゝ行ひ宴遊の興となされしなり。今樂家錄に載せたる處を引きて如何なる組み合せなりしかを示すべし。

天曆五年正月廿三日御遊。(村上天皇)

安名尊。春鷓鴣。席田。葛城。

嘉承二年三月五日御遊。堀河天皇

安名尊。櫻人。席田。鳥破急。賀殿急。已上
爲呂
青柳。萬歲樂。五常樂急。已上
爲律

久安三年九月十二日鳥羽法皇天王寺行幸於念佛堂御遊。(近衛天皇)

雙調々子。鳥破急。賀殿急。安名尊。妹與我。已上
爲呂
平調。萬歲樂。慶雲樂。三臺破急。五常樂破急。扶南。老君子。廻急。
井州。陪臚。伊勢海。我門。更衣。淺水橋。已上
爲律

治承二年六月十七日御遊。(高倉天皇)

安名尊。鳥破。席田。賀殿急。已上
爲呂
伊勢海。萬歲樂。已上
爲律

貞治六年三月十九日中殿御會之次御遊。(北朝後光嚴天皇)

此殿。鳥破。席田。鳥破。已上
爲呂

萬歲樂。伊勢海。三疊急。已上

大永三年六月廿四日御遊。(後柏原天皇)

雙調々子。安名尊。鳥破只。同急返

賀殿急三返殘樂。聖御所作。四回寺中書王。平調々子。萬歲樂。

その他天永(鳥羽)保元(後白河)永曆(二條寛元)後嵯峨等の御遊に用ゐられし所謂相交催馬樂音樂目錄樂家録のも見えたり。さればこれによりて考ふれば催馬樂は一度宮中樂として地歩を占めしより連綿としてその勢力を持続し少なくとも足利時代の末葉まで行はれしを見るべし。然るに足利季世より戰國時代に及べる我國の間黒時代は凡ての藝術を中絶せしめしが如く亦た催馬樂をも一時衰頽せしむるに至れり。かくて徳川の初世寛永三年後水尾天皇二條城行幸の御時四辻季繼に命じて催馬樂を中興せしむるに及びて始めて今日に至るまで宮中に催馬樂あるをえたり。樂家録に

近代再興之事

寛永三年征夷大將軍源家光公上洛而居二條城。九月六日行幸後水尾院而有舞樂御遊。命四辻大納言季繼卿催馬樂仰之。平時伊勢海一曲再興。而拍子季繼卿。附歌飛鳥井中將雅胤朝臣。樋口少將信孝。四辻侍從公理。

とある此れなり。四辻季繼は西園寺家の支族にして和琴の名家なり。獨力催馬樂を復興して天皇の御歡に供ふ。その舊典を継ぎ家職を空うせざるの功亦た大に多とすべきなり。催馬樂歌は元來律呂の兩部を合せて凡そ六十曲あり。然れども今日樂家に傳はり宮庭の樂として歌はるゝもの甚だ多からず。即ち安名尊山城。席田。叢山。以上伊勢海。更衣。以上此れなり。而してこれら現存の歌曲は近く光格天皇の御時改定せられしものなりといふ。

三、催馬樂の名稱

催馬樂の名稱は神樂のそれの如く古來諸説まち／＼なり。而してそのいづれが是にしてそのいづれが否なるかを斷定するの難きことも亦たそれの如くにして然も一層甚しきが如し。依つて今諸説の主なるものをあげてそのいづれに従ふ

を以て最も信に近きものとなすかをいはん。先づ梁塵愚按抄には
 催馬樂とは昔し諸國より貢物を大藏省へ納めし時民の口ずさびにうたひけ
 る歌なれば催馬樂とは名くるなり。馬を催すと書けるは貢物負する馬をか
 り催すこゝろなり。

とあり。こは守部氏のいへる如くかの菴里路頭の謳歌なりといふ古傳のむねを
 ば催馬とかく二字の意にかなへんとて少し引き控げたる附會の説なるべし。さ
 て眞淵翁の催馬樂考には

神樂に前張あり。それが拍子にうたふ故に是もさいばりの名を負ひしもの
 なり。前張は一首なるをそれが調べにうたふ神樂を皆な大小の前張の中に
 こめていへり。

と見え又本居宣長翁はその隨筆玉勝間に於て

長瀬眞幸がいはい催馬樂といふ名はその初めについてたる吾駒の歌によれ
 るものなり。そのうたは伊天安加己未云々これなり。この歌はもと乞吾駒
 早玄欲云々とある歌なり。はじめの二句馬を催す詞なるを以て催馬樂とは

名づけたり樂は唐の樂曲どもの名某樂ナニカクといふによりて添へたるにてや
 がてその字音をとりて良とよぶなり。さてこの吾駒の歌を初めとする故に
 その名をもろくの曲の惣名とせるなりといへる此説よろし。

といはれたり。さて又橘守部氏は右の諸説に對して

今案ずるに右の岡部氏の説もわるかれと又此本居氏の説どもも心得がたし。
 そは既に神樂歌にもことわりつるごと古本どもにはかの大前張の標の下に
 或曰催馬樂としるし又前條に引ける古抄どもに某作神樂催馬樂とありて其
 濫觴をいろくさだせる専ら一つ物の如くにいひなせる中にも郢曲相承に
 はたゞ拍子の少し換るのみといひ嘉禎節付本には大前張以下半出於催馬樂
 とさへ記したればかの大前張小前張はもと此の催馬樂より取りて神樂の餘
 興にうたひしこと明らかし。然ればさいばらといふ名は本吾駒の歌より出
 たるが神樂に取られけんときその歌どもの中にさいばらにといふがありし
 につきてかしこにてはさいばりと轉じたるか又かのさいばりといふが名義
 の起りにてありしを後に吾駒の歌の初二句の心によりて催馬樂とは字を

改めたるかいづれこの二つの内ならずては古本どもの細註に叶ひがたし。この古本どもに従ひてこそ右の前張に大小の名ある事などもいと心得安くなりつれ。さもあらずてはいかにも解くべきよしあらず。十六曲同じよくなる故なりなどいへど其節付の悉く別なるをいかにせん。皆なおしあてのしひ言なるをや。かれ今は古本どものむねに隨ひて此名の意は右の二つをいでしともおもふ中にもしは初めのかたなるか。

と論駁せり。そもく以上三氏はいづれも國學の大家として吾人後進の大に恩恵を蒙むるところ、その該博の學その明達の識もとより後進の彼此異論を稱ふべきにはあらねども吾人おもふに三氏とも稍々十分なる説明なきが如き憾あり。故に吾人は眞淵宣長兩翁の説を折衷合併したるもの即ち守部氏の後者の説(同氏は氏の二説中前者を取れり)を取らんと欲するなり。即ち催馬樂はもと俚巷の俗謠にして別に名稱といふものもなかりしに奈良朝のころ神樂歌の餘興としてこれに加はりし時「さいばり」といふ一曲ありしかば一時は前張など稱へ來りしを後ほどなく外に催馬樂をや、一つにまとめし時吾駒とて馬を催す意味の歌ありし

により遂に「さいばり」と「さいばら」に轉じ催馬樂の字をあてしものならんと信ずるなり。而して「樂をら」とよむは唐樂の某樂ナニカといへる字音を取りて「ら」とせしものなること玉勝間に引ける長瀬眞幸の説の如し。かくの如く吾人は催馬樂の名稱につきて信ずといへども元この名稱たるや確然たる定説あるにあらずいづれも後世より類推する臆説なれば勿論的確を期すべからず。故に讀者はすべからず以上諸説を熟讀し神樂歌催馬樂の本文さては廣く國文國史等を研鑽して斬新の卓説を出さるゝやう勉めらるべし。

四、催馬樂譜の撰定

催馬樂譜の撰定のごとは既に「神樂歌評釋」のうちなる「神樂譜の撰定の條」にほゞ述べたるを以て今改めて叙するの必要なさに近し。されどこの評釋に於てもなほ讀者の便利の爲め且つ解題の順序としてその要點をいひ置かんとす。催馬樂譜の第一の撰定として信すべきは或樂家記録に見えたる淡海三船の撰定なり。三船は奈良朝の始めに生れ平安朝の極初期に歿せし人なればこの撰定は大方奈良

朝の末頃なるべし。而してこの時の撰定はもとより初期のことなれば必ず今日の如く完全なる催馬樂譜にあらざりしならんと信ぜらる。思ふに今日の催馬樂譜に見えたる凡て六十の歌曲の幾分かはなかりしなるべし。次に第二の撰定ともいふべきは醍醐天皇延喜廿年(又は廿一年ともいふ)勅詔によりて右近衛少將藤原忠房が増補したるもの此なり。この時の撰定にて稍々今日の催馬樂譜に近きものとなりしなるべし。さて第三の撰定は圓融花山兩帝の頃一條左大臣雅信の大補正なり。即ちこの撰定によりて神樂譜も催馬樂譜も現今の如き全く定りたる順序内容を取るに至れりといふ。かくて催馬樂の歌曲は足利時代の末葉に至りて一時中絶せりしを徳川時代に至りて後水尾帝の御宇四辻季繼によりて復興せられしことは既に述べたるか如し。この時樂譜に關して稍々修正を加へざればこれを第四の撰定ともいふべき。而して今日主として宮廷に用ゐらるゝ歌曲は光格天皇の御世に改定せられしものに係るといへばこれをしも第五の撰定といはゞいはるべきなり。催馬樂譜は明かに右五段の改修を経たることは確かなるがその間に小修正または明かならざる修正は數多ありしことを悟了せざる

べからず。おもふにこれより後時世の變遷發達に伴ひて催馬樂も亦た幾多の修正を経るならんか。

五、催馬樂歌の分類

催馬樂歌を分類するに當りて梁塵愚按抄に掲ぐるところによりてその曲名をあげれば次の如し。

律

我駒	澤田川	高砂	夏引	貫河	東屋	走井
飛鳥井	青柳	伊勢海	庭生	我門	我門乎	大路
大芹	淺水	刺櫛	鷹子	逢路	道口	更衣
何爲	鷄鳴	老鼠	隱名			

呂

安名尊	新年	梅枝	櫻人	葦垣	山城	眞金吹
紀伊國	葛城	竹河	河口	此殿者	此殿與	鷹山

美作 藤生野 妹與我 淺綠 青馬 妹之門 席田
 大宮 總角 本滋 蓑山 眉止之女 酒飯 田中井戸
 無力蝦 難波海 鈴之川 石川 奥山 奥々山 我家

即ち歌數は凡て六十首なり。尤も中には一曲二段三段にわかれその各段互に贈答の意を爲し皆な獨立の意味を表示せるが如きものもあれどかの神樂歌に於て本座末座ありて互に完全なる三十一字の詩形を有して共に個々別々のものとして取り扱はるゝとは同日の論にあらねばかゝるものも皆な悉く一首として數へたり。さて催馬樂歌の内容の種類はいかにといふにかの神樂歌の中なる大前張以下のそれと太だ酷似せり。これ吾人の極めて興味あるべく思ふ所にして大前張以下の催馬樂と同種類のものなることを重ねて證明する所のものなり。催馬樂歌に最も多きは大前張以下の如く戀愛の意味を含めるものなり。次にまたそれの如く多きは諷刺の意味を有するものなり。而してその數の多からざるは自然の景物を詠じたるものなり。これ催馬樂はもと俚巷の俗謠にしてその材料として人事の偉觀を歌ふにもあらずまた自然の大景を縮圖するにもあらずしてた

と目前の男女の淺薄なる情緒はた人事の小諷刺を弄するに止まることを示すものなり。

今その分類の大要を述べその各條に附屬する所の名目をあげん。第一男女の戀愛に關するもの。我駒 高砂 夏引 貫河 東屋 走井 伊勢の海 我門乎 淺水 挿櫛 逢路 更衣 何爲 鷄鳴 櫻人 葦垣 山城 竹河 河口 此殿 奥 鷹山 妹與我 妹之門 總角 眉止之女 石川 我家等此れなり。而してその歌數は凡て二十七首なり。催馬樂歌の總數六十首に比すれば殆どその半數なりといふべし。第二諷刺の意味を有するもの。その名目をあげれば 澤田川 飛鳥井 庭生 大路 鷹子 老鼠 紀伊國 葛城 藤生野 淺綠 青馬 大宮 無力蝦 鈴之川 奥山 奥々山 等にしてその數凡て十五首なり。歌數全體の四分の一を占むるものといふべし。以上二種のを合すれば即ち催馬樂歌全體の四分の三なり。されば催馬樂歌は俚巷の俗謠なりといはるゝが如くその特質も俚巷の俗謠のそれに多き戀愛諷刺の内容を以て充されつゝあるなり。これら二種の内容はむしろ催馬樂歌の本領にして亦た興味ある所といふべし。而し

て以下かゝげんとするその他の種類のものはむしろ從的の性質のものなり。
 第三祝賀及び儀式に關するもの。その名目は 安名尊 新年 此殿者 此殿西
 美作 席田 本滋 美濃山 等にして凡そ八首なり。(本滋及び美濃山は専ら儀
 式のみをよめるものなり)。催馬樂歌に祝賀及び儀式の意味を有するものあるゆ
 ゑは蓋し催馬樂は始め俚巷の俗謠たりしかども後ち宮廷に入るに及びて専ら儀
 式或は祝宴などに用ゐらるゝこと少なからざればなるべし。第四自然の景物に
 關するもの。その名目をあぐれば 青柳 我門乎 梅枝 真金吹 田中井戸
 難波渦 等凡て五首なり。この歌に叙景のもの少なきは神樂歌のごとく上代の
 文學に屬するを以て叙情の一點にのみ發達して自然の景物はあまりに詩材に入
 らざりしなるべし。また三十一文字詩といふ短詩形も叙景には適せざるべくは
 た俚俗の諷唱には叙情といふこと最も適當すればなるべし。第五人事その他に
 關するもの。即ち大芹 道口 酒飲 等凡て三首なり。催馬樂の内容によりて
 分類するときは實に此くの如きものあるなり。これら種類の多少はよほど面白
 きものにして大に研究玩味する價值あるべし。催馬樂は元來俗謠なるが故に各

地方のもの多し。その歌曲の題目としても伊勢の海 山城 紀伊國 美作 美
 濃山など地名國名を以てするもの甚だ少なからず。これら地名によりて分類し
 更らにその意味の存する處を考察せば多大なる感興を取得せん。今はあまりに
 煩しければさのみはとてえせず。

六 催馬樂歌の價值

催馬樂の價值として最も稱揚すべき主なる點は何ぞといふに神樂歌のそれの如
 く萬葉集以來國歌の皆な眼に訴ふるものとなりし時に當りて耳にきくもの即ち
 樂器に合せて歌ふものとしてあらはれ所謂後世の俗謠の祖先を爲し、こと此れ
 なり。而してその點に於ける價值は神樂歌もその前半すなはち庭燎探物の歌は
 與からざる所にしてたゞその後半即ち大前張以下の神樂歌及びわが催馬樂歌の
 み獨り專有するところなり。吾人は今まその外形内容の二方面よりその價值を
 論究せん。

催馬樂歌の形式このうちに神樂歌中大前張小前張以下の歌曲をも含めること前

に述べたるが如し。以下催馬樂歌といふも皆な之になぞらへて類推すべしは實に後世俗曲の詩形の先驅なり。また實にその祖先なりともいふことをうべし。否たゞにしかのみならずなほ一步をすゝめて精細に之を觀察すれば催馬樂歌の形式は近く今様宴曲謠曲小歌に影響し遠く小唄淨瑠璃地方唄に及びたるものといふをうべきなり。その勢力の偉大なるはたその文學史上の功績の無限なる轉た驚歎に價すべきものあり。今様歌、宴曲歌、謠曲歌、小歌の七五調、小唄殊に都々逸等淨瑠璃地方唄の七七調、五五調又は七五調皆なその恩恵を模倣の利益を催馬樂歌に感謝せざるべからざるにあらずや。文學の傳説の上、曲律の發達の上に於て催馬樂歌の特殊なる地位は亦た輕々に看過すること能はざるものなりといふべし。

さて催馬樂歌の形式の面白きもの大要をいはゞ(一)七五の調の明かにあらはれたることなり。七五調は我が國の歌曲に最も適合せる諧調にして後世宮廷に奏せられ俚巷に唄はるゝ最も面白き歌篇の大部分を占むるものなるが實にこの調はこの時に於て起源を爲したりといふも過言にあらず。勿論或る論者は萬葉集の

短歌に於て七五調を認むといふと雖もこは一個の假定説に過ぎざるなり。むしろ謠物としてあらはれし催馬樂歌に於てこの傾向ありといふの穩當なるに如かざるべし。

酒をたうべて(七)たべ酔うて(五)たふところんぞや(七)參うてくる(五)なよろほひを(七)まうてくる(五)タンナ、タンヤ、タリヤランナ、タリチリラ。(酒飲)

などいと著きものにあらずや。その他葛城、眉止之女の如き亦た好個の例證たるを失はざるべし。(二)七^〇七^〇の調の發生は韻文史上重大なる進歩といふべし。七七の格調はこれより先かの長歌の結末はた一歌篇のうちなどにほの見えて後の七七の調に達するの先鞭をつけたりといはゞいへ、兎に角一歌曲全躰を七七の調子を以て到底したるはこの催馬樂歌に於て始めて見るをうるなり。

いそらが崎に(七)鯛つる海人の(七)タヒツルアマノ(本)
わきもこがためと(七)たひつるあまの(七)タヒツルアマノ(末)

(神樂歌の小前張のうち、磯等)

田中の井戸に(七)光れる田水葱(七)摘めく、吾子女(七)田中のあこめ(七)タラリラ

リ、タナカノアゴメ。(田中井戸)

思ふに此の如き音調はいふまでもなきことながら目に訴ふる歌には見るべからざる所にして全く諷唱の音なり。若し後の都々逸の七七七五の調がこの調に關係なしといふ人あらば何人もその迂陋を笑はざるものあらんや。(三七)の調のみにて一篇と爲せるものあり。こは或は七七の調の如く見ゆる處もあれど大方は七の句獨立せるが如くいと面白ければその例一二をいはん。

ちからなきかへる(七)チカラナキカヘルほねなきみゝず(七)ホネナキミゝズ、

(無力蝦)

なんばのうみ(七)ナンバンウミ漕きもてのほる(七)をふねちほぶね(七)つくしまてに(七)いまま少しのぼれ(七)やまささまてに(七)難波瀉)

此の如く催馬樂歌に於ては大に参考に資すべき詩形存在するなり。而してその他數句數段の上に渡りては面白き詩形また少なからず。然れどもそれらを今こゝに詳説せんはいとわづらはしき事なればそはいづれ一括して論評する時に譲らん。(附けて云ふ、先年佐々政一氏帝國文學に於て催馬樂歌の詩形を論ぜられし

ことありき。其論周密にして多く肯綮に當れり。中にはあまりに微細に入りて賛同しかたき處も無きにあらねどまた好個の参考なるべし。)

催馬樂歌の内容につきては多く過稱を與ふること能はず。その唯一なる價值をいはゞ催馬樂歌の形式が俗謡のその前驅を爲したる點に於て價值あるが如く唯た催馬樂歌の内容に含める戀愛諷刺はた祝賀等の分子の幼稚なる點が俗謡のそれに含めるものに類似したるにあり。さればこゝにはそれらの種類につきて二三の例を擧げて本文の釋義に入るの階梯を爲さん。第一催馬樂歌に最も多きものは分類の條に述べし如く戀愛に關する歌なり。而してその戀情を述ぶるや多くは直接法なり露骨的なり。天真爛漫の致ありともいふべけれども亦た一方より評すれば卑陋淫猥の嫌なきにあらず。然れども中には着想高妙措辭流麗にしてかの勅選集中の餘々たる戀歌に比して少しも遜色なきのみならず遙に之に凌駕するものさへあり。例へば高砂に、

高砂のさいさごのたかさこの(一段)尾上になてる、白玉椿、玉やなぎ(二段)それもがと、サン、ましもがと(三段)練緒さみをの、御衣掛にせん、玉やなぎ(四段)なにしか

も、サン、なにしかも、(五段) 心もまたいけん、百合花のさゆり花の、(六段) けささ
いたる、初花に、あはましものを、さゆり花の、(七段)

とあるが如きは何等絶妙の詩趣にあらずや。高砂なる良家の處女(姉妹)に譬ふるに玉椿、玉柳を以てしそを親愛すること日頃手馴の練緒染緒の衣の如くならんことを希望するなど虚飾なき文辭のうちに美的比喻を含めるものといふべし。なほ詳細に渡りての趣味は釋義の時に説かん。又、東屋に

あつまやの、まやの、あまりの、雨そゝき、我れ立ちぬれぬ、そのとんのど開かせ(一段) かすかひも、戸さしもあらばこそ、その殿戸、われさゝめ、あし開いて來ませ
われやひと妻。(二段)

と見えたる古今集の、君やこむ我や行かむの十六夜に槇の板戸もさゝずねにけり
と曲を異にしてその巧を同うするものといふべし。「伊勢の海」に

伊勢の海の、いせの海、清き渚の潮間に、なのりそやつまん、貝やひろはん、玉や
ひろはん。

又、竹河に

竹河の、橋のつめなるや、橋の詰なる、花園に、ハレ、(一段)

花園に、われを放てや、我をば放てや、童女たぐへて。(二段)

これらは皆な戀愛歌として氣品高きものにあらずや。殊に「伊勢の海」の曲の如きは一誦すれば少しも戀愛の感想なく白砂青松、波打際に三三五五老若男女の貝拾ひに下立つ様を見るなり。この篇のごときは叙景的短歌の白眉なるものの中に加へて優に一頭地を抽ずるものといふべし。宜なるかな今日存在する催馬樂の歌曲いと少なき中に立ちて常に宮廷上流の樂として稱揚せらるゝことや。而して更らに之を再誦しそのうちに戀愛の意を含めるを知らばいかにその純潔雪の如きものあるに嗟歎せざらん。さて「竹河」に至りては別に巧緻を弄せざれども太古の思想素樸の詞藻のうちに愆愆通らざる一種高妙の感情を起さしむるものあり。思ふにこれらの歌曲の如き催馬樂歌に於て甚だ珍とすべきものなるべし。此くの如く上乘なるものあると同時に催馬樂歌は所謂俗謠の性質として殆んど清聴を汚すべきほどの淺膚なる戀愛歌あり。「夏引」の

夏引の、しら糸、七はかりあり、さごろもに、織りても着せん、汝妻離れよ、(二段)

かたくなに、ものいふ女かな、汝麻衣も、わがめのごとく、たもとよく、さよく肩よく、こくびやはらかに、縫ひ着せめかも。(二段)

本妻を離縁せよと女が男にすゝめたる、挿櫛の

さしぐしは、十まり七つ、ありしかと、たけくのじょうの、あしたにとり、ようさり取り、とりしかば、さしぐしもなしや、サ、キンダチャ。

男女野合の敷をかぞへたる、鶏鳴の

とりは鳴きぬてふ、今朝くらまぎれ、下紐のをに、おしすがりゐてこそ、とこほれ鳴く子なすまで。

の忌避すべき名詞を用ゐたる、いづれも朗々として高やかに諷誦すべきものならざるや明かなるべし。殊に「鶏鳴」の篇の如きはかの伊勢物語の「我ならて下紐とくなあさかほの夕影またぬ花にはありとも」二人して結びし紐をひとりして、逢見るまでは解じとぞおもふといふ贈答の歌又神樂歌の「庭鳥はかけると鳴きぬなり起さよわが一夜妻人もこそ見れひとこそ見れ」といふ曲とほゞ同じ思想聲調にして平安歌想研鑽の一助たるには相違なけれど美的製作物として論評すべき歌詩

としてあまりに淺薄卑近なるものといふべし。その他「山城」の曲の如きは更らに甚しきものあり。後世に俗謡にもあまりに見掛けざるほどの直覺的の劣情あり。さて戀歌にはなほ面白きもの二三あり。「妹之門」「石川」の如き此れなり。殊に「石川」の

いしかはんの、高麗人（トコリヤド）に、帯を取られて、からき悔いする。(一段)

いかんなる、いかんなる帯ぞ、花田の帯の中は絶えたる。(二段)

かやるか、かやるか、中は絶えたるか。(三段)

高麗人(歸化人)の戀を寫したるは兎に角風俗史上面白き材料ならずとせんや。第二、諷刺の意味を有するものは戀愛につぎての催馬樂歌の特徴なり。いまその最も面白きものを示さん。かの「老鼠」の

西寺の、おいねずみ、わかねずみ、おん裳喰（おんぬま）づ、袈裟（けさ）つんづ、けさつんづ、法師にまうさん、師にまうせ。

老若の鼠が跳梁することを姦臣父子の御世を傾けんと企つるに例へたる、「澤田川」の

澤田川袖つくばかりあさけれど、ハレ、(一段)

あさけれど、くにの宮人、高橋わたす、(二段)

アハレ、そこよしや、高橋わたす、(三段)

庶民の膏血を絞りにて細流に益もなき高橋を渡すと諷したる、鷹子の

鷹の子は、まろにたまはらんや手にすえて、粟津の原の、御栗栖の、めぐりの鶉、取

らさんや、サキンダチャ。

勇士の脾肉の歎にたへぬさまをうたひたる、また「葛城」の

葛城の、寺の前なるや、豊浦の寺の、西なるや、(一段)

榎の葉井に、白玉しづくや、ましら玉しづくや、おしとんど、おしとんど、(二段)

しかしてば、國ぞ榮えんや、わいへらぞ、富みせんや、おしとんど、おしとんど、(三段)

光仁天皇の御即位を期待して童謡に示したる、いづれも諷詠頌歌の上乗のものといふべし。蓋し支那の詩經にまさしく當らずとするも所謂云ふもの罪なく聴くものにて、誠となすに足るものなることは共に同じかるべきなり。第三、祝賀儀式に關係するものにも典雅の風ありて臺閣の詩として耻かしからざるものあり。

「安名尊」に

あなたふと、あなたふと、今日のたふとさや、いにしへも、ハレ、(一段)

いにしへも、かくやありけん、けふのたふとさ、(二段)

あはれ、そこよしや、けふのたふとさ、(三段)

又「新年」に

あたらしきあたらしき、年のはじめにや、かくしこそ、ハレ、(一段)

かくしこそ、仕へまつらめや、よろづ代までに、(二段)

アハレ、そこよしや、よろづよまでに、(三段)

とあるが如きは奇警もなく技巧もなければ何となく莊重の思潮ありて祝賀の宴歌として高貴の場處にかなひたるものといふべし。「此殿者の如きも亦た面白き歌ならずとせんや。又儀式に關するものには、本滋「築山」あり。いつれも大嘗會の御時の歌なり。取りいで、いふほどのものにあらず。たゞ催馬樂歌にはかくの如き種類のものをも含めることを注意すべし。第四、自然に關するもの亦た少しはあり。然れどもそのよしとあもへるは勅選集中の歌或はその模擬にしてその

他は皆な彼此品評を下すべきほどのものならず。「青柳梅枝」は共に古今集中の和歌並にその脱胎なり。神樂歌の時に述べし如く叙景詩は催馬樂歌に於ても等しく甚た乏しきなり。さてこの外の歌曲にてや、注目すべきは大芹の博奕を歌へる、隱名の異色ある酒飲の輕洒なる等なるべし。かくの如く催馬樂歌の特色は戀愛にあり諷刺にあり。而してその詩形の面白さにあり。若しそれその價值を詩形内容の兩面より精細に論ぜんか、大に研鑽すべきこと多かるべし。否な實に多大なる材料あるなり。然れども今はたゞ大體に於てその價值を讀者に示すに止め置かんとす。

七、催馬樂歌の異本、註釋書及參考書

催馬樂歌の異本、註釋書及び參考書等は多く神樂歌のそれと重複出入せり。されど當評釋のみ讀まるゝ人に對して更らに委しくこゝに列舉せん。まづ異本より

催馬樂譜

天治年間(崇徳帝)の奥書あるもの

仁智要錄

藤原師長撰(高倉院の治承年間)

催馬樂譜

多近久書(文治二年の奥書あるもの)

催馬樂譜

嘉禎元年(四條帝)の奥書あるもの

催馬樂略譜

源有俊書(後花園帝の文安六年の奥書あり)

催馬樂章曲

寫本

その他、異本、別本として世に傳へらるゝもの、あるは近世の國學諸家の手入れ本などいとさはなるべし。これらの異本のうちにていとよきは多近久の催馬樂譜なるべし。此書は歌數完全にして原本なれば守部氏もこれによりしほどにていとよし。

催馬馬の註釋書はその數少なからねどよきは少なし。

催馬樂註秘抄

(藤原兼良撰、續類從五三五、梁塵愚按抄下)

催馬樂考

加芳眞淵撰

樂章類語抄

小山田與清撰

催馬樂新註

小山田與清撰

踏物評釋

催馬樂歌解題

七、催馬樂歌の異本、註釋書及參考書

梁塵後抄

熊谷直好撰

催馬樂入綾

橋守部撰

四譜攷

岡本保考撰

催馬樂辨解

吉田蕃教撰

催馬樂通解

今井彦三郎撰

これ等の書中にて最もよきは守部氏の入綾にて次に「考」類語抄及び「後抄」などなるべし。

催馬樂及び催馬樂歌の参考書として殊に必要なるは次の如き文なるべし。而してその類いと多かればその大畧のみあげん。

郢曲抄

群書類從卷第三百五十所載

梁塵秘抄口傳集

群書類從卷第三百五十二所載

御遊抄

群書類從卷第五百廿七所載

郢曲相承次第

同書卷五百卅三所載

催馬樂師傳相承

同

歌舞品目

藤原守中撰

催馬樂時代考

傾鼠漫筆所載

催馬樂の名目

関田耕筆所載

躰源抄

豊原統秋撰

樂家録

安倍季尙撰

樂道類聚

辻昌名撰

教訓抄

狛近真撰

續教訓抄

狛朝葛撰

歌舞音曲略史

小中村清矩撰

謠ひものゝ變遷

佐々政一撰

これら参考書は刊本なるもあり寫本なるもありあるは未完なるものあり又は部數の少なきもありて手に入れかたきものも少なからざるべし。されど歌舞品目及び歌舞音曲史の如きは刊本として世に多かれば繙讀するも可ならんか。躰源抄より續教訓抄に至る五部の書はいづれも數十卷の大部のものにして皆な樂家

の秘記也。苟も斯道の蘊奥を研めんと欲する人は之を一讀せざる可らず。然れどもこれらは悉く寫本にして閲讀するに便なきはいとあたらし。しかし樂家録、脉源抄、教訓抄の三部だけはやゝ世に傳はれるが如し。如上のものゝ外、舞樂儀式、調度等に關する所謂斯道専門家に必要なる秘録舊記も少なからざるが如し。それらは今は要もなきことなれば深くもたつねずして止みつ。

催馬樂歌

律

我駒カガトマ

二段

一段

いで我駒、早く行きこせ、待乳山、アハレ、まつちやま、ハレ、

二段

つちやま、待つらん人を、行きてはや、アハレ、行きてはや見ん。

○律とは音調の名にして陽の聲なり。秋冬の調べにかなひたるものなりといふ。樂音及び儀式のことはいづれ期を見ていふことあるべし。○我駒この題目は勿論、いで我駒の句より出でたるもの、論語の學而篇孟子の梁惠王篇など皆なこの例なり。催馬樂の命名法以下大方かくの如し。この歌は萬葉集卷十二の乞吾駒イガガトマ、早去欲ハヤクニクコソノツマ、亦打山イタヤマ、將待妹乎マサマシメノコト、去而速見イキマシ、卒といへるを少しく換へ

たるまでなり。○いて我駒。いでは發語となりたれど萬葉集及びこの歌などにては願望の意なり。「乞欲」などの字を當つ。源氏物語などにては明かに發語とし用ゐらる。○はやく行きこせ。萬葉集にはこそとあり。「こそこせ」同意にして共に願ふ意。その駒に速く行けよかしと望むこゝろなり。○まづち山。大和國宇智郡にある山にて紀伊國伊都郡にもかゝれり。萬葉集卷四に「あさもよし紀路に入りたつ待乳山云々」とあるにて悟るべし。○あはれは拍子詞なり。されど嗚呼我が妹は待つならんと感歎を含めたるものなること入綾の説の如し。○つち山。待乳山の名を省けるなり。音調の爲めにかくしたることはいふまでもなし。○待つらん人を。萬葉集には「待つらん妹」とあり。元よりその意に見るべし。○一首の意は我が乗れる駒よ、希くは早やく歩めよかし愛しき妹に疾く逢ひたければとなり。馬上ゆたかに妹が通ふ遊子を寫しえて妙といふべし。元來情熱をあまり多く感ぜざる駒を擬人したる點など深く讀者の思潮を動かすべし。後世「催馬」の字をあつるに至りしもこの歌より來りたるなり。

澤田川 三段

一段

さはだ川袖つくばかり、淺けれど、ハレ、

二段

あさけれど、ぐにの宮人、高橋わたす、

三段

アハレ、ソユヨシヤ、たかはしわたす。

○この歌は「我駒」と同じく「さはだ川袖つくばかり淺けれど久邇の宮人たかはしわたす」といへる短歌に拍子詞を添へ繰返しを爲したるまでなり。○澤田川。こは百人一首などにて有名なる山城の泉川の上流なりといふ。○袖つくばかりあさけれど。袖づくは袖漬くなり、即ち袖の濡るゝことなり。袖の漬くほど淺しといふは古しへは袖いと長さものなれば川水淺くして漸く膝下位なるをいふなるべし。○ぐにの宮人。ぐには「恭仁」にして聖武天皇の遷

り給ひし山城相樂郡にある都の名なり。續日本紀の天平十二年十二月の條に見えたり。「宮人」とはその恭仁宮に仕へまつれる百官をいふ。○高橋わたす。この句を表面より解釋すれば壯大なる高橋を架けたる意なれどその裏面を窺へば實は當時新都經營の爲めに課税多く人民その辛苦を歌ひたるものなるべし。續紀の天平十四年八月の條に「令諸國司隨國大小輸錢十貫以下一貫以上以充造橋用度」と見え又同十五年の條に「初壞平城大極殿并步廊遷造於恭仁宮四年於茲其功纔畢矣用度所費不可勝計」とあるを以て考ふれば確かに之に従事する役民などのその負擔の重きを訴へしものならん。これ俗謡部歌の云ふもの罪なく聴くもの以て戒むべしとなす所以なり。入稜に高橋は價高き橋の意にて失費多きを諷れるものなりといへど梁塵後抄にはあまりに穿ちたる考にて古を強ひし説なりと駁せるをよしとす。思ふにこは涉渡ることをうべきほどの細流にかゝる宏大なる橋を架けたりといふ意にて人民を困めて無用の長橋を渡すといふほどのこゝろなるべし。徒歩にても涉ることをうべき川といひしは蓋し作者の構想ならん。○あはれそこよ

しや。入稜にはこは拍子詞なれど嗚呼ををよしとするかといふ意も含めりといへり。されど吾人はさほどまでに深き意に取らずともよからんとおもふ。何となればこの詞は後ちの歌にも拍子詞として數々用ゐらるればなり。○高橋わたす。結末としてその主眼の句を繰返したるなり。この繰返しは諷諫の意を紙上に躍如たらしむるものにして最も有効に使用せられたるものといふべし。○一首の意は明かなり。此歌の巧妙なる點は淺流と高橋とを對照したる處にあり。諷刺詩としては面白き思考といふべし。

高砂 七段

一段

たかさごのさかさごの高砂の

二段

尾上に立てる、しら玉椿、玉やなぎ

三段

それもがと、サン、ましもがと、ましもがと、

四段

ねりをさみをの、御衣掛けにせん、玉やなぎ、

五段

何にしかも、サン、何にしかも、なにしかも、

六段

心もまだいけん、百合花の、さゆり花の、

七段

けさ咲いたる、初花に、あはましもものを、さゆり花の。

○高砂の。高砂は「高いさごにて山といふことなり。後ちには播州の名所となれり。○さいさごの。真砂の意。同じ意を繰返したるまでなり。愚按抄に「ちひささいさごなり」とあるはよろしからず。○をのへに立てる。尾上は山頂より尾を引きたる丘をいふ。こゝは山といふ意にてよろし。立てる

は「植てる意なり。即ち山上に生へたるをいふ。○しら玉椿玉柳。白も玉も賞美していふ詞なり。白樞玉篠などの例なり。愚按抄に「白き花の椿なり」といへるはあまりに拘泥したる説なり。椿に柳は世人の二人娘に譬へたるなり。さてこの比喻いとおもしろく俗語の立てば芍薬坐れば牡丹といふに似通ひて風貌容姿目前に髣髴たるにあらずや。○それもがと、ましもがと。其もがな、汝もがなといふこゝろにて姉妹とも欲しといふ意なり。こはその人の多情なりと評せんよりもその姉妹の娘の美貌にしていづれをそれといひがたきほどなるをいふなるべし。○ねりをさみをの。入綾の説によれば「練緒の紐の着ける衣、染緒の紐の着ける衣なり。されど梁塵後抄によれば「ねりを練りたる経緯の糸によりて織られたる衣、また「さみ」を田舎にいふ所謂「さいみ」にて不練の糸にて織りたる衣なるべしといへり。思ふに入綾の説も面白けれど衣をいふにそれに着ける紐にて稱するもいかゞに思はれ又紐のことを緒といふも聞き馴れぬことなれば後抄の説によるとよしと思

はるれど先きに甲乙優劣なき姉妹に譬ふるに玉椿玉柳を以てしたるなればこゝに「ねりをさみをも同じほどの善き衣裳にせざれば兩々駢立の妙なし。されば新案のいでんまではまづは入綾に従ひ置かんとす。○みぞかけにせん。練緒染緒の衣をか姉妹にたとへたればそを掛くる御衣架にせんとは妻にせんといふ意なり。姉妹の娘を親愛せんとするさまその着更ひを掛くる衣架にたとへたるにて知るべし。○何にしかもさん。『さん』は例の拍子詞。『し』は助辭。何にかもとは何故にぞとその爲したることを後悔するさまなり。○こゝろもまだいけん。『まだい』は『まだき』の音便にて『朝まだき』の『まだき』などと同じ意。伊勢物語に「夜も明けば狐にはめなんくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる又古今集俳諧に「いつしかとまだく心をはぎにあげて天の川原をけふやわたらんなどある『またき』『まだく』皆な然り。即ち心の急かるゝことなり。前の句とあはせていへば何故にまあかくばかり早まり過ぎしにかと悔めるこゝろなり。○ゆり花のさゆり花の。『さゆり花』の『さ』は『さい』の『さ』と同じく美稱にて意なし。二つ繰返して調をなしたるまでなり。『百合花は

『緩かに』といふ意を示したるものにてその手段の寛やかならざりしを悔みしなり。百合花をこの意に用ゐたるは萬葉集にその例いと多し。同書卷十八に『さゆり花ゆりもあはんとおもへこそ今のまさかもうるはしみすれなどあるにて悟るべし。○けさ咲いたる初花にあはましものを。今朝咲きたる初花に』といふは少しく穿鑿に過ぐるやも知らねどこの人あまりに情熱高く早うあせりにあせりたる爲めにこの姉妹の風貌いと麗しく恰も青春の候櫻花爛熳たるが如き時に反りて失敗したりとの意なるべし。而してなほ深く裏面の意味を辿らば或はこの姉妹の美衣盛装して他に嫁したるを見て悔恨の情緒を起しゝとも見らるべし。『あはましものを』にその遺憾なりしさま言外に想像せらる。○一首の意は高砂の良家に二女あり。窈窕として椿花の風丰楊柳の姿跡ありていづれをそれと言明し易からず心轉帳として思懊惱たり。遂に奔逸急進して爲めに先方に嫌惡せられ盛春のまさに匂ひこぼれんとする時に反りて他人の娶る處となれりといふこゝろにて頗る殘恨の意に堪へざる感慨を歌へるものなり。さてこの種のもの後ちの俗謠にその例少

なからず。思ふにこれらは催馬樂一流の擅にする處の世界なるべし。「玉椿」
「玉柳」真百合花はた練緒「染緒などいふ非情物を借り來りて有情解語の處女
に譬へたるはまことに修辭上價值ある歌といふべし。

夏引 二段

一段

なつ引のしらいと七ばかりあり、さごろもに織りても着せん、ま
し妻はなれよ。

二段

かたくなに、ものいふをみなかな、汝麻衣も、わが妻のごとく、たも
とよく、きよくかたよく、襟やわらかに、ぬひきせめかも。

○夏引の白糸。夏引に就きては二説あり。一は麻糸といひ他は蠶糸なりと
いふ。而して前者の説は麻は夏刈りて糸に採るものなればといふ理由によ
り後者の説は蠶は春飼ひ夏糸に引くものなればといふ考によれり。殊に後

者の如きは橘守部の説にして後撰集の戀四に「ひきまゆのかたふたごもりせ
まほしみくはこきたれてなくを見せばや」とある「ひきまゆ」など證とすべきに
あらずやといへり。されど「ひきまゆ」と「夏引」と何等の關係あるかその點明か
なるにあらねばいづれとも定めがたし。しかし第二段の歌に「麻衣」といふと
あれば麻の糸とする方よろしからん。且つこの歌の上より見ればこは民間
の鄙歌にして贈答せる男女も身分よきものにあらざること明かなればなり。
○七はかりあり。「はかりは丑なり」。「七は大敷をいひしものにて必ずしも七
の敷を示すものにあらず。衣七八反も織るべき麻糸を持たりといふほどの
意なるべし。「はかりは万葉集に見えたる穂田之刈婆加などの「ばか」の意と
同じ。○さ衣に織りても着せん。「さ衣は眞衣なり。狭衣などに説かんはあま
りに穿ちたる考なり。○ましめはなれよ。「ましは汝の上畧めは妻なり。汝
の妻を離別あれとの意。以上は或る女より男に向ひていふ歌なり。○かた
くなにもいふをみなかな。「かたくなとは頑迷にして利己主義なるものを
いふ。○ましあさぎぬも。「汝も麻衣をのこゝろなり。音調句節の上より詞

を轉倒し或は畧音にしたるものなり。○わがめの如く。わが妻の如くの意にてその男の當時持たる女なるべし。○たもとよくきよく肩よくこくびやはらかに。袂よく着心よく肩付よく襟和かにとの意。こは麻の衣はごはつきてよほどの手練ならねば所謂着よく肩よく縫ひがたきものなればかくいひしなり。およそ衣服にありて袂肩襟などは殊に必要な點にして外觀の美は多くこの邊に認めらるゝものなり。されば一方に於て現今の妻女の裁縫の點に於て遙に卓絶せるを述べしと同時にその人格も要所／＼よく引き締りてこの淺薄なる女とは大にその撰を異にせるを示したるものとも見るをうべし。○ぬひさせめかも。「かもはやもと同じく反語なり。「や」かには反轉の意ありてもには感歎のこゝろあり。されば「や」かにて反轉するよりも「やも」かもにて反轉するかたその反轉の意味の上に一種の感慨を罩めていと面白きものあり。○一首の意は或る女よりその戀慕せる男に幾分か揶揄的に（しかも多少の眞意ありて）われに純白なること雪の如き麻の糸七八反ぶりもあり。わが愛する君にしあればこをいと美き衣に仕立てゝまゐらすべきに

いかで君の持たる妻を離別しわに代へ給はずやと問ひかけし歌に對して男もさるものこも調戲的にいましむいと我儘なる女なるかな妻あるものを離れよといふざるにても汝はわが愛しき妻に代るべきほどの技倆ありや疑はし。わが妻は麻衣の剛くしていと縫ひ悪くきを袂豊かに襟當り和らかに肩の姿をかしくしかも着心よく調ふるなるが汝はかけてもその手際あらじと答へし者なり。この歌のさま眞面目なる戀歌としては受け取れぬが如くなれども揶揄のうちに眞意諧謔のうちに希望あり。民間市井の歌は多く此くの如くにしてかゝる贈答も遂に眞實の戀愛を構成せる動機となりしなるべし。兎に角當時の男女の情交のいかに淫猥不倫のものなりしかを見るには適當なる材料ならん。女の方より男にその妻を離別せよなど慫慂するさまはかの淫奔なる伊勢物語の歌編と異曲同巧なるものといふべし。さてこゝになほ注意として述べ置きたきはこの頃の風俗として女子に最も必要なりしは裁縫のことなり。さればこの歌に於ても裁縫の巧拙によりて婦人の撰擇を爲しゝは當然のことといふべし。故に亦たこの歌に於て風俗史の直接

の好材料をえたるものといふべきなり。催馬樂歌をよむものよろしくこの邊に留意するを最も緊要なりとす。

貫河 三段

一段

ぬき川の瀬々の小菅のやはら手枕やはらかにぬるよはなくて
おや避くるつま。

二段

親さくるつまはましてるはしもしかしあらば矢矧の市にくつ
かひにせん。

三段

沓かはせんがいのほそしきをかへさしはきて上裳とりきて
宮路かよはん。

○貫川の。この川、愚按抄の説によれば美濃國伊豆貫河のことなりとあれど歌中に矢矧といひ宮路といふことあれば入稜の説の如く三河國の貫河なるべし。そは行囊抄東遊下に矢矧橋。此川上ハ信州駒嶽ヨリ流出テ下流ハ鷲塚ノ邊ニテ大洋ニ入ル、自橋右ニムツナ村、亘村、明神ノ森見ユ、左ニ天王ノ宮、比奈村ノ大明神ノ森見ユ、自此橋川上一里、今村ノ前ニ步渡ノ瀬アリ、可秘ト云ハ是ヲ貫川ト云、催馬樂ニ云々トありてこの歌引けるもの即ちこの貫河なるべし。○せいの小菅のやはら手枕。その瀬のところくに生へたる小菅もて作りたる和かさ枕なり。こは主として次の和らかにぬる夜はなくて、といふ句をいはん爲めの序詞なり。されど枕など最も次の句の縁あるものといふべし。○やはらかにぬるよはなくて。催馬樂考の説の如くおもふ夫とつけてぬる夜はなくてといふ句なるべし。入稜に古事記上巻に見えたる須勢理毘賣命の御歌を引きて男女くみ寝ぬるをいふと云るは委しき説なれどさまでにとかん必要もあらじ。○おやさくるつま。父母が夫婦の間を避け遠くるをいふ。こゝは夫を遠くるなり。そは男の愛しき妹許通ふをその兩親

など嫌ひてその間をさくなるべし。伊勢物語に「人しれぬわが通路の關守はよひくごとくにうちもねなく」とあるは男の心ならめど女も亦た愛しき情はいと切なるものあるべし。次の句にてその情明かなり。○おやさくるつまはましてるはしも。親の爲めに疎外せらるゝ夫はまして戀しく慕はしとなり。るはしもはうるはしもの上略なり。うるはしは伊勢物語にあつさ弓檜弓槻弓年をへてわがせしがごとうるはしみせよとある如く美麗といふ意より愛慕といふこゝろに轉せしなり。こゝまでは女のいふ詞なり。○しかあらばやはぎのいちにくつかひにせん。しかしあらばは催馬樂考にも入綾にもはた梁塵後抄などにも専ら女のさほどに戀ひ慕ふならばといふ意にかかれる接續詞と見たり。されどこの接續詞は親さくる夫にもかくるなるべし。即ち兩親の間を裂く爲に更らに戀ひしければの意なり。入綾に「しかしあらばの下にさらばかよひ給へかし」と女にすゝむる意含めりとあるはまことしかなるべし。男の沓買ふも女をしてかよはしめんの料なるなり。矢矧は三河國碧海郡にある昔の驛名なり。宗祇法師の方角抄に「矢矧里。河有

八橋より五里此川に橋あり渡れば岡崎といふ宿ありとあり。こゝまで男の詞なり。○くつかはせんかいのほそしきをかへ。線鞋の細底を買への意。線鞋の鞋は男女共通の靴なり。細底は狭き底にして女の足は細きゆゑそれに適するやうに作れる織巧のものなるべし。○みやちかよはん。宮路は三河の寶飯郡にある地名。神樂歌採物の劍の歌に「くみのをして、宮路かよはん」とある奈良の都大路とは異なり。こゝは女の慕へる男の居りし處なり。さてこの地名は更科日記にもあらしこそ吹き來ざりけん宮路山までもみぢ葉の散らで送れると見え又東鑑にも建久元年十二月十九日頼朝上洛して鎌倉へかへる條に入夜令宿宮路之山中給とあり。その他十六夜日記などにもあり。宗祇方角抄には更らに委しく宮路山東に川あり北向の里なり矢矧より近し山は高からず衣のさとより二里許或俗書には八矧より宮路まで一里とあり。そのさま思ふべし。○一首の意は双親の嚴しき爲めに親しく寐ると難き夫よしか裂かるれば猶更らに戀しく思ふと女がいへばしか思ひ給はよき鞋を矢矧の里に買ひて贈らんほどにわか方へ通ひ給へかしと男の慰

むるを、女は更らにさらば線鞋の細底なるをかひ給へ、妾はそを穿きて君がいますなる宮路山のほとりに通はなんといへるなり。この戀愛のさまいつの世にもあるとにて別に著きものなけれど地理風俗の上にはおもしろき歌なるべし。さるはその頃矢矧の里のいと榮えたと、矢矧の里と宮路山との近かきとはた女の鞋のいかなるものなりしかといふとなど見ゆればなり。

東屋あづま 二段

一段

あづまやのまやのあまりの雨そゝぎわれ立ちぬれぬ、そのとどのど開かせ。

二段

かすがひもとざしもあらばこそ、この殿戸えんどわれさゝめ推し開いて來ませ、われや人づま。

○あづまやのまやのあまりの。東屋の歌は源氏物語の宇治十帖中に卷名あ

る程の有名なるものなり。東屋といふ語につきて諸註まちくになり。しかしいつれもあまりよろしからず。思ふに四方に葺き下したる屋根のあるささやかなる家造にて壁なきものなるべし。考にあづまやのあは阿の字音なるへしといひ入綾に「あづまはうはづまの略ならんといへるは牽強附會の説なり。まやはあづまやの略にて同じ詞なりとするをよしとす。あまりは東屋の外にいてたる軒をいふなるべし。○雨そゝぎわれたちぬれぬ。こは徒然艸に露霜にしほたれて所さためずまよひありき親の諫め世のそしりをつゝむに心のいとまなくあふささるさに思ひみだれさるは獨りねがちにまとろむ夜なきこそをかじけれとあるにいとよく似たらずや。○そのとんど開かせ。その殿戸開けよとの意。以上は男の詞なり。遊治郎の心急ぐさまいとよく寫したりといふべし。○かすがひもとざしもあらばこそ。かすがひは金次かたせにて物と物とをつき合す者なり。とざしは戸鎖にて名和抄に扇音經和名度佐之戸扇鐵鉤所川於内以關門也とあるにて知るへし。いつれも戸締りの料なり。○そのとんのどわれさゝめおしひらいて來ませ。われさゝ

めは上の句をうけてさる錠や戸鎖などある堅牢なる家なればこそ戸を鎖さ
 めいとさゝやかなる東屋なるものを早く開きて來給へかしとの意なり。○
 われや人づま。疑問の句にして否定の意をあらはす者なり。「人づまの下に
 『われや人づまなる』などの語を略されたりと見るべし。この句の意はわれは
 人の妻にあらず御身の妻なるに躊躇し給ふとなく早く内に遣入り給へとな
 り。以上は女の答へたる者なり。○一首の意は月黒く雨冷やかに四邊寂寥
 たる冬の夜のいと遅く父兄の目を忍びて一遊治郎妹が門近く音づれしに妻
 戸堅く閉ざして寝ねたるにや音もなししばし覗みて家内の様子など窺ふに
 軒端を傳ふ玉だれは心なくも衣に瀧ぎ遙かなる野末を掠めし夜嵐は身に泌
 むばかり吹きすさみていと寒むければたへかねてとぼそほとほとと打たゝ
 きて開けて給はれといへば内より女の聲として斯る賤しき伏屋には錠戸鎖
 などはなきものを人妻ならぬわれに心置き給はずはや遣入り給へかしよそ
 よそしくも門に立ち給ひて雨露にしほたれ給ふやうやあるなど抑捺しつゝ
 戸を開くなる男女戀愛の深きさまを書きしものなるべし。戀歌として殊に

坊間の俚歌としては面白きものならん。とりわきて結末のわれや人妻など
 いと力ありといふべし。なほこの戀歌は横筋のものならずしてこの頃の風
 俗上一夫一婦に通ふはむしろよき方の春風詩なりといふを憚からざるなり。

走井 一段

はしりゐの小萱刈り收めかけそれにこそまゆつくらせて、絲引
 きなさめ。

○はしりゐの。走井は逢坂にも伊勢にもある地名なれどこの歌にては地名
 と見ざる方よろしかるべし。たゞ奔逸して流るゝ清水ならん。「井」とは居に
 て何にとなく堰かれて滞り澱める處あるを稱せるものなるべし。要するに
 山間など流るゝ水にておのづから里人の汲まん料となれるものならん。後
 世は井といへば堀り貫きしものなれどこのころのは山井板井などいへる走
 り水を差したるものなり。○こがやかりをさめかけ。こがやは蠶莖なり。
 こは古しへ蠶を飼ふに萱または藁などを敷きその上に桑を入れてその食料

に供したるものなり。「かりをさめかけはそを刈り取りて蠶棚コサナの上に懸け置くをいふ。かけは懸けてにて次の句に續く意なり。○それこそまゆつくらせていとひきなさめ。それにこそそれは蠶に處女を懸けたるものなるべし。前の句の接續よりいへば蠶に聞ゆれば處女といふ意は譬喩したるものなり。「まゆつくらせては専ら蠶の方にいひたるものにていとひきなさめは處女の方に懸けたるなり。なさめは爲さしむの意なるべし。○一首の意はかの清く流るゝ走井のほとりなる蠶蓋を刈り取りそれを蠶をかひて繭つくらせ美衣を織らん料の引糸を取らしめんといふが表のこゝろにて裏面には蠶を處女にたとへかの處女はいと美しければわが屋の妻と娶りてやがて衣服調度の世話などさせたきことよといふ意味なるべし。催馬樂はいづれも民間の俗謠なればこれほどの比喩ありと見るは差支なきことならん。されども入綾の説の如くこは女の男を怨みたるにてつらき男の人の處女を妻としたるにたゞ糸機縫織の事のみさせおきてその妻をしのばざりければその女かふ蠶にこそ然かしてまゆつくらせめいたづらにわれを引いれおきて

云々といへるものなりと解くはあまりに穿ちたるものにあらじか。

飛鳥井 一段

あすかゐに、あすかゐに、やどりはすべし、オケ、かけもよし、かけもよし、みもひもさむし、みまぐさもよし。

○こは飛鳥井に宿りはすべしかげもよしみもひもさむしみまぐさもよしといへる短歌に拍子詞など添へて謠へるなり。思ふにこの歌然るべき人の詠みしならんをその調いかにも自然にして流暢なる所あるからに俚巷の間に謳歌せられ催馬樂歌のうちに採らるゝやうになりしなるべし。○飛鳥井にやとりはすべし。飛鳥井は地名にていづれも水の流るゝ所なり。この地名大和飛鳥川の邊にも亦た山城京都の二條万里小路にもあり。今はいづれとも定めがたけれど宿はすべしとあればこの人住める處都人の詠みしものとしてより程遠き場所ならざるべからず。さらば奈良の京の折りの歌ならば京都のなるべく又平安の頃のものならば大和のなるべし。されど催馬樂歌

は「解題」の條に述べたる如く奈良朝の末頃のもの多かるべければまづは京都のとする方正しかるべきか。○かげもよし。こはその清水の上を蔽へる夏木立の蔭いと涼しといふなるべし。○みもひもさむし。水も冷かにて心地よしの義。水を何故にもひと稱ふるぞといふに水は盃といふ器に盛りて飲料とするものなればその器よりやがて轉れるなり。守部氏の「入綾」に於て「こゝも人も飲み馬にも飼ふ故にいふなり」とてこの「もひと」といふ語を飲料としての水の名にいへるはよき考といふべし。主水司、主水正の官名はた御水四毛比ヒ（豊受宮儀式帳）などあるは何れも盃に盛る上につきての水の名なると明か也。○みまくさもよし。御鉢もよしの意。即ちこゝは木蔭縁に水涼しきのみならず其下に生ひたる若草はた水の流れなど駒を飼ひ馬を休むるによしといへる也。○一首の意は飛鳥井の流れの清く涼しく緑陰滴るが如く行旅の人こゝに宿りて駒を休め身を息むるによしと也。されば原歌の意は夏の馬旅の歌なりしならんも民間にこそを諷誦するに至りて何か當時に寄する處ありしなるべし。入綾の説の如く諷刺の意ありとする方適當ならん。

青柳あおやなぎ 二段

一段

あをやきを、あをやぎを、かたいとによりてや、オケヤ、うぐひすの、オケヤ、

二段

うぐひすの、縫ふてふかさは、オケヤ、むめの花かさや。

○この歌は古今集卷の廿所載の神樂の返し物なる青柳を片系によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠と同じものなり。おもふにこの歌奈良朝の終り或は平安朝の初期頃に無名の歌人によりて詠み置かれしが人口に膾炙するに至り終に催馬樂に取られ次で古今集のうちに選ばれしものなるべし。兎に角その歌調の織巧にして所謂手弱女の姿なる點より見れば確かに平安朝短歌の系統ありといふべし。古今集春歌の上に鶯の笠にぬふてふ梅の花をりてかざさん老かくるやととあるを以て見ればこのころ鶯の笠にぬふ梅の花と

いふことは上下一般に行はれし歌想なりしならん。而してこの歌は嵯峨天皇の皇子左大臣源常公の詠なればこの催馬樂歌も其頃あるは其以前のものなるべし。○あを柳をかた糸によりてやオケヤ。春もやうく霞深うなりて柳の眉の開きそめたる頃そを片糸に縊りてといふ意にて誠に優美なる思想なり。片糸とは縊り合せざる糸にていと細き上品の糸なり。柳を糸に譬ふるは古今集時代の思想にしてその例いと多し。歌想としては面白きものなり。○うぐひすの縊ふといふ笠は。うぐひすの縊ふといひしは前にいへる如く此頃の流行語と見るべし。鶯の花間に飛び移るさまを笠に縊ふと譬へたるはその囀鳴飛翔するさまの恰もかの梭の機ハタの經糸の間を飛ぶが如く見ゆればならん。○むめの花笠や。花笠といふ語につきては二つの異なりたる説あり。藤原清輔の奥義抄には鳥のこちよげに枝より枝に木づたひありくをぬふといふなりといひ入綾は梅の花の五葩並びて中の窪めるさま笠によく似たりといへり。清輔の説はまほまかにしていと宜しきやうなれど古今集時代の歌を説くにはあまりに單純に過ぎたり。入綾の説こそかへ

りてこの時代の纖巧なる思想によく適ひたるものといふべきなれ。されどなほ一步をすすめていはゞ梅の花瓣のさまの鶯の笠にふさはしさものなるべけれども實は當時の人の梅花を賞玩する心の深きよりこの花に最も親しき鶯を以て來てその縊ひたる花と漠然と比喻したるものなるべし。「花笠や」の「や」は歎辭にして「よ」と同じ意なり。歌尾にこの「や」の字あるが爲め古今集に載れる返し物の歌より遙かに流風餘韻あるが如く思はる。讀む人はいかに思ふらんものれはしか信ず。○一首の意は元より明かなり。たゞこの歌はこの時代のよろしき歌もしるき思想なりといふことだけを記憶すれば可なり。

伊勢海 一段

いせのうみのいせのうみの清きなぎさのしほがひになのりそ
やつまん貝やひろはん玉やひろはん。

○この歌はいせの海の清きなぎさのしほがひになのりそやつまん貝や拾は

んといふ歌に玉の一句を添へ且つ初句を繰りかへして調へし曲也。格調の整ひしよき歌なり。こは前にいへるが如く今日宮庭にて行はるゝものなり。○い○せ○の○海○の○清○き○渚○に○。伊勢の海の清き渚の詩的なることはいと古くよりいひならひし者と見えて續後拾遺集に載れる六歌仙の一人なる大伴黒主の歌に伊勢の海の渚を清みすむ鶴の千年の聲を君にさかせん又後撰集に載れる少將内侍の歌に人はかる心のくまはきたなくて清きなきさはいかで過ぎけむとあり。紀州の白良濱播州の明石の浦津の國の難波など、並び稱せられたる歌枕なるべし。さて渚とは波打際をいふ。○しほがひに。潮か間なり。○なのりそやつまん。なのりそは海藻の名なり。○かひやひろはん玉やひろはん。伊勢の海の波打際のいと清くして美しき真砂面白き貝などいとさはにありけんを貝や玉やとつゞけていひしなり。○一首の意は表面にあらはれたるが如く伊勢の海のいかにも清く美しきに同感して叙景兼叙情的に歌ひたるものなり。されどこの歌を解して只その一面の意味のみとせんは餘に興なきわざなり。俗謡の特質なる戀歌と見る方よろしかるべし。

かの萬葉集卷の二に夕さらばしほみちきなん住の江のあさかの浦に玉藻荇りてなとある歌と同じくなのりそ貝玉などを女と見るべきなり。またその原歌はたとひ戀歌ならざりしとせんも催馬樂歌としては戀歌の意に諷誦せられしなるべし。この歌今日より見ればその比喩あまりに珍しきものならねど其頃にはいとよき思ひ附きなりしなるべく又その音調は今日と雖も吟咏の中に大に面白きものあるなり。所詮催馬樂歌中の白眉といふべし。

庭生にはなまゐ 一段

庭におふる庭におふるからなづなはよきなゝりハレみやびとのさぐるふくろをおのれかけたたり。

○からなづなは。辛齋なるべし。齋は俗にいふペン／＼草三味線草なり。正月の六日の夜雪間を搔きわけ摘み來りて七日の粥に入れて祝ふ者なる人のよく知れる處也。○みやびとのさぐる袋を。大宮人の腰に下ぐる袋をの意也。さて其袋は何によりて作られはた何の料に撈ふる者なるか明かな

らず。古圖に三角の袋を下げし由なれど委しうは知れず。まかしこゝに袋のこをいひしは薺の實の袋に似たれば也。○一首の意は何になるか確かならず。よき菓といひ袋を自分も掛けたりと喜びたる邊何事か諷詠したるが如くしてまかも糺糊として明かならず。とにかく時事をよみたる童謡といふべし。されど参考までに極の假定説を述べれば、薺を以て自己に譬へたる者と見れば見らるべきなり。今其意によりて解き試むれば、われ才識なきにあらず、大内に仕へまつれる公卿殿上にもをさをさ劣るましきなりとの意にて何にか當時人物を要せらるるとありけるに對して謠ひし者なるべし。

我門爾わがかど 三段

一段

わが門にや、わがかどに、うは裳の裾ぬれしたものすそぬれ、朝菜つみ、夕菜つみ、あさなつみ。

二段

あさな摘み、ゆふなつみ、わが名を知らまくほしからば、御園生の、みそのふの、

三段

みそのふのや、みそのふの、あやめの郡の、大りやうの、まな娘といへ、おとむすめとこそいはめ。

○うはものすそぬれ下裳のすそぬれ。入綾に裾糺ロムモンソウシ、糺裾シヨウキョなりといへるいとよし。げに上つ代には下裳といへばゆまさきのことなりしも平安頃には二重の裳ありて裾の下に更らに下裳を着たりしなり。さてこの二句にていかにも摘み菜にいそしむさまを見るべし。○あさなつみゆふなつみ。朝夕の食料に摘むなり。○みそのふの。眞園生なり。次の「あやめをいはん爲めの詞なり。○あやめのこほりの大りやうの。入綾に「あやめ」といふ郡の名いづくにもなし、こは戯れにいひし者にて實は御園生の菖蒲をめて、大領の乙娘眞名娘に譬へしものならんといへり。されど「あやめ」といふ郡名見えずと

てそは戯れなりといふは餘に斷定に過ぎたるにはあらざるか。もしはあやべ(讃岐國阿野郡の前名は綾部郡なり)といふを轉訛せし者なるかも知るべからず。はた又後ちには郡ならずとも大領などありきといへば史上に残らざる程の地名にあらざりしか。兎に角地名とする方穩かなるべきなり。さて大領は職員令に「大郡大領一人掌撫養所部_〇檢察郡領事餘准_〇此少領一人同_〇大領とあるにて知るべし。〇まなむすめといへ乙娘とこそいはめ。まなむすめは眞名娘なり。出雲國造神賀詞に「伊射那岐乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命」とある眞名と同じく親愛なる娘の意なり。おとむすめは弟娘にて末子は最も寵愛せらるゝ者なれば「まな娘」と同格に使ひしなり。〇一首の意は己が門邊に立ちいて、朝夕摘み菜せる美はしき娘に、ある若人わかうとが戯れて名を問ひしにその娘答へていふやうわれはこの菖蒲郡の大領の愛娘なりとなり。わがなををらまくほしからばとあるによりて見ればこの娘なかくに見識ありてさる若人の猥らなる心に従ふべくもあらずわれは身分よき大領の秘藏娘なる者をとその劣情を退けしさまいと著し。當時未だ理性發達せ

ず春風の吹くまゝに女子を呼はんとせし上代の風俗を見るべし。

我門乎 二段

一段

わが門をとさんかうさんねるをのこよしこざるらしやよしこざるらしや

二段

よしなしにとさんかうさんねるをのこよしこざるらしやよしこざるらしや

○この歌は「我門をとさんかうさんねるをのこよしこざるらしやよしなしにして」といふ短歌を繰り返したるものならんと「後抄」に云へり。げにさもあるべきなり。〇とさんかうさんねるをの子。とさんかうさんは左様ひだりさま右様みぎさまにて方向をいひたるものなり。方言に「上さに下さになど」と畧していへるも等しく方向を差したるものなり。「ねるをの子のねるは神樂歌の劔の歌に」なら

の都をねるはたが子ぞとあるねると同じ意にて徐々と歩くをいふ。諸所の祭禮に練り物と稱して花車などをそろく引きありくもこの意なり。さてこの總意は低徊不立左顧右望する男の子のさまを述べたるなり。○よしこさるらしや。愚按抄並に入綾の説にこは我が方へよりこざるらしやと女の思ふ心なりといへり。されどそは面白き考案とも見えぬ。後抄の如くよしこそあるらしやといふ方正しかるべし。そは万葉集卷の十四に志木の浦を朝こぐ舟はよしなしにくくらめかもよしこさるらめとあるにて明かなり。ぞありけるをざりけると約すること土佐日記にてる月のなかる見ればあまの川いつるみなとは海にさりけるなどあるが如く古しへよりいと多し。さればこの意は何か仔細あるらしと男の様によりて想像せし者なり。○よしなしに。その男は少しも故よしなきが如く扮すれども實はその中心に満々たる感情あるべしと也。○一首の意は一人の男の子が我が門邊を左行きかくゆき去らんと欲して去る能はず逡巡願望して緩歩するはわれに心を寄するなるべし。譬ひその表面には少しもさる氣色なきが如く装へども必

ず深く歸托する處あるに相違なきなりと女の思ひ浮べたるまゝを歌ひし者ならん。民間巷路の歌には此くの如きものいと多かるべし。有心の男有情の女相對して情緒燃ゆるが如き者あるを見るなり。男の子のこの女を垣間見てその清楚なる容姿その嬌艶なる音調に心を動かしたるはさるものにて女も亦た男の子の閑雅なる風采に思ひを寄せたるさま言外に溢れたり。

大路おほぢ 二段

一段

をほぢに沿そひてのほれるあをやぎが花や青柳の花や

二段

青柳がしなひを見れば今盛りなりや今さかりなりや

○こは大路に沿ひてのほれる青柳の花まなひを見れば今盛りなりといへる短歌を繰返したるものなり。○おほぢに。こは都の大路をさしたるものなり。奈良の都にても平安京にてもいづれにてもよし。まかしあをやぎの花

などいひ廻はせる點より見れば平安京の方とすべきか。平安京ならば朱雀大路をいひたるなり。古しへ都大路には柳櫻などを植ゑて風致を添へ行人の目を悦ばしたるものなり。古今集春の歌に素性法師が見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりけるとよみしはやがて平安の都のとなり。同じ集に西大寺の邊の柳をよめる僧正遍昭と題してあさみどりいとよりかけて志ら露を玉にも貫ける春の柳かとあるは奈良の京の柳なるべし。○そひてのほれる青柳の花や。そひてのほれるは九條より一條まで引き續き植ゑられたる柳をいへるにて途ゆく人の目に觸れたるまゝを叙べし詞なるべし。柳の花は支那の「柳絮」といふ語を譯せし者ならん。和泉式部の歌に「庭柳をりたがへるは長月の菊の花とも見ゆるなりけり」といふがあれど此歌にて「花」といひしは青柳のしなふ様を直ちに差したる者にていと珍らし。柳の糸などいふは諸集に見えて少なからず。○しなひを見れば。しなひは萬葉集にも細紗とある如く柳の糸の細く長くしてなよやかにして風に任するさまを歌ひたる者なるべし。○今盛りなり。こは萬葉集に有名なる青によしならの都

はさく花の匂ふが如く今盛りなりといへる歌の意と同じものなり。○一首の意は都大路に植ゑられたる青柳の春深くなるまゝに打ち煙りゆくさまを歎美して都の繁昌に比したる也。されどなほ深く考ふれば「入綾」の説の如く「大路」は祖父にて「青柳の花」は染殿の后に譬へたるものとする方面白かるべし。染殿の后は藤原冬嗣の孫良房の女にして文徳天皇の后清和天皇の御母なり。この后御祖父冬嗣にそひて入内せられ終に國母の尊き位に昇り給へばそれを諷誦したるものならん。古今集春の部に御父良房の太政大臣

染殿の後の御前に花瓶に櫻の花をさへせ給へるを見てよめる

前のおほきおほいまうち君

としふれば齡は老いぬしかはあれど

花をし見れば物思ひもなし

と詠まれたるを見ればやがてこの后のことをいひたるものなるべし。また「入綾」にこの歌を奈良時代の大路の柳をよみしものとすれば鎌足公の御孫光明皇后をいひしものならんといへり。おもふに史上にかゝる類を求むれば

その例少なからねど最も信憑するに足るべきは染殿の后の御上なるべし。さればこの歌は所詮は叙景詩のみならず叙情諷詠を兼ねたる巧緻なる作物といふべし。

大芹おほせり 一段

おほせりは國のさだもの小芹こそゆで、もうまし、これやこのせんばんさんたのきのゆしのきのばんむしかめのどうさいかくのさいひやうさいとさいりやうめんかすめ浮けたる切りとほし、かなはめ盤木五六がへしの一二のさいや、四三のさいや

○この歌は催馬樂歌中最も解し難きものゝ一なり。後世の俗謡にても解し難きものいと多し。おもふに解し難きといふことは凡て俗謡の一つの特色と見えたり。元來俗謡はその地方の方言を取り用ゐ且つその當時の人に最も感動し易き活語活きくしたる流行語の意を詠み入るゝが特色なるが上に吟詠諷誦の間に言語の轉訛増減自由なるを以て遙かに後世より之を解釋

せんと欲せば大に困難なるは決して怪しむに足らざるなり。殊に當時の事情は忘却せられたゞに忘却せらるゝのみならず俗謡に入るべきほどの些細なる事情は文書にも遺れるが少しまたその歌篇も多くは永く文字に寫されざるが故にますゝ意味の朦朧を來たすなり。たとひまた左程遠き歌ならずともかの近年行はれしきびすがんぐいかいどんすの歌の如きは全く難澁のものにあらずや。その他近松戯曲などに引用せられたる小唄の如き表面上よりは全然無意味として放棄せらるゝものなきにあらず。さてこの歌も以上述べたる如き難解の歌なりければこれまでの諸註たとへば「愚按抄」考などにはいつれも解さかたしとして高架に委ねられたり。されど橋守部の「入綾」には苦心慘憺の結果としてほゞ完全に近かき註釋を試みたり。さればこの一點に於ても守部の博覽強記にして一頭地を抜きんするを見るべし。かのまけじ魂なる熊谷直好の梁塵後抄にも此篇のみにはほとんど全く其説なく悉く「入綾」の説を引用せり。○おほせりは國のさた物。おほせりは大芹にて小芹に對したる名なり。されどこゝにて大芹といふは博奕にたとへた

るにて「枲蒲」を大縷といひ雙六を小縷といふと入綾に見えたり。而して博奕の名稱につきては書言故事に「公子トウ」トウ「蕤家モトシ」モトシ「蕤合テカシ」テカシ「銀事モトウ」モトウ「乞頭ツケ」ツケ「縷子コヘリ」コヘリなどありといへり。また文明年間に書ける負博奕といふ書にも張シヤウ「半乘ハナカマ」ハナカマ「追縷オヒキ」オヒキ「前縷マエヒキ」マエヒキ「後縷ノチヒキ」ノチヒキ「懸カケ」カケなどいへる名義も見えたり。今俗にいふ「せりあふ」せりうりなどこの語より轉じたるものならんか。國のさたものは國禁の義なり。「御詔」御定書百ヶ條などの「定詔」など同じ意にて禁制のことなり。さて枲蒲とはいかなるものなりしかといふにこは元と支那より傳來したるものにてその采四本ありてその面を黑白に分ち之に雉犢などの象を畫きそを擲ちて出つる處の品によりて勝負を決せしものなりといふ。そのさま今委しくは知る事をえざれども博奕として當時最も流行せしものゝ如し。後世「チヨボイチ」などいふは皆なこの語よりいてしものなり。この戲ますく「隆盛」を極め上下擧つて博奕を事とするに至り弊害百出綱紀紊亂を來たせしと見え博奕禁遏のこと國記に見えたり。その主なるものをいへば續日本記文武天皇元年七月の條また日本後記延暦五年七月廿八日の條など此れなり。その

他律令格式などに規定せられたるもの少なからず。(枲蒲の我が國に傳來せしは少なくとも武烈繼體兩帝の御世以前なるべし。何となればこれより先應仁帝の御世王仁などの來朝せしより三韓征伐を経て彼我の交通頻繁となりたるが上に塵添チヤウセン「檠抄」などにも双六天盃テンウヅ「日本渡來」ニッポンワライ(天監テンカン「梁武帝の年號」リヤウミョウテウノネンガウ「武烈繼體兩帝の御世」ブリョウケイタイリョウテイノミヨ)と見ゆればなり。塵添抄には双六とのみあれど枲蒲も共に輸入せられたるならんと思はるゝはこの頃支那にて最も行はれしは枲蒲なればこそ措きて双六のみを携へ來らん理なればなり。且つ北史の倭國傳にも倭人枲蒲を好むと見えたるはこの頃(推古天皇の御世に當る)我が國にこの戲の流行し爲めに彼國にまで聞えしゆゑなればなり。さて此の如く流行を極めし枲蒲の物に見えたるは万葉集に載れる數首の歌のみなり。しかしてそのうち博奕など書ける處は必ず枲蒲双六を合せいひたるものなるべし。又前にあげたる續紀後紀其の他の文に博奕などかけるところもやがて枲蒲双六を指せるものといふべし。○こせりこせりこをゆていもうまし。うましはうまけれとあるべき處なり。されど謠ひものなればかゝる破格あるなり。小芹は小さき芹と双六

と兼ねいひしものなり。即ち小片は煮ても美しといふこと、双六は小なる博奕なれば少し位は折檻せられてもして見たしといふこととの二意あるなり。さて双六も支那より傳はりしものにて前に述べし如く少なくとも武烈帝以前より行はれしものなるべし。双六を禁せられしことは持統天皇紀三年十二月一日の條を始めとして律令格式等に見えたり。要するに中古時代に於ては楞蒲と並び行はれしはこの戲なるべし。双六は二人相對して行ふ遊戲にして木盤あり盤上双方に十二の格あり各々十二の馬を置く二筒の采ありて各々竹筒に入れ敵味方互に振り出してその出でたる數ほど盤をすゝみて早く敵中に入るを以て勝とすといふ。この双六には種々の仕方ありて本双六、追ひ廻し、おりは等の名あり。○これやこのせんばんさんたのきの、これやこのの説は抄も考も宣長の考も何れも未だし。入綾の説最も肯綮に當れり。これやこのは全く下の詞にかゝるものなり。即ちこれやこの何々と下に列擧せんが爲めに用ゐるしなり。「せんばさんたのきは栴檀珊瑚の木の訛傳なるべし。いづれも双六盤の木材につきて歌ひしなり。双六のことは枕草

子蜻蛉日記等にも見えたり。されどこの歌の作られしとおぼしき奈良朝の頃とは大に其禁も弛められしが如し。○ゆしのきのばんむしかめのどう。ゆしのきのばんは柞すずの木にて作りたる双六盤をいふ。むしかめのどうは牟些食めの筒なり。むしとは采を振りて六六と二回引きつゝさいづるをいふ。而してかくいづるは乃ち勝利を博することをうべき兆なりとぞ。さればこの句の意はむしにて勝利をうべきやうに爲し食はせたる筒なるべし。○さいかくのさいひやうさいとさう。さいかくのさいは犀角にて作られたる采さいの轉音ひやうさいは平采またとさいは投采なり。さて後二者は双六の遊び方の名なるべし。○りやうめんかすめうけたるきりとほし。こは兩面に浮紋を附したる盤をいふ。さてかすめうけたるとは公より名ざしをうけたる意をも含めるなり。きりとほしとは面兩を切りたる盤をいふなるがいづれの双六盤にても兩面切らぬものなければ當時上下推し並べて双六の禁制を犯したることを諷したるものなるべし。○かなはめばんぎ。盤の四隅に金具を打ちはめたるをいふ。されどこは表面の意にて裏面のこゝる

はこのころ博奕禁止の令いとさはなればようせずば盤木の四隅に金具をはむるが如くその徒は身に鉗かぎを付けられんといふことを間接に歌ひしなり。
 ○五六がへしの一二のさいや四三のさいや。五六かへしの一二のさいは采の五六の裏は一二なればなり。こゝは双六の采を振る上につきて歌ひしなり。入綾の説の如く當時禁制厳しく公然輸贏を争ふと能はされば私に采を弄して聊か慰藉せしさまを詠ぜしものならん。○一首の意は元より明かなれど入綾にいとよく總意を述べたればそをあげ置かん。楊蒲などの大ぜりの博奕こそ國の大禁なれ双六などの小ぜりはあながち害にもならねばその事の忘れかたくてつらくその具を打ち守るに旃檀珊瑚柞の木の盤牟些喰の筒犀角のさい平養投賽とかぞへゆくに両面かすめ浮けたるうさ紋の盤の如くうすくわれらも名ざしにあづかれどこは切通しの盤の如く上下一同のとなればいかにせんこれやこのかなはめ盤の身に鉗をはめられぬともすべなしたと五六がへしの一二のさいよ四三のさいよと投げうちて心をやりをるなりとある此れなり。この歌のちもしろき點は當時の國史法制と相對

していかにその頃博奕の行はれしかまたいかにその頃の人民の博奕に對して嗜好を有せしかを見るに最も恰好のものなること此れなり。世の國史風俗史等を研究せんと欲するものは最もこの邊に意を致さるべからざるなり。

淺水 一段

あさんづの橋のとゞろくとふりしあめの舊りにし我をたれぞこのなかびと立てゝみもとのかたちせうそくしとぶらひに來るやサキンドチヤ。

○あさんづの橋の。淺生津の橋にて越前國の鯖江にある橋なり。そのこと宗祇方角抄また行囊抄等などに見えたり。題名に淺水とあるは淺生水ともかけば生を略してかきたるなるべし。○とゞろくと。轟く意なり。かくつゞけしはその響の絶えざるさまをいひしなり。○ふりし雨の。前の句と合せみれば淺水橋の橋板に雨のふりぎて轟くばかりに聞ゆる意なり。○ふ

りにしわれを。以上の句はこの句をいひ出さんが爲めの序詞なり。「ふりに
 し我とは盛過ぎたる女が自己のことをいひしものなり。○たれぞこのなか
 人たてて。誰れぞとは仲人を立てたる男に對して問ひかけたるさまなり。
 「なか人とは今いふ媒介人のことにて男女の間を取り賄ふものなり。○みも
 とのかたちせうそこし。みもとのかたちは御許の有様にて男の方の近況を
 指せるなり。「せうそこは消息の字を當つれど後世の所謂書簡の義にあらず。
 「おとづれ案内の意なり。即ち男が仲人をして自己の近況を報せしめしなり。
 ○とぶらひにくるや。訪問に来るよのこゝろなり。「やはよに同じく歎詞な
 り。○さきんだちや。これは拍子詞なること明かなり。されどその女がこの
 事實を公衆に告知する意を含めり。而して此の如く拍子詞を添へて廣く坊
 間に謠ふべきが如く詠ずるはこれ催馬樂歌の俚歌たる特色を備ふる所以な
 り。○一首の意は情交絶え姿色衰へたるわれを今更に誰しの人かふりはへ
 て仲人立てゝその近況を報し慰懃を通じて訪ひ來ますことよこゝだの人々
 よ聞いて給はれとなり。思ふに入綾の説の如く中絶えたる女に國守などの

再び通ひしを坊間にて諷詠せしものならん。これいふもの罪なく聞くもの
 以て戒むるに足るべきものといふべし。

挿櫛 一段

さしぐしは、とうまり七つありしかど、たけくのじよらのあした
 取り、ようさりとり、取りしかば、さし櫛もなしや、さきんだちや。

○さしぐしは。こは髮に挿す櫛をいふ。○とうまり七つありしかど。十あ
 まり七つ有りたれどの意。十といひ七といふもたゞ數の多きことを稱へし
 までなり。「とを」とうといふは謠ひ訛まりしなるべし。○たけくのじよら
 の。これは越前國武生の國府の掾のとなり。武生を「たけく」といひしは國語
 の性質上波行は加行によく通へばなり。掾とは地方官にして例の守介掾目
 のそれなり。さて掾の職掌は職員令に大掾一人掌糺判國內審署文案勾稽失
 察非違、餘掾准此少掾一人掌同大掾とあるにて知るべし。○あしたとりよら
 ざりとりとりしかば。朝夕に取りし故の意。「ようさりの」ざりは「ゆふされば、

「春さればなどのさりと同じくしありの義にて夜といふに同じ。『ようのうは例の音便にて添へしなり。〇さし櫛もなしや。今は挿櫛もなしと慨歎せし意なり。』やは例の歎詞。〇ささんたちや。『淺水に見えたる如く拍子詞にしてその義同し。〇一首の意は妾はいと美しき挿櫛を數多持ちたれど武生の掾の朝夕通ひ來て持ち去り給ひたれば今は一つの挿櫛もなきよささんだちやあはれとおぼし給へとなり。橘守部は神樂歌に見えたる『井奈野の如くはた脇母古の如く元來俗謠は比寓する所多かればこゝも櫛に准へて交接の數を戯れいへるならんといへり。殊に交接にはさすなる語を今も俗間に用ゐれば確かにしかるべしと附け加へたり。されど吾人もふにそはあまりに卑猥に附會したる説なり。こはその掾の好色家にして且つ貪慾家にして朝夕いとわづらはしきまでにその女のもとにかよふのみならずその女の財産までも横領せんとするさまを詩人が諷詠したるものなるべし。さればこの歌はこの意味に於て最も誦すべき諷刺詩なるべく當時地方官の國務を弛廢して色慾の巷に迷ふさま目に見るるが如し。』

鷹子 一段

たかのこは、まるにたうばらんや、手に据ゑて、あはづの原のみくるすの、めぐりのうづら、取らさんや、さきんだちや。

〇たかのこはまるにたうばらんや。鷹の子は余に賜はらんの意。『やは疑問にあらずして歎詞なるべし。』たうばらんは『賜はら』たはり『たはる』といふ動詞に『う』を添へたるものなり。〇手にすゑて。鷹は掌に載するものなれば『すゑて』といひしなり。〇あはづの原のみくるすの。『あはづ』は粟津にて近江滋賀郡にある地名なり。かの木曾義仲今井兼平などの討死せしもこの所なり。『みくるす』は御栗栖にて栗のいと多く生へたる御料地などをいふなるべし。『栖』とは今は木の實など出す處を總べていふとの話なれば栗栖は栗の實など産する栗林をいひしものならん。〇めぐりのうづらとらさんや。『めぐり』は周囲の意なれどこゝにてはその栗栖のほとりの義なるべし。『とらさんや』は『とらせんや』の方よかるべし。何となればこの歌の場合にては或る人が鷹の

子をして鶉を取らする意なればなり。入綾には、とらさんは「取らんの延びたるなりといへれどこは矢張り取らせん」と使役に用ゐたる方おもしろかるべし。○一首の意は何卒鷹の子をわれに賜はれかし粟津の原の御栗栖にまゐりて鶉狩致したければとなり。表面の意は此の如くなれど入綾のいへるやうに何か諷する處ありしなるべし。時代隔りたればそれと定かに明にひがたけれどいづれともよそへ難からざるべし。

逢路 一段

あふみちのしのをすゝきはやひかず、こもち待ちやかぬらん、
しのゝをすゝきやさきんだちや。

○あふみちの。入綾には男女の逢ふ路の義にて地名にあらずといへれど突然に冒頭よりさる方のみ意に稱へ出すも面白からねばやはり近江路の意なるべし。勿論男女相逢ふ意の含まれたることは明か也。○しのゝをすゝき。靡く薄の意なり。「小竹」篠なとゝかきて「しの」とよませ主に竹をいふ詞な

れどまた薄にもいひて「靡く」意に通用すればこゝは上の様の意味なるべし。

古へ人家少く田野多き頃には男女會合の場處は多く木陰などにてせし者なれば其歌どもいと多し。万葉集卷の七に「妹がり」とわが通ひ路のしの薄われし通はゝなびけしの原又同じ卷に「池の邊の小槻が下のしぬな苅りをねそれをだに君が形見と見つゝ忍ばん」とあるにて悟るべし。此歌にては薄を直ちに女に譬へたるにて「はやひかず」とは早く其女を薄を引き抜くが如く自己の者として領せずしてとの意に用ゐたる也。○こもちまぢやかぬらん。薄の穂を孕むを女の子を持ちたるさまに譬へたる也。堀河太郎百首に「秋風にはらむ薄のある野邊はうつしの露や色にまがへるまた夫木集卷の八に「夏ふかみはらみにけりなしの薄した道ひまとふ葛の帯して」とあるはやがて此の歌などによりてよみしものならん。其他古事記仁徳天皇の段の御製に「やたのひととすげはこもたず云々」とあるはやがて同じ意なるべし。○一首の意はわれらの相逢ひ相晤らふ其の近江路(逢路)に靡く薄(女)をわがものとしてわが家に引き取らさりしかば其女は遂に子を生みていと苦勞を重ねつゝ夜

毎日毎に吾の來るを待ちかねつらん人々聞いて下されと也。此歌別によし
 とにはあらねど兎に角當時切なる戀情にはかゝるもの多かりしなるべし。

道口みちのくち 一段

みちのくち、たけふのこふに、われはありと、親には申したべ、こゝ
 る合ひのかぜや、さきんだちや。

○この歌、道口のたけふのこふに我はありとちやには告げよこゝろあひの風
 といふ三十一文字を謠ひ調へたるまでなり。○みちのくちのたけふのこふ
 に。みちのくちは道の口にて京都よりちかさを口といふ。こゝにては越前
 の武生の國府のことをいへるものなれば越前を指してしかいひしなり。即
 ち古しへより越後をこしのみちのしり越中をこしのみちのなか越前をこし
 のみちのくちと稱へしなり。○ちやにはまうしてたべ。親に申し上げて下
 されの意にてたべは賜へと同じ語なり。○心あひの風や。心あひとは魂あ
 へる友などいふ魂あひとちなじこゝろにて己れの心を知れる同情ある風よ

の意なるべし。入綾に心あひは親と子との中をいひてその心あひの方へ吹
 きつけてよとの義といへるはわろし。たゞしこゝの意はその人が風にあつ
 らふる詞なりといへるは勿論その意なるべし。○一首の意はわれゆくりな
 くも家を出て、多年東西に流離漂泊せしかば我が兩親は定めて我を思ひて
 花のあした月の夕絶えず憂に沈み給ふらんわれに同情ある魂合へる風
 よ希くばわれのかく越前武生の國府に健在しつゝあることを告げて下され
 かしわれも他郷にありて父母の君のいかにわれを思ひ給ふらんと想へば空
 恐しき不孝の罪に堪へかたき心あるものをあはれ人々よ察して給はれとな
 り。世のさがにかゝづらひて遠く遊べるものいかでかこの情なからましや。
 抒情詩としてまたよろしきものゝ一なるべし。

更衣こころえ 一段

ころもがへせんや、さきんだちや、わがきぬは、のはらしの原萩の
 花ずりや、さきんだちや。

○衣がへせんやさきんたちや。衣がへは夏冬などの衣がへにあらずしてただ衣の穢れたれば清き衣と更へんと也。さきんたちやは前にもいふ如く催馬樂歌はもと巷路の俗謡なれば廣く人にきかす體裁上よりかくいひしにて人々よと軽く添へしまて也。○わがさぬは野原しの原萩の花ずりや。わが衣は妹がり通ふが爲めに野原篠原など歩きて萩の花にてよごれたるよとの意。かゝる思想は何れも万葉集時代よりほど遠からざるものにて万葉集卷の十にわが衣摺れるにはあらず高まどの野べゆきしかば芽木ほぎのすれるぞまた同じ卷にことさらに衣はすらじ女郎花さきぬの萩に匂ひてをらんとあるは其例なり。○一首の意は戀ひせぬ妹の戀ひしくて夜盡わかぬまでにとまめやかに野原しの原打越えて通ひつめしかばわが衣萩の花もて恰も摺りけんやうに色づきけるよこれにては他目もいと恥づかしければ清き衣と着更へやせましあはれ人々よとなり。こはもとより妹にあてゝそのつれなきをかこてりしなれど更衣といふ語にさるつれなき妹なれば衣をぬぎ棄つるが如くそを思ひ切りて他に心を移さましなどいふ意を含みたるものと説

くも不可なかるべし。思ふに此歌さる氣強き女のもとへ人して送らしたるものならん。下の句の野原しの原萩の花摺りやといへる續けざまいと面白し。

何爲いかんせん 一段

いかにせんせんやをしのかもととりいて、行けばおやはありくと、さいなめどよづまはさだめつやさきんたちや。

○いかにせんせんや。こはいかにせんいかにせん」と繰り返したる詞なり。歌ふ上にて省略したるなり。○をしのかもととりいていゆけば。をしのかもととりは、鶯の鳴取りにていと可笑しき云ひ方なれど鶯は鳴と相似たる水鳥にもありまた當時狩獵といへば鳴狩のことと聞えられたればかくいひしなるべし。たゞしこの語は次のいでいゆけばといふ句を引き出さんが爲め枕詞に置きしまでなり。即ち出ていゆけばは外出すればの義なり。○おやはありくとさいなめど。わが親は夜行するとておのれを折せらるれどの意。○よづ

まさだめつや。夜妻を定めたるが故にせんすべなきよのこゝろなり。夜妻につきては種々説あれども兎に角未だ正妻と定まらぬ女を云なるべし。眞淵翁の朝妻に對して夜妻といひしにて夜のみ忍ぶ女を云といはれしはあまりに字義に拘泥したる者ならん。たゞ夜妻とは夜毎に足繁く通ひ互に相寄り睦ぶ仲にてやがてはむかひ女となるもあるほどの者なるべし。かの万葉集卷十六に見えたる「あが門にちどりしばなく起きよくあが一夜妻ひとにしらゆな又神樂歌のうち酒殿歌に見えたる「庭鳥はかけろとなきぬなり起きよくわが一夜妻人もこそ見れなどいへる歌どもの中にある「夜妻はや、その意異なるべし。「一夜妻」といへば一時的の忍び妻の如くなれども「夜妻定めつや」といへば何にとなくその情交の深きやうなり。○一首の意はわが親はあのれの夜あるきするにつきていたく打ちしをりさいなみ給へどわれは愛しき乙女と相語ひ相約してこよひも妹許通ふべき等なるをあはれいかにかせまし思へばわれは親の命に背きわりなくも夜妻を定めたるよと也。此歌の終りに例の「さきんだちや」の句あるは「人々聞いて下され」といふ意にてその

男情通り意動きて胸腔亂ること麻の如かりしかばその懊惱を衆人に訴ふるさまを寫したる也。民間衢巷の歌として義理と人情との衝突を述べたるものにしてその假構の想術華の文なきは大に多とすべきものといふべし。

鶏鳴とりはな

一段

とりはなきぬてふけさ暗まぎれ下紐のをに、おしすがりゐてこそ、とゞこほれ、鳴く子爲すまで。

○とりは鳴きぬてふ。夜明けを告ぐる鶏鳴は聞えぬといふとの意。「てふは「ちふ」とふと同じく」といふの略なり。○けさ暗まぎれ。未だ夜の全く明けず人の顔などよくわからぬ暗まぎれにの意。○下紐の緒におしすがりゐてこそ。「下紐は下裳の紐にて多くは女の方にいひ下紐をとく」といふことを後世の「帯とくと云と同じ様に解することを常とすれどこゝは男の下紐に女の縋り居るさまにいひしなり。○とゞこほれなくこなすまで。「とゞこほれは停滞することにて女の泣き絶る爲めに男も後朝きょうのわかれいと惜しく別れ難く

途に時を移すさまをいふ。「なくこなすまては泣く子の親を慕ふが如く女の男に愛着せるをいふ。「泣く子なすはしたふ」ことたに問はすなとへかくる枕詞にて万葉集などに多し。○一首の意は隣の間のあたりにては夜は明けん鶏は鳴きぬなどいふ聲すなりおのれは人に知られぬうちに早く立ち歸らましとちもふに吾妹子はわが下紐にひしと取りつきて後朝の袂別のいみじう堪へ難きさまなればおのれも後髪引かるゝ心地してかくも停滯するなるよとなり。

老鼠 一段

西寺の、おいねずみ、わか鼠、おん裳つんづ、袈裟つんづ、けさつんづ、ほうしに申さん、師にまうせ、法師にまうさん、師に申せ。

○西寺の。こはいづれの寺をいひしものなるか明かならず。奈良時代ならば例の西大寺なるべし。しかしこゝにてはたゞ西寺といひしものと見る方しかるべし。○おいねずみわかねずみ。老若の鼠をいふ。寺の鼠は今も捕

らぬものなればいと老いたるものもありしならん。さてこゝにては奸臣父子などによそへたるものなるべし。○おんもつんづけさつんづ。御装を嚙つ袈裟つみつの意にて老若の鼠がその鋭どき牙にて寺家必要の品をかむさまを述べたるなり。つみつは啄食と同じ語類にして啄食はつみばむの義なり。○法師に申さん師にまうせ。鼠のかみなどせしさまを弟子などの見付けてこの由早く師の君に申さん否な早く法師に申さるべからずとさわざしさまに歌ひしなり。○一首の意はもとより表面上の意味のみにあらずしてかの西寺の老鼠若鼠を奸臣父子にたとへ鼠の袈裟の御装などを傷くるさまを奸臣の跳梁して皇室の御料の品々を掠め取ることに諷したるものにて官海當局の人々が未だこの事に注意せられざるを切齒して早くその人々に告げ知らせたしといふ意を俚歌に寓して民間に諷詠せしめたるもの也。催馬樂歌の特色、あらず一般俗謡のあもしろき處はかゝる點にあり。夜間鼠族の跋扈して貴重品のを毀損し己れも迷惑し人にも迷惑をかくること世にいと多かるをその鼠族に奸臣をたとへ殊に寺院の殘香零燼に餌を求むる鼠

族がその恩恵ある寺の住僧の大切なる袈裟を嚙むことを述べ奸臣が君寵を辱うしながらその御物などを掠むることのいかに悪むべきかを示したるは實にその對照に於ても最も巧緻なる趣味なりといふべし。

隱名一段

くぼの名をばなにかいふくぼの名をば何とかいふつびたり、けふくならたもろひのなかのひつきめなけふくならたもろ。

○この歌催馬樂歌中にありて最も淫猥にして最も説明を欲せざるものなり。抄は「下の詞どもつびたり」以下の詞をいふ未審尋ねべしといひ考はこの歌とくべきよしなしといひいづれも強ひて解釋せず。「入綾もさすがにそをしひて解むにはきはめて人わらへなるえせごと引きいつべきわざなり」と躊躇したり。されどまた今このうたなどはいとひがくしきさまにてことをあらはにいはいさゝし苦しきことつゝまし事どもあるべけれどそはかゝるうたひ物の常なればいにかにもせんともかくも心の底ひに打ち思ふ事をはぎにあげ

ていひ試むべしと奮勵して解釋せる處あればいまはそれによりて大略差支へなき限りをいひ置かんとす。○くぼの名をばくぼとは女陰の一名をいふ。新撰字鏡にも尿を久保とよめり。○なにかいふ。久保の本名は何ぞと尋ねしなり。○つびたり。即ちその本名は尿開とありとなり。○けふくなら。毛ふくれ糞にて男陰をいふ。○たもろ。賜はれの義にてたもれの轉語なり。たもれは四段活に働く動詞にして今も京都の口語には用ゐらる。○ひのなかの。尿の中の意にてつ略されたるもの。○ひつきめな。入綾にこはひつくめなにて尿つくめなの上略なるべし。口をつぐむなどいふ箱にて書紀には閉の字をつぐめとよめり。もしこの意ならば是も尿閉めんといふにてんをなといふは古言の格にて万葉に例多し。さて尿の中の尿とは俗にいゆる子孫といふものを指せるにて玉門の奥區をいふなりとあり。○一首の意は入綾に開の名を何とかいふその本名は奥たり。然らば毛陰糞賜はれかし。尿の中の子孫を箝めて子を生さんといふなるべしとあり。而して守部は陰陽和合の歌なるからに律と呂との間に置るゝならんといへり。

思ふにこの歌の意は守部氏の説きし如くなるべし。詞の省略轉訛多きは歌詠の間に變化したるにもよるべけれども一は始めよりかく訛りたるものなるべし。而して此歌の此處に置かれまた此歌の催馬樂歌のうちに取られたるはいかなるゆゑよしとも定め難し。先は凡て守部氏の説に依り置くになん。

呂

安名尊 三段

一段

あなたふと、あなたふと、けふの尊さや、いにしへもハレ

二段

古しへも、かくや有りけん、けふのたふとさ。

三段

アハレ、ソユヨシヤ、けふのたふとさ。

○呂は音樂上の名稱にして律聲に對して陰聲をいふ。○この歌は、あなた尊けふのたふとさや古しへもかくやありけんけふの尊さといふ短歌を繰返して歌ひなしたるものなり。○あなたふと、あなたは感歎詞「たふ」とは太占（たとまて）太幣（たとへ）の意。○いにしへもかくやありけん。上代も今日の如く尊くありしならん（たふとさ）の意なり。○一首の意は今日の御儀式を始めとして、ろくのことどものいと尊さよ上代この事を始められし時も此の如くたふとかりしならん（たふとさ）にかくにけふの尊く盛大なるさま誠に崇敬の念を發せしむとなり。こはもと大嘗會、豊明節會などの時に或る人の詠みて祝賀の微意を表しまつりしものなるべし。然るを後ち催馬樂曲の撰定せらるゝに及びて祝賀の歌なきは他かぬわざなりとて取り用ゐしものならん。さればその調雍和寛濶にして臺閣の風あるはまことに珍重すべきものといふべし。宜なるかな、この曲今日宮中に用ゐられ催馬樂歌中幸運なる地位を占むること。

新年 三段

諸物評釋 催馬樂歌 呂 新年

一段

あたらしき、新しき年の始めにや、かくしこそ、ハレ、

二段

かくしこそ、仕へまつらめや、よろづ代までに、

三段

アハレソユヨシヤ、よろづ代までに。

○この歌は「新しき年の始めにかくしこそ仕へまつらめ萬代までに」といふ短歌を謠ひなしたるものなること明かなり。さてこの歌は聖武天皇天平十四年正月十六日に天皇大極殿に御して宴を群臣に賜ひ御琴の御遊ありし時その琴歌にうたひたるものなり。この事續日本紀同天皇の紀に見えたり。また古今集の大なほひの歌には下の句を千年をかねて樂しきをへめとかへて採れり。○あたらしき年の始めに。新年の義なるべし。考には「これは初春をいふのみにはあらず久邇の新京にての事なれば相かねていふなるべし」とい

へり。されどこは入綾の説の如くこの時聖武天皇の御世の初めといふにてもなければやはり新年の意といふ方よからん。○かくしこそ仕へまつらめやよろづよまでに。かくしこそ「しは例の意を強めたる助辭なり。即ち全躰の意は今日此大殿に於て仕へまつるが如くこれより以後も代々永くわが大君に仕へ奉らんとなり。○一首の意は明かなり。此歌は「安名尊の曲と併び立ちて宮中典雅の賀詩として少しも遜色なき雅致あるものといふべし。

梅枝 三段

一段

むめが枝に、來居るうくひすや、春かけて、ハレ

二段

はるかけて、なけともいまだや、雪は降りつゝ、

三段

アハレソユヨシヤ、雪はふりつゝ。

○この歌は古今集春歌上に「梅が枝にさゝる鶯春かけてなけどもいまだ雪は降りつ」と同じものなり。○むめが枝に來る鶯や。わが庭の梅が枝に飛び來り居て囀鳴する鶯の意。○春かけて。入綾の説あり。その他古今集の註いと多かれどもいづれもよしといふはなし。たゞ景樹の古今集正義の説最も取るに足る。春かけては冬より春にかけて鶯のなけどものこゝろなり。○雪はふりつ。雪がふりつゝ重なる意にて雪の絶間なく降り來て春らしき心地せずといふなるべし。○一首の意は正義の説によりていはん即ち「梅が枝に冬より來る鶯のけふは春にかゝりてさへ鳴くに未だ雪はふりつ」と雪の春色を妨るをいとへる歌なりとあり。此解いとよく其意を得たり。

櫻人 二段

一段

さくら人、さくら人、その舟ちゝめ、しまつだを、とまちつくれる、見て歸り來んや、ソヨヤ、あすかへりこんや、ソヨヤ。

二段

ことをこそ、あすともいはめ、をち方に、妻さるせななれば、あすもさねこじや、ソヨヤ、しあすもさね來じや、ソヨヤ

○さくら人。こは、考の説の如く尾張國愛智郡佐良郷の人なるべし。離波人須戸人などいふと同じいひざまなり。行囊抄によれば熱田驛より鳴海驛までの間にある村なり。而して今は海より二十四五町もある處なれどその頃はこの村まで潮満ち來りしなりとあり。○その舟ちゝめ。その舟を止めよの意。「とゝめ」「ちゝめ」は母音の變化にて日本語にはこの例いと多し。さてこの詞は下二段の動詞なるが故に散文に於ては「よ」を添へて命令法とすべきなれども歌謡に於ては句調の上にて「よ」を省くも差支なきなり。○しまつだを。とまちつくれる。「とまちは前の句の如く」と「ち」にかよふ例もあれば「ちまちはあらずやとの説あれどさほどまでいはすともよろしかるべし。即ち島田を十町も作れる意に取りて不可なかるべし。○見てかへりこん。その田地を

見分して歸りくべしの意。○そよやあすかへりこん。「そよやは例の拍子詞。あすかへりこんは明日かへりくべしの意なれど意味の上よりは早く歸り來ん位のこゝろなるべし。以上は男がその愛せる女に向ひて約せる詞なり。○ことをこそあすともいはめ。詞に於てこそ明日は歸りくべしといへその眞實は然らざるべしと男の詞の氣やすめなるべきを疑へる詞なり。ことををことにの意に用ゐるとは古事記などにその例あり。○をちかたにつまさるせななれば。遠方に異妻を避け置く夫なればの意なり。さてこの句の意味、一わたり見る時は、妻とわかれ遠く去るとをさほど關心せざるが如き夫なればの意に聞ゆれどよく味へば實に上の如き意となるなり。何となればこの「さるは万葉集などに見えたる枕かたさり夜床かたさりの「さりと同じく又貫河に見えたる「親さくる夫の「さくると同じくして（後者は少しく云ひまはし異なれど）他にその物を避け置く意なればなり。○あすもさねこじや。「さね眞實の意。即ち明日も誠に歸り來るまじとのこたへなり。○しあすもさねこじや。「しあすはしあさつての「しにて明後日の意なるべし。○一首の意

は尾張なる佐良の郷の舟人よその舟止めよかしわれはおのれの持ちたる十町ほどの島つ田を檢分してはやく明日にてもわが愛しき妻のもとに歸りたきをと男のいへるをその妻なるもの宿にありてこれを聽きてわが夫の君は口でこそしか情深きとをいはるれまことは遠くあなたに隠し妻を聞ひ置き給ふほどの君なれば全くは明日は歸り給はじ否々明後日も必ずかへり給ふまじと述べしさまにして謠ひしものなり。當時の風俗はまさに此の如きものなりしなるべくまた俗謠の材料としては恰好のものなるべし。

葦垣 五段

一段

あしがきまかきかきわけて、ふみ越すと追ひ越すと、ハレ、

二段

踏み越すと誰れかたれか、このとをおやにまうよこしまうしし、

三段

とゞろける。このいへ、この家のおとよめ、親に、まうよこし、げらしも、

四段

あめつちの神も、かみも、そうしたべ、われは、まうよこし、申さず、

五段

菅の根の、すがな、すがなきことを、われは聞き、われは聞くかな。

○あしがきまかきかきわけて。入綾には葦垣も間垣も同じものにて、異名にて繰返したるものならんといへり。されど必ずしもしか取らずともよろしかるべし。葦垣はその文字の如く葦にて作れるもの、また真垣は間垣の意にて竹柴などにてあらく作れるものなればこゝは二種の垣根のこゝろに取りて或る女がその垣根どもを掻き分けて通ふさまに説く方面白からん。さて或る女とはこゝにては嫂などをいひしものなるべし。○ふみこすとあひこすと。陥み越す追ひ越すの義にてその嫂の垣根を越えゆきて密夫に通ふさまを歌ひしなり。○おやにまうよこしまうし。まうよこしの「まうはまう

し(申)の略言にてよこしに添へしものなり。「よこしは應神紀などに讒言を訓して「ヨコシマウサク」とあるが如く人を讒勝するをいふ。「まうし」の後の「しはきし」の「し」にて誰れ人が讒言爲しと受けし助辭なり。○といろける。この家のおとよめ。とゞろけるにつきては諸説あり。入綾にはかの讒言につきて家の内の鳴り轟きて騒かしきよしなるべしといひ後抄には繁榮なる大家の意にいひまた考には物さわかしき弟嫁なりといひはた抄には家の落ちぶれたる心なりといへれどいづれも當らず。「とゞろける」とはたゞその弟嫁の有名なるといふ意味なるべし。おもふに弟嫁の有名なりといふはその饒舌なる故にてもあるべし。弟嫁とは前に出てたる弟娘と同じ意味にて弟とは末子のこゝろなり。故に弟嫁は末子の家内をいふなり。末の子は愛せらるゝものなれば従うてその嫁も寵愛せられしなるべし。而して之に加ふるにその弟嫁の長廣舌を以てす。いかでかその讒言の聞かれざることあらんや。これ兄嫁の大に心痛する所以なり。以上兄嫁の怨恨して歌へるさまなり。○あめつちの神もそうしたべわれはまうよこし申さず。天神地祇も

證明して下され自からは決して讒言などしたる覺えなしとなり。後世の誓書に見えたる言語と同じ意味なり。これより弟嫁の辨解の詞なり。○すがなきことをわれは聞くかな。無情むじやうことを聞くものかなと弟嫁の歎きし意なり。○一首の意はさる處の兄嫁が夜毎よごとにその垣を越え、密夫ひそかごと構引することを一家内にて多辯の聞えある弟嫁が兩親の寵愛せるに乗じて讒しけるにその兄嫁大に怒りてわれは清淨潔白にして少しもその嫌ひなきにかの弟嫁の告げ知らしけることの怨めしさよといひしを弟嫁さへていなく、天の神地の祇も照覽あれ己はかけてもさる思はしき横しま言をいひふらしけん覺えなきものを兄嫁の其品行を願みずたゞわれの罪のみに嫁するとの氣強さよと答へしさま也。今此歌にて思ふに當時風俗頹廢人情浮華の頃なれば必ず此の如き有様なるべし。弟嫁の寵に乗じて跳梁驕慢なる兄嫁の間に乘じて節操を願みざる蓋し此頃的好畫題たるを失はざるべし。さて此歌の作者は其頃民間に潜める詩人にて其家の弟嫁兄嫁の身持の面白からざるを歎ちて知らぬが佛なる兩親、夫などに對して諷諫したるものならん。

山城 三段

一段

山しろの、こまのわたりの、瓜つくり、ナヨヤライシナヤ、サイシナヤ、うりつくり、うりつくり、ハレ、

二段

瓜つくり、われをほしといふ、いかにせん、ナヨヤライシナヤ、サイシナヤ、いかにせん、いかにせん、ハレ、

三段

いかにせん、なりやしぬらし、瓜たつまでに、ヤライシナヤ、サイシナヤ、うりたつまでに。

○山しろのこまのわたりのうりつくり。山城の相樂郡狛村の邊の瓜作りの意也。その地名は和名抄及び行篋抄に見えたり。此地古しへより御園などありて瓜を作り供御に献りしとありしなるべし。曾丹集に、うり植ゑし狛野

の原の御園生のしげくなりゆく夏にもあるかな又拾芥抄に五月四日内膳式
 供早瓜山城國相樂御園所供也とある證とすべし。その他猶の瓜作りにつさ
 てよみし歌少なからず。○なよやらいしなやさいしなや。こは共に拍子詞
 にて其意明かならず。よく考ふべし。○うりつくりわれをほしといふい
 にせん。其瓜を作る人がわれを貰ひたしといふいかにせましとの意。思ふ
 に此女童なればさるとを望まずいと困うじたるさまなり。こは童女の瓜畑
 などにて其男にあひ強請せられたる處ありしなるべし。○いかにせんなり
 やしぬらし瓜立つまで。此句をば入綾にては男のいひたるものとして瓜
 立つを所謂破瓜の義に解して其男のいかにしてかは手に入れん今は破瓜す
 るばかりにはなりやしぬらしと歌ひたる者と解せり。されどそは守部氏の
 例の穿鑿深刻の弊なほ忌避なくいはゞ少しく牽強附會に失する同氏の弊に
 陥りしものにて従ふべからず。梁塵後抄の説の如く瓜立つは瓜の熟する意
 に説くをよしとす。さて若し此一句の意はいかにせばよからむ瓜の成熟す
 る頃となるべしとの意にて案ずるに其童女が瓜の成熟するまでに返事せよと

男にいはいはれしを早くも其時期近つきしかば處女心のいと狭く思ひに沈しも
 のなるべし。一首の意は明かなり。さて入綾の如くこの歌意を説かずは田
 夫野娘の自然的戀愛の一例を示めしたるものとしてなか／＼に面白かるべ
 し。入綾の説の如くならば引例淺膚用語淫猥にしてほとんど鼻を蔽はざる
 べからざるほどのものなり。俚歌の解釋輕々に看過すべからざるなり。

眞金吹 二段

一段

まかねふくまかね吹く、吉備の中山、おびにせる、ナヨヤライシナ
 ヤ、サイナシヤ、おびにせる、ハレ、

二段

帯にせる、細谷川のおとのさやけさ、ヤライシナヤ、サイシナヤ、音
 の、さや、おとのさやけさ。

○この歌は古今集神あそびの歌のうちかへしもの、歌に見えたるまがねふ

くさびの中山帯にせる細谷川の音のさやけさと同じものにて仁明天皇承和元年大嘗會の御時の吉備國の歌なり。而してこの歌は万葉集卷の七に見えたる大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさといへるを本歌としたりものなるべし。○まがねふく。金のいづるといふ意味なり。まがねのまは例の添字にてたゞ金のことなり。吹くはその山よりいでたる金を鍛冶が鞆にて吹き分くるをいふなれどやがてその材料の金のいづることに通ひて説かるべし。○さびの中山。こは備前備中の境にある山にして松むらむらと生ひてそのほとりに細谷川ありとぞ。方角抄に見えたり。○さびにせる細谷川のちとのさやけさ。山麓を恰も一條の帯の如く流るゝ細谷川の水音の潺湲としていと清亮なるよとの意なり。○一首の意は細谷川の水勢のいと静かにしてその音のいかにもいと妙にさやかなるさまをめでゝ歌ひしものなり。而してその細谷川が眞金の吹くてふかの有名なる吉備の中山の麓を帯の如く廻りて流るゝさまを述べたるは誠に叙景詩としては上乘の結構なりといふべし。讀み了はりて景物目前に髣髴たるを覺ゆ。

紀伊國 二段

一段

きのくにの紀の國のやしらの濱に眞しらの濱に、おりゐるかもめ、ハレ、その玉もてこ、

二段

風しも吹いたれば、なごりしも立てれば、みな底きりて、ハレ、その玉見えず。

○しらの濱に。紀州牟婁郡の名所なり。行囊抄南紀名勝志などに委しく見えたり。○ましらの濱に。こはしらの濱に「ま」を添へたるのみ。前にあげたる「ゆり花」さゆり花など、同じ格なり。○おりゐるかもめ。下り居る鷗よの意。○その玉もてこ。その玉持ちて來れよかしの意なり。この二句の調子神樂歌に見えたる閑野末の歌「天なる雲雀よりこやひばり、富草持ちてといふにいとよく似たり。○風しも吹いたれば。風も吹きたればの意。「吹い

の「い」は「吹き」の音便なり。○なごりしも立てれば。その風はやうく吹き止
 みたれどその餘波が立ちたればの意なり。即ち「なごり」は風和きたる後ちに
 立つ波をいふなり。○みなそこきりてその玉見えす。水底打ち霧りてその
 玉の在處定かならずとなり。霧といふ詞は萬葉集源氏物語に見えたる古語
 なるがこゝにては水底の混濁せることをいひしなり。○一首の意は紀伊國
 の白良濱邊に下り居て打ち遊べる鷗よその水底にありといふなる白玉持ち
 來てくれよかしと或る人のいひしに鷗答へていへらくけふは風いたく吹き
 たるに其風静まりて後なほ餘波さへ立ちさわしかば海底打ち疊りて少し
 も見えす切角の御望みなれども玉をまゐらすべきやうもなしいと口惜しう
 こそなどいひしさまの歌なり。こは前にもいへる如くかの「開野の雲雀の歌
 の如く擬人法にしたるが第一におもしろくまたその裏面に何者か寓意した
 ることあるが次にをかしく感ぜらるゝなり。兎に角表面丈の意味の歌とし
 ても白良濱邊の鷗といひ水底の白玉といひ何となく清艶にして松青く砂白
 き處渚には鷗の打ち群るゝあり磯邊には白玉の砂に交じれるあり海邊の絶

景目前に幻ずるが如き感あり。

葛城 三段

一段

かつらぎの寺の前なるや、とよらの寺の西なるや

二段

えの葉井に、しら玉しづくや、ましら玉しづくや、おしとんど、おし
 とんど、

三段

しかしてば、國ぞ榮えむや、わいへらぞ、富みせんや、おしとんど、と
 しとんど、おしとんど、としとんど。

○この歌は光仁天皇潜龍の御時天皇の天位に即き給ふべきを兆して民間に
 て歌へる童謡なり。○かづらぎの寺の前なるや、とよらの寺のにしなるや。
 葛城寺及び豊浦寺につきては諸説ありてまちくなれども入綾の説による

をよしとす。即ち葛城寺は豊浦寺の一部分にして豊浦寺は葛城寺その他の
 總稱なるべし。行飛抄に「元興寺ハ飛鳥村ノ西南久米寺ニ行ク方ニ在リ。豊
 等村ノ内ナリ。春ハ四門ヲ建テ四ノ額ニ掛ケタリ。扁シテ曰ク東門ニハ飛
 鳥寺西門ニハ葛城寺南門ニハ元興寺北門ニハ法滿寺ト云フ。境内方廿二町
 餘。最坊舎數十宇有リシトナリ。今ハ僅カニ二間三間ノ瓦葺御堂ニ御丈一
 丈ノ釋迦佛の銅像一軀昔ノ餘波ニ殘レリ(中略)。豊浦寺トイフ是レナリ。」と
 あるにて知るべし。さてこの句は榎葉井の位置を定むる爲に云ひしにて
 即ちこの井は豊浦寺と總稱する寺院の西にして其の一部分なる葛城寺の前
 に當る處にある者也。而して葛城寺は豊浦寺の西門の側にある者なればこ
 の井は要するに豊浦寺の西方にある者なるべし。○えのはゐに。榎葉井に
 て何か井のほとりに榎などいと繁く榮えたる處よりの名ならんか。この井
 の場處につきては行飛抄に「榎葉村ハ小山村ト豊等村トノ間飛鳥村ノ西ニア
 リ。名所ナリ。今モ其井アリ。」とあるにて前句とよく符合するを見るべし。
 續紀に載せられたる童謡の方には「櫻井」とあり。こは「榎葉井」の誤りなるかは

た稱へかへし者か定かならず。とにかくに大和志などに「榎葉井」は「櫻井」の一
 名なりと明確に記載したるは大早計の考といふべし。○あ。ら。玉。ま。づ。く。や。
 白玉の水中に沈みしが上よりよく透きて見ゆるさまをいふ。故に「まづくは
 沈透シトケの意なり。これ入稜に説く處なり。されど「まづくは下しもづくなりといふ
 方自然なるが如し。下づくとは水底に付き居るが外面よりよく見ゆるさま
 にいひし詞なり。即ちその玉にも光ありその水も清きこと推して知るべし。
 さてこの句及び前の句は光仁天皇及び皇妃井上内親王の御上を比興したる
 ものなり。續紀の編者がかの童謡の後に書き加へたる文章を見れば蓋し思ひ
 半に過ぎん。即ち「子時井上内親王爲妃、識者以爲井者則内親王之名、白壁爲天
 皇之諱、蓋天皇登極之徵也」とある此れなり。こゝに少しく注意すべきは天皇
 の御諱は白壁なるに白玉と歌ひしはやゝいかゞはしく聞ゆれどこは一つは
 天皇の御徳の白玉の如くいと光輝あるに譬へしものなるべくはたまた白壁
 は白壁と文字よく相似たるが故にかく稱へかへしものなるべし。○あ。し。
 と。ン。ど。警蹕の聲にて拍子詞に使ひしなり。されど人を制し止むる意を合

めり。そはとまれかくまれ拍子詞と軽く見て置きて差支なかるべし。とんとんどは、ちしとんどの語尾と合はす爲めに、ちしとんどの頭字を換へたるのみにて別に意味なし。○まかしてば國ぞ榮えむや。まかしたらば國家も繁榮せんの意。即ち白玉の如き才德兼備にまします光仁天皇を皇位に即け奉らば國家の進運知るべからずと國民の期待しまつるさまをいひしなり。○わいへらぞとみせんや。吾が家等は富貴せんよの意。○一首の意は葛城寺の前にして豊浦寺の西に當れる處にいと繁茂せる榎の葉井あり。而して其水底に沈める白玉にはいとくすしき光あり。今この白玉を世に出さば國家隆盛家内繁榮すべし。いかてこの玉を光なき世に輝かさばやとなり。されどこは表面の意にて裏面にはかの仁慈海の如き井上内親王と伉儷ましましける白壁王は英邁明達の御聞えいと高し。かゝる御方の世にいて給はばいかに國家は繁榮すべきまたわれら臣民の家々はいかに富貴繁昌すべき。あはれわが大君の天位に即き給ふ日の待ち遠ほしさよなどいふことなるべし。童謡として俗謡としてはた比喩諷刺の歌として最も巧妙なるものなりといふべし。

ふべし。

竹河たけがは 二段

たけかはの橋のつめなるや、はしのつめなる、花ぞのに、ハレ、

二段

花ぞのに、われをば放てや、われをば放てや、めざしたぐへて。

○たけかはの。竹河は抄考などには専ら河内國の地名なるべくいはれたれどたがへり。入綾に引ける行獲抄(江間氏親著元祿年間の書)の説最も委し。即ち竹河は伊勢國多氣郡齋宮村にある川にてそのうちに笛川、花園などいふ地名も遺れるなり。行獲抄に齋宮村。三村並びてありしが今は一村となれり。編笠を多く造る所なり。齋宮の舊跡は通町の左にあり黒木の花表の形もあり。宮なし。笛川の橋今は三間許の小橋なり。多氣川は齋宮村の並の西の方なり。竹川の橋とて橋あり。笛川の同流なり。源順集に貞元元年のはじめ齋宮の侍従の厨には八月廿五日庚申の夜人々参りあひ

てあそぶにいはひの心を神代より色もかはらぬ竹川のよゝを君にぞ敷へわ
 たらんとある此れなり。されどこゝに注意し置くべきはこの説たゞに氏親、
 守部のみによりて始めて稱へられしにあらず、早く契冲法師の河社にその考
 説あることなり。守部氏の博學言こゝに及はざりしは知らざりしかはた知
 りて云はざりしか兎に角遺漏なりといふべし。○橋のつめなるや。橋の詰
 は端と同じ意なるべし。物の極端の義なり。妻戸のつま亦た同じ。○花ぞ
 のに。こも又行飛抄に、多川橋云々花園村此村に今も花園といふ田畠の名あ
 り。これ昔の齋宮の花園なるべしとあるこれなり。○われをば放てめざし
 たぐへて。われに窈窕たる少女を具してこの自然なる花園に放ち給へかし
 との意。「めざし」は神樂歌の朝倉の處に見えたる語にてそこに委しくいひ置
 けり。○一首の意はもとより明なり。竹川のいと青く流るゝ處これに架せ
 るいと風雅たる橋あり。その橋の極まるどころ百華その艶を競ふ御苑ある
 が見ゆ。時は陽春四月の頃花飛び蝶驚くの節遊子一たびこゝを過ぎらば誰
 れか低回佇立の情に堪ふべけん。いはんや茲は齋宮のいと清うして居ます

べき御所のほとりなれば男子は元より禁制なり、從ひて御召使を始めとして
 女子のみ多くいつれも沈魚落雁の面影あれば希くばその一人と相携へてこ
 の自然の美を極はめたる花園に遊びたしと歌ひしものなり。さてこの歌元
 來餘情あり曲折ありといふものならねど竹川といひ花園といひ「めざし」とい
 ひ情景目前に湧出するが如き感あらしむるものは思ふに凡手の作ならざる
 を知るべし。

河口 かはぐち 二段

一段

二段

かはぐちのせきのあらがきや、せきのあら垣や、守れども、ハレ、
 まもれども、いで、我れ寐ぬや、出て、われねぬや、せきのあら
 がき。

○抄にこの歌は古今六帖に見えたる川口の關の荒垣守れども出て、わがね

ぬまぬびくといふをかへて諸ひしものならんといへり。されどは守部のいへる如くこの歌謡の方が先きにおいて六帖のはこれより採れるものならん。○河口の關のあら垣。河口關につきては諸説あれど伊勢國壹志郡の地名なるべし。「あら垣はあらくしき垣の意にて考の説の如く間を置きて木を並べたる透垣すゐがきなどいふものならん。入綾は釘貫とて古しへ關所などに用ゐし柵の如きものならんといへり。○まもれども。兩親などのその息子の狂遊びせぬやうに垣塀などの出口くを固く守れどもの意なり。○いでわねぬや。かく親人の警戒を加へ給へれどわれは巧みにまされ出てわが思ふ女といねたるよとなり。○この歌の意はいと明かなり。河口の關といひいでたるはたと守れどもといはんが爲めに序詞に用ゐたるものなり。この歌源氏物語藤末葉の卷に於て夕霧大將の歌はれたることあり。就いて見るべし。

此殿者 二段

一段

このとはむべも富みけりさき草の、アハレさきぐさのハレ

二段

さき草のみつ葉四つ葉の中に、との作りせりや、とのづくりせりや。

○この歌もどこの殿はむへもとみけりさき草のみつば四つばにとの作りせりといふ短歌なりしなるべし。○この殿はむべも富みけり。「むべは諸の轉なり。奈良京の語平安京に入りて多く轉訛せり。ことに「うまうめなど皆な「むまむめ」となれり。この語も亦た同じ例なり。この句の意はこの御家は實に富裕なるが明かに見ゆとなり。○さきぐさの。さき草はいかなる草なるか明かならず諸説あれど不詳なりとする方よろしかるべし。兎に角三葉四葉といはんが爲めの料なり。さればこの草古しへよりめでたき草として稱美せられ其芽さし三葉四葉なりしものならん。○みつばよつばのなかに。

「みつば四つばは抄の説の如く三棟四棟といふ意なるべし。三間四間といふ説はよろしからず。何となれば古代家の大小を比較するに幾間の家とはいはずして幾棟とおぼまかにいひしこと明かなればなり。今にても田舎の大家の價值を數ふるに家幾棟藏何個田地何町といふにて知るべし。入綾にはこの事につきて委しく引證立論せり。大に参照の値あるべし。○一首の意はこの家の富貴繁榮を極むること至れり盡せりといふべし、何に故ぞといふに次第く、にその住居を三棟四棟と建て増し行きて子々孫々いと賑々しく暮しつゝあればなりとなり。おもふにかゝる種類の歌は俗謠にはいと多き題目なるべし。而かも一村の富豪のうへを諷詠するにその富貴を極めその繁榮を盡せるを見て大にこれを悦びて温藉雍和なる思想を披瀝したるは洵に鮮かるべし。さればこの篇を見て何人もその富豪の仁慈の徳に富み積善の餘慶を受けたるものなることを會得すべし。故にこの點に於てこの歌まことに健全にして光明なる思想を有するものといふべく戀情以外諷刺以外催馬樂歌中大に珍とするに足るべきものなり。

此殿西このとのく 二段

一段

このとのく、此のとのく、西のにしのくらがき、春日すらアハレはるびすらハレ、

二段

はるびすらゆけど、ゆけどもつきず西倉の垣や、にしのくらがきや。

○くらがき。倉の垣の義なれど、入綾の説の如く倉の多く連続せる處よりやがて倉垣といひしなるべく、まことの倉を旋らせる垣にはあらざるべし。古語に、入垣「青垣山」とある如くそのもの、長く續ける處より名けしものなること明かなり。○はるびすら。春の日の長き時すらの義。○ゆけどもつきず。かゝる長き日を終日ありけども行き過ぎぬうちに日は暮れんとすとの意。○西のくら垣や。この語を繰返したるは日暮れ西の空の暗くなりたるをい

ひたるものにあらずや。こは少しく細密の研究に過ぎたらんが或はさる意
義なからじや。○一首の意は前の歌と同じく長者の繁榮を祝したる光明詩
なり。

此殿奥このとのおく 二段

一段

このとの、此のとの、奥のさかやのうばたまり、アハレ、うばた
まり、ハレ、

二段

うばたまり、我れを戀ふらし、こざかごゆなるや、こざかごゆなる
や。

○おくのさかやの。此の家の奥なる酒醸す舎の意なり。酒を賣る家にはあ
らず。いにしへ大なる家には各々酒造るところを備へしなり。○うはたま
り。こはうばたらめ、姥専女の轉訛にしても老女の義なるべし。即ちその

酒舎にて専ら酒造に従事せる老たる女をいふなり。されど、うばたまりをた
だうばたらめの轉なりとのみ説くは稍々あかぬ心地す。おもふにかく轉せ
しは酒の上澄ウラメといはんが爲めにわざとかくせしものなるべし。酒の上澄は
もとより之を漉し取らざるべからざる所、即ち老女にたとへたるものなるべ
し。○こざかごゆなるや。入綾は小賢肥こがしえなるやの意なりといへり。されど
小賢肥の義少しく明かならず。されど今は優れたる説なければ従ひ置かん。
要するにその女の小賢しきを嘲けりたるものなり。○一首の意はこの家の
奥なる酒殿に酒を醸すなる姥よ、われを戀ひしとてあこがるゝこそ片腹いた
けれ、その小賢しきにも程こそあれとなり。いづれの世にても酒造るほどの
卑しきものは老いも若きも色情にはしたなきものといふべし。かゝる題目
は今の世にいたるまでもその例いと多かり。

鷹山たかやま 二段

一段

たかやまに、鷹をたかを放ちあげて、をぐよしをなみ、アハレ、をぐ
をなみ、ハレ、

二段

をぐをなみ、わがす、我がする時に逢へるせなかもや、あへるせな
かも。

○たか山にたかを放ちあげて。高山に鷹を過ち逃がしての意。○をぐよし
をなみ。その鷹を再び招き寄する方便なくてなり。○わがする時にあへ
るせなかも。鷹を逃していかゞはせんと女の身にて思ひ惱める時うれしく
も夫の君に逢ひ申したるよのこゝろなり。○一首の意は或る女、兩親などの
留守に鷹を逃していと困うじむたるにかねて心を通はし、男の通りかゝり
たればその逢瀬のいとうれじきのみならずこの場合更らにうれしともうれ
しとのこゝろを述べしなり。されどその實はこの男の近頃女の許に立ち寄
らざるをいと怨しく思ひぬたるにゆくりなくも放れし鷹を逐ふ途中にて男

に逢ひたるをいたくよろこびて鷹を男にたとへてよみしものならん。即ち
その鷹の高山の上高く舞ひあがりていかにしても捕へがたきさまなるを男
の中絶えてとてもありし昔の情交に立ち歸へしにくきことにたとへ、さてし
か逢ひがたき男にこゝにあへるはまことに不可思議のことなればかの過ち
逃し、鷹も亦た舞ひもどることもなからずやはと今のよろこびと未來の望
みとを樂み寓して歌ひたるものなり。かく複雑の意を有するからにこの歌
含蓄餘情ありていとおもしろし。殊にその比喻のかけ離れたるは巧緻なり
といふべし。

美作 二段

一段

みまさかや、久米のくめのさら山、さらくに、ナヨヤ、さらくに
ナヨヤ、

二段

さら／＼にわがなわがなはたてじよるづ代までにや万代まで
にや。

○この歌古今集に見えたる水尾帝の大嘗會の歌みまさかや久米のさら山さ
ら／＼にわが名はたてじよるづ代までにと同じ物なり。○くめのさら山。
こはいま美作國久米南條郡にある山にて古の久米郡佐良莊のうちなり。こ
の歌枕につきて詠みし歌いと多し。左にその二三をいはん。後鳥羽院御製
に「音にきく久米の皿山さら／＼におのが名立て、降る笹かな」木下長嘯子の
歌に「おもひやる久米のさら山さら／＼にあられ降る夜の竹の下いほなど此
れなり。さてこの詞は「さら／＼」といはんが爲めの序詞に軽く添へしまで
なり。○さら／＼に。事新しくの意なり。○わが名はたてじよるづ代まで
に。わが浮名は永く後まで傳へじといふことゝなり。○一首の意は相思相
慕のわれらの間のことはいかて人知れずこそあらまほしけれ。万一浮名立
ちて後の世までもいひ囃されんはいと耻かしき極みなればとなり。おもふ

にこの歌男女いづれが詠みしものと見ても差支なかるべし。兎に角兩者の
情交の切なる處を表彰したるものといふべし。この歌もとは坊間の風俗歌
として行はれたりしをたま／＼清和天皇の御即位の時に當りて大嘗會美作
國の歌として取り用ゐられやがて古今集へも入りしものならん。

藤生野ふぢふの 二段

一段

ふぢふの、かたちかたちか原に、しめはやし、ナヨヤ、しめはやし、
ナヨヤ、

二段

しめはやし、いつきいはひしもしるく、時にあへるかも、時に逢へ
るかもや。

○此歌は藤生野のかたちが原にしめはやしいつきいはひし時にあへるかも
といへる短歌をいひ延べて歌ひしものなり。○ふぢぶのかたちか原に。

山城國相樂郡藤生村にある原野をいふ。「かたちが原は藤生野の或る部分を指していへる異名なるべし。○しめはやし。この詞につきて入綾にはしめとは中略童女のほどより行々わが物にせんとて傾し置くをいふ。はやしは取りはやしなどいふと同じくて榮す意なりとあり。されどしか深く説かぬ方よろしかるべし。しめはやしはその野を占めて樹木を植ゑたる意と取るべし。○いつきいはひしもしるく。こも入綾にはいつきかしづき來しも著くといへれどたゞ樹木を培養し來し功驗も著くといふ方面白からん。○時にあへるかも。時節到來の意にてかねく木材を藤生野に植ゑ置き丹精せしかば今大宮の御建築に用ゐられたりいと面目の至りなりとなり。○一首の意は上に述べたるがごとし。たゞしこの歌の真意は表面にあらはれたることのみにあらざるべく裏面に何事か諷詠する處ありしなるべし。ある忠節の士が日頃その手腕を鍛錬しつゝ靜かに時節を待ちしにその甲斐ありて今や奸臣退き名賢用ゐらるゝに至りしを欣びて謠ひしものにてもあるべきか。吾人の管見はかくの如くなれとも守部氏の入綾には左の如くいへり。

その取捨は讀者に任せん。しかし入綾のは例のあまり穿鑿に過ぎたり。入綾に曰くそのよそへたる意はたとへば藤原氏を藤生野に比しその姫君のかほかたちのすぐれ給へるをかたちが原といひなししめはやしはかねてより奉らんと申しはやしあきつるをいふ。いつきいはひしはかのにしき綾の中につゝめるいはひ子とよみたるやうにいつきかしづきいはひ來しよしなり。しるく時にあへるかもはそのかひありて入内の時運にあへるかなといふほととの心なりと。

妹與我 一段

いもとわれと、妹と我れと、いるさの山の山あらゝぎ、手を觸れそや、かをかをすがにや、かをまさすがにや。

○いるさの山の。この山八雲御抄にもその他類字名所集「名所考」松葉集などにも皆な但馬國の名所なりとあれどかの國にさる山なし。しかしてその他國にもこの名見えねば思ふに名所にはあらぬか。「入綾」の説の如くいさ

の「さ」は「かへるさゆくさ」などの「さ」の義にてたゞ山に入るといふほどの意なるべし。○山あらゝぎ。和名抄に辛夷和名夜末阿良々木とあり。それなるべし。この木一名「こぶし」といひていと高大なる木にて枝茂く夏の初めより梢頭に蕾を生じ翌年の春の末葉に先たちて咲く。その花六瓣にして木蘭に似て小さく多く白色にして紅條ありとぞ。案するにこの花香高さものなるべし。○手なふれそや。こはたゞその花に手を觸るゝこと勿れと制するだけの詞なり。○かをかをすがにや。香を薫らす爲めにの意なり。后がね「婿がね」かへりくるがになどの「がに」がね皆な同語なるべし。○かをまさすがにや。香を増さしむる爲めにの意なり。○一首の意はわが愛しき妹と手を携へて入り立つべき山の山關に手を觸れ給ふなそはわれらが袖によき匂を添へ増さんが爲めの料なればと他人のその木の匂に觸れてそを失はしめんことを恐るゝ義なり。この歌「山あらゝぎ」を以て妹に擬したるものにて男の中心恟々としてその若き美しき妻を奪はれんことを憂ひしさまなり。なほ一步進めていはゞかくその妹のうへを歌へるは一面に於てその妹の艶麗なるを誇

示したるものとも見るをうべし。

淺緑 一段

あさみどりや、濃いはなだ、染めかけたりと、見るまでに、玉光る、したひかる、しんきやう、すさかの垂り柳、まだいたるとなる、前栽萩、萩なでしこ、からほひ、したり柳

○あさみどりやこいはなだ。こは大路の柳の葉の濃き薄きあるをいひしものならん。「あさみどり」は薄き緑色、こいはなだは濃い花田紺色にて濃きみどりをいひしものなり。さて柳の芽さす順序よりいへば初め少しく肩廣げたる頃が最も緑濃くやうく裕かに延びゆくにつれて薄うなるものなるがこにてかくさかさまにいひしは其葉くの一つくにつきて云ひしにあらで全体的上より觀察して春や、深くなりて柳の枝葉打ち交はして緑色に濃淡を生ずる様を遠望して風詠したるものにしてかねて都大路の繁昌するさまを叙したるなり。○そめかけたりと見るまでに。染め掛けることにて即

ち染め上ぐるほどの意なり。○玉ひかる下ひかる。こは考の説の如く新京を賞めたる語と見る方よろしかるべし。「抄」の柳を美稱したる意と取られたる説はあし。○すさかのしたり柳。こは山城の平安京の朱雀大路の垂柳をいひしものなり。朱雀の大路に柳櫻をこきませて植ゑたるとは古今集などの歌にも見えたり。○まだいたむとなる。この説入綾にいへる最もよろし。「まだい」は「まだき」にて早くの意なり。「たむ」は「田居」にて田舎のとなり。後抄などは一本によりて又は田居所なる前栽云々といふを取れどもおもしろからず。さてこの意はかく楊柳濃花繁茂せる新京もやがて頽廢して田舎とならんと諷したるものならん。○ぜんざい秋はぎなでしこからほひしだりやなぎ。垂柳といふ語を繰返さんが爲めにこれらの名詞を連ねし者なるべし。されど全く無意味なる拍子詞にはあらず。ぜんざいは前栽にて庭前の植込みをいひ秋はぎ云々はその庭中に植ゑられたる萩撫子幹葵立葵を列ねたるものにて今はかく繁榮すれどいつかは八重葎となるべしといへる意を含めたるものなり。「垂柳は前句の繰返しにて意を強めしものなること勿論

なれどなほこの語あるが爲めに「前栽秋萩」の句が盛者必衰會者定離の理を示す意となるなり。○一首の意は新に經營せられたる平安京はその都大路に楊柳を植ゑその貴紳の邸宇には秋草時をえがほなれどいつかは曠廢して田舎と變するならんと歌ひしものなり。この歌諷刺詩として最も面白きものの一ならん。おもふにこれのよまれたるは桓武天皇遷都後おほく御代を経ざるほどなるべし。即ち新都の經營漸くその緒に就き街衢の繁榮隆々たる勢を示すに至りたれど人心なほ奈良歴代の帝都たりし大和京を慕ひてやがて大和に遷都あるべきを希望して歌ひし者ならん。なほまた他の方面より考ふれば當時平安京を廢して都を他地に選擇せんとせしとなどもありしならんか。兎に角新京に對して餘りに同情を有せざる者のよみし者なるべし。

青馬 一段

あをのま放れば取りつなげさをのまはなればとりつなげしの
 うざやのしのらざやのさをこがひこなるさいろんこまたいた

んこのたいきのわらはのさをこがひこなるさいろんこ

○あをのまはなれば取りつなげ。青の馬奔逸せば取り繋ぐべしとの意なり。
○さをのま。眞青の馬なり。こゝは同じ句を繰返す時たゞその始めを少し
かへたるまでにて異なりたる意あるにあらず。○しのいざやの。凌い眞箭
にて簡單にいはず箭のことなり。凌いは凌ぎの音便にて箭に短く羽を凌ぎ
羽といひ風を凌ぎゆくさまを形容する語あり。こゝも風を凌ぎゆく箭とつ
いけしなり。万葉集卷の十三にあつさ弓ゆ腹ふり起し凌ぎ羽を二つたばさ
みとあるはこの例なり。○さをこがひこなる。こは入綾の説の如く箭雄子の
孫なるの意ならん。箭をさとよみし例は万葉集に見えたり。こゝの箭雄子
とは矢をよく射る人をいひしものなるべし。○さいろんこ。眞郎子なるへ
しといふ。いろせいろはいろといらつめ皆おなじ種類の語なるべし。○ま
たいたんこのたいきのわらはの。この句の意は眞大膽子の大氣の童子とい
ふかと考に見えたり。まづはこれに従がひ置くべし。入綾に大氣といふは
多力の音便にて剛き童といへるものならんとの説はその方宜しかるべし。

○一首の意は入綾に青馬はなれば取りつなげ凌ぎ箭矢の箭雄子とて名高き
弓雄の孫なる眞郎子あり大膽不敵の大力の童の眞郎子よ其駒放れば取りつ
なげよかしといひて何事をか諷諫せしなりとあるよろし。

妹之門 一段

いもが門やせなが門行き過ぎかねてやわが行かば、眩笠のひぢ
がさの雨もや降らなん死出たをさ、雨宿り笠やどりやどりてま
からんしてたをさ。

○この歌は万葉集卷の十一に妹が門ゆき過ぎかねつ久方の雨も降らぬかそ
をよしにせむとあるを詠りて採れるものなり。○妹が門やせながかど。妹
が門の意なるを詞の調子の上よりせなが門と重ねたるまでなり。男の住め
る門までいへるにあらず。○ひぢ笠の雨もや降らなん。ひぢ笠雨とは俄雨
のことなるべし。こは抄の説の如く俄かに降る雨の笠もとりあへずして袖
をかづく雨なり。さてこの語いと面白き熟字なるがおもふにこの頃奈良の

末より平安の初までの成語なるべし。この意は例の万葉集卷の十二に「たゞひとりぬれと寐かねて白妙の袖を笠に着ぬれつゝぞこし」とある「袖を笠に着のこゝろなるべし。何となれば俄雨の降り来て笠なき時は袖を雨具にかへてしばし凌ぐとありしなるべくまたかく袖をかざするは脰を高く張るべき者なればなり。されど脰笠の語を用ゐるに至りしは此歌の本歌なる万葉集の歌に「久方の雨も降らぬか」とあるによりしものにて「久方を轉ぜしなり。考」は脰笠は久方を誤りたるなりといひ「入綾」に「袖笠を少し活用して脰笠といふ詞も出来しにや」といへるは共に面白からず。「雨もや降らなん雨の降り來よかし」といふ願望の意なり。「雨もやのや」は疑問にあらず例の謠ひ物の添語と知るべし。強ひていはゞ感辭ともいふべきか。○してたをさ。こは郭公のことなり。古今集俳諧歌に「いくばくの田を作ればかほととぎすしてのたをさを朝なく呼ぶとありて呼ぶといふとあれば雨を誘へ」と郭公に望みしなり。蓋しこの頃の諺ならん。「死出の田長は元來は賤の田長の轉にて農業を働むる爲めに鳴くものなりとの説あり。○あまやどりかさやどりやどりと

まからん。雨間凌ぎにやどり笠なき爲めに宿りその家に宿りて行かんと重ねていひしなり。○一首の意はわが最愛の妹の門を歩き過さかねて低徊願望しつゝある間に何卒雨の降れよかし——殊に願はしきは雨をさそふなる郭公よ若しわれに一片の情あらば心を籠めて村雨を降らせよかししからばわれはその俄雨に托して妹が家に宿るべきにあはれ郭公よわが願をかなへかしとなり。此歌前にいへる如く万葉集に本歌ありて全然の創作とはいひがたけれど能くそを換骨脱胎して別種の俗謠と化したるはまことに巧なるものといふべし。殊に「郭公」を用ゐて擬人法にしたる將た「妹が門」「脊なが門」「雨やどり」「かさやどり」してたをさなどの語を程よく繰返して流風餘韻あらしめたるは讀者に無量の趣味を感ぜしむるところなり。

席田せきだ 二段

一段

むしろだのや席田のいつ貫川にや住む鶴のいつぬき川にやす

む鶴の

二段

住むつるのや、住む鶴のちとせをかねてぞあそびあへる、よろづよかねてぞ遊びあへる。

○こは、席田のいつぬき川にすむ鶴のちとせをかねてあそびあへるかななどいへる短歌に拍子詞を添へ繰返しをなしたるまでなり。○席田のいつぬき川にや。美濃國席田郡なる伊津貫川なり。○住むつるのちとせをかねてぞ。その川邊に遊べる田鶴のいと樂しげにていかにも千代万代を經べきさまに見ゆるをいふ。「かねては万葉集などに豫をあてたり。即ちあらかじめ永き世を契るべきしるしの見ゆるをいひしなり。○一首の意はもとより明かなり。祝賀の意を含める滞りなき格調の歌といふべし。文治年間の節付本に元慶元年大嘗會の悠紀方の歌にて美濃國の風俗なりとあるはまことにその説の如くならん。

大宮 一段

おほみやの西のこんぢにあやめこんだり、さやめこんだり、さやめこんだり、タリヤリタンナ。

○大宮のにしのこんぢに。宮城の西の小路になり。小路は「こみちにてそを轉じて「こんぢ」といひしなり。○あやめこんだり「さやめこんだり。菅蒲込みたりを繰返せしなり。「さやめは「さあやめ」にて「眞菅蒲」の字をあつ。「こみ」を「ん」といふは「こんぢ」の例にて知るべし。○タリヤリタンナ。笛の譜なり。こゝはそを用ゐて結末の調子とせしまで也。○一首の意は大宮の西の小路に菅蒲がいたく込みあひたりと也。さてこの表面の意のみにては何とも解し難し。入綾に五月五日火災ありきもしさる時の前表にうたひたるかとあり。されど曖昧は曖昧として遣るなり。兎に角一種の童謠として民間に謠はれしものと見るの外なからん。然しまた一方より考察すればこの歌もと二段三段とありしを一段だけ遣りしものにあらじか。然らば菅蒲は何にかの題

目に譬へたるものなるべく、もしは一篇の變愛歌などにてはなかりしか。

總角 一段

あげまきやトウく、ひろばかりやトウく、さかりて寝たれども、まろびあひにけり、トウく、かよりあひにけり、トウく。

○あげまきや。あげまきのこととは神樂歌評釋の總角の條に委しく述べたり。今單簡にいはいは、あげまきとは總角の鬘に結ひたる十七八の男子をさすなり。○トウく、ひろばかり。トウトウは天治本に「止字止字」とある如く笛の譜を取りて調子を成したるものならん。「入綾」の如く「トウトウ」を強ひて「たふく」と正し空穂物語などに見えたりとて「數多」といふ意に説くはあまりに考へ過ぎたりといふべし。この一句の意は「尋ばかり」といふことにておのづからその間隔の廣きことを示したるなり。「數多の尋許」といふはあまりに冗漫ならずや。殊に後世の俚諺なるべけれども「寸延びれば尋延びる」といふことあれば「尋ばかり」といひて一尋に限らずいと遠く隔りたる意に用ゐたること明

かなり。○さかりてねたれども。避りて寐たれどもなり。○かよりあひにけり。こは互になびきあひたりとなり。万葉集の卷の二柿本人麿の長歌に「波のむたがよりかくより玉藻なすよりねし妹を」とあるより引かれたる句なり。故に「かより」とあれど「かよりかくより」の意にて彼此互に寄り合ふことなり。○一首の意は、妻が愛する總角の若人よりいと遠く隔りてねたれども互に心の通ふにや終に互により結びいねたりとなり。こは女より詠みいでし歌なること明かなり。この歌表面より見れば別に隔てられし理由など見えねどもふに俗諺によく用ゐらるゝ兩親、嫂などが制肘せしものなるべし。

本滋 二段

一段
もとしげき、もとしげき、吉備の中山、むかしより、むかしから、

二段
むかしから、むかしより、名の古り來ぬは、今の世のため、けふの日

のため。

○この歌は「真金吹」の曲と同じく仁明天皇承和元年大嘗會の御時の吉備國の歌にて「も」と滋きさびの中山むかしより名のふり來ぬは今の世の爲めとありしものなるべし。○もとしげき吉備の中山。木の繁茂せる吉備の中山の意なり。「入綾」に「も」とは木の一名なりとて考徳紀並に万葉集の歌をあげたれど「も」といふ語が直ちに「木」といふことにはならぬなるべく「梅の花」「櫻花」を各々それらが賞翫せられし時代に於て單に「花」と稱へられしと同じく「木の下」といふを「も」と略したるものなるべし。○名のふりこぬは今の世のためけふの日のため。吉備の中山の名所としてその名の頽廢せざるは今日の御世を祝せんが爲めならんとなり。○一首の意は仁明天皇の大嘗會の御時に當りて風景絶佳、新緑滴るが如き吉備の中山を題目として十分の奉祝の微旨を表したるものにてそのこゝろ明かなり。諷誦一番まことに雍和寛泰の詩趣渾々として湧出するを覺ゆ。

叢山 一段

みの山にしんじにおひたるたまがしは、とよのあかりに逢ふが
樂しさや、あふがたのしさや。

○こも仁明天皇承和元年大嘗會の御時悠紀方美濃國の風俗歌にて「みの山にまゝに生ひたる玉柏豊の明りにあふがたのしさ」とある此れなり。○みの山にまゝに生ひたる玉がしは。美濃山に繁く生ひたる柏の意なり、「玉かしは」とは「玉椿」「玉柳」などと同じ例にて稱へし語也。こゝに柏を取りしは美濃山の名物なりしは勿論なるべけれども柏は大嘗會の御時儀式にその葉を用るればなり。○とよの明りにあふが樂しさや。豊明節會に遭遇したるがいと嬉しきなりとなり。豊明節會とは大嘗會の翌日十一月の中の辰日に行はるゝ儀式なり。即ち天皇豊樂院に出御ありて前日(中の卯日)神前に奉りたる新稻を聞食し群臣にも宴を賜ふをいふ。「豊はゆたかなることの稱へことば」明は君臣御酒に酔ひて顔赤くなるをいひしなりとぞ。「あふがたのしさ」はその

柏が當代の大嘗會の御用にあひたるをうれしといふこととその國の人民たち
 が豊明節會にあひしがありがたしといふことゝを含み居るなり。○一首
 の意は「本滋」など、同じく奉賀の情を抒べたるものにてそのこゝろ明かなり。
 こゝに注意としていふべきは、豊の明りの「明り」とあふとが頭韻にておもしろ
 き舞あることなり。こは何にとなければど諷詠の間に愉快の情を起さしむ。
 催馬樂にはこの例多し。讀者よろしく類推すべし。

眉止之女 一段

おほみき沸かせや、まゆとじめ、まゆとじめ、眉とじめ、まゆとじめ
 や、まゆとじめ、まゆとじめ。

○おほみきわかせや。こは或本に「みまぐさとりかへ」とあり。されどこは入
 綾の説の如く「眉止之女」との連絡面白からず、また神樂歌の「其駒異本の句なる
 「みまぐさ取りかへ」といふと混淆したりと思はるればなり。さてこの句の意
 は大御酒を沸かせなり。即ち酒をよきほどに酎せよとなり。○まゆとじめ。

眉につきては二説あり。一は「まみのよろしき」といへば容貌の美きことゝな
 ればこゝはその女を美稱したる語ならんといひ、他は古代の女は多く眉を抜
 き取りたればこの女未だ若くして「眉」の延び遣りたるを差したるならんとい
 ふ。こは入綾の共に説く處なれども前者より後者の説よろしきが如し。何
 となれば「まみのよろしき」とは「眉」のよろしきにあらずしてその目付のよろし
 きをいひしなればなり。「とじめ」は「刀自女」なること明かなり。而して「刀自」は
 「戸主」の約にて一家の老婦妻女などをいひしものならん。されど後には追々
 轉訛して宮中の御膳部の女官または人に雇はれて家事に従事するものゝ稱
 ともなれり。さればこゝにても食事に使役せらるゝ下女の意なるべし。○
 一首の意はたゞその使へる下婢に酒をあたいめよと命するのみにていと明
 かなり。さてこの歌の眞意は戀愛の情を含めるものと見れば「眉止之女」など
 を繰返したる邊にありとも考へらるれどもふに實は祝賀の意に用ゐしに
 はあらずるか。即ちその家の主人にいとめてたき得意なることありて
 かく謠ひ出しゝにはあらずるか。がの神樂歌の千歳の曲に於て幾度もせん

さい「ちとせなどの語を繰返して祝賀の意を表したるといよいよ似たらずや。要するに何か意氣揚々たることありて主人歸宅後満を引いて下女を驅使するさま手に取るが如く見ゆると思ふはいかゞ。

酒飲さけをたうべ 一段

さけをたうべて、たべ酔うて、たふところんぞや、まうでくる、なよろほひそ、まうでくる、タンナ、タンナ、タリヤ、ランナ、タリチリラ。

○さけをたうべたべまうて。御酒を頂戴していたく酔ひしれてなり。「たうべは飲べの延音にて高貴より賜はる時に用ゐる語となりしこと、入綾後抄の説けるが如し。○たふところんぞや。撞と轉ぶ勿れとなり。即ちたふとな轉びその略轉音なり。こは入綾の説も後抄の論もおもしろしと見えす。○まうでくる。参り來るなり。おもふに酒の好きなるゆゑにまた他の家に行かんとするさまをいひしなるべし。○なよろほひそ。よろめく勿れとの意なり。即ち踉蹌蹒跚として倒る勿れとなり。○タンナタンナタリヤラン

ナタリチリラ。こは笛の譜に合せてそのよほくするさまを形容したるにて比類なき興味を興ふ。○一首の意はいと明かなり。當時の大酒家のさままことに此の如きものありしなるべし。

田中井戸たなかのゐど 一段

たなかのゐどに、光かれるたなき、摘めく、あごめ、田中のあごめ、タラリ、ラリ、田中の子、あごめ。

○たなかのゐどに。田の中にある水をたへたる處をいふなるべし。○ひかれるたなき。こは田に生へたる水葱にて其花春咲き紫色にていと美しければ光れるといひしなり。○摘めく。あごめ。その美しき花を摘めよ吾子女よとなり。「あごめ」とは吾が子の如く親愛して童女にいひかくる語なり。○田中のあごめ。こは下の句に見えたる田中の子あごめと同じくそのほとりをおそびありく子供を呼びしまでならん。田中といふは地名なりといふ説もあるよしなれど然らず○タラリ、ラリ。例の笛の譜。○一首の意は陶淵

明の所謂春水満四澤といふころ童女の清き水田のほとりをあそびありくを眺めて叙景的に詠ひ出し、ものならん。「入綾」は光れる田水葱とあるにてかの「葛城」の曲の如く何か諷する處ありしならんといへどそはあまりに穿ち過ぎしにはあらずや。按ずるにかの俗間行はると、咲いたく、連華の花開いた的の戯歌に過ぎざるべきか。

無力蝦ちからなきかま 一段

ちからなきかへる、力なきかへる、ほねなきみ、ず、骨なきみ、ず。
○ちからなきかへる。力のなき蛙かまなり。「かはづ」かへるを後世にては同じやうにいふめれど實は異なり。「かはづ」は古今集序にも、花に鳴く鶯水に接かまむ蛙の聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりけるとある如くかじか「河鹿」のことなり。「かへる」は「雨蛙」あめかま「蟾蜍」かまなどをいふなり。○ほねなきみ、ず。骨なき蚯蚓なり。○一首の意は表面よりいへばもとより簡單なるものなり。されどこはたゞそれだけの意のみにあらざるべし。「入綾」の説の如く

當時何事かありしにそれを防禦すべき職務のもの、氣骨なきを譏りし物か、また抄の説によれば蛙は蚯蚓を食とするものなればかく並べて勇氣なきもの、争ひにたとへしか。いづれも想像の説なれどまづは入綾の方眞に近がるべきか。要するに最も解し難き童謡の一種なりといふべし。

難波海なみのうみ 一段

なんばのうみ、難波のうみ、こぎもてのぼる、をぶねおほ舟、つくしづまでに、今少しのぼれ、山さきまでに、

○なんばのうみ。こは難波の海をいふなり。浪速なみはやを撥ねてよみしにあらで難波といふ漢字の音なるべし。○をぶねおほぼね。小大の舟が舳艫相啣くはみて浪波入江に競來る様なり。○つくしづ迄に。この句の上より見れば、つくしづは決して筑紫にはあらず。おもふに難波江より淀川にのぼる間にありし地名ならん。抄に筑紫船のつく處ならんとあるいとよし。「入綾」にこをうてるはいかゞ。○今少しのぼれ、山崎までに。山崎も淀川の岸邊なる地名な

れどこの句によりて見れば筑紫津より少し上流なりしならん。○一首の意は大船小船の難波江より淀川に溯るさまを叙景的に述べしまでなり。「入綾」に「今少しのぼれ」といふ句より考へてこは何事か諷する處ありしならん舟を山へのぼすなどいふ諺の心ばへあるべしといひたれども例のあまり深きに過ぎたる考案といふべし。案ずるに「入綾」の如く事毎に何かの諷刺あるやうに説かばすべての言語に皆な裏面の意あるべし。

鈴之川 一段

すゞが川、すゞが川、やそせのたぎを、皆人のめぐるもしるくや、時に逢へる、時にあへるかもや。

○この歌は「鈴が川八十瀬のたぎを皆人の賞つるも著く時に逢へるかも」といへる三十一文字を綾なしたるまでなり。○すゞが川。こは伊勢國鈴鹿郡鈴鹿山より流れ出る川なり。○やそせのたぎ。數多の瀬の瀧をいふ。瀬とは淺き處にて人の渉る處なり。こゝは幾度もく人の渉るべき處ありてそ

の末がやがて瀧となれるをいふなり。「行囊抄」に鈴鹿川は坂下明神より天の地藏まで二里ばかりの間蜿蜒として幾度も渉るべき處あるをもてまた八十瀬川といふといへるはまことにその如くなるべし。○めぐるもしるくや。その瀧をめぐれば必ず目的の場處にいづべしとのことなりしが實にその言の如かりきとなり。「しるく」に「いちなる語をそへて「いちしるく」といふも同じ意なり。されどこを「いちしるく」と働かすは誤りなり。○時にあへるかもや。わが願ひし聖代に遭遇したりとなり。○一首の意はわれくは大に磐根錯節の功を積みし甲斐ありてかの鈴鹿川なる八十瀬の瀧をめぐりめぐりて希望の地にいでし如くこの光榮あり雍和ある昭代に逢ひ奉りたりといたく欣喜するさまなり。この歌民間の俗謡として十分に聖帝登極などの折を雅頌し奉りたるものなるべし。殊にわが皇祖の鎮まります伊勢國の地名を用ゐ來りて詩形に入れしはいとふさはしきことといふべし。

石川 三段

一段

いしかはんの、こまうどに、おびを取られて、からきくいする。

二段

いかなる、いかなる帯ぞ、はなだの帯の、なかは絶えたる、

三段

かやるか、あやるか、なかはたえたるか、

○いしかはんのこまうどに。河内國石川郡の高麗人になり。こゝに高麗の歸化人を置かれしなり。○おびを取られて辛き悔する。或る女が高麗人に帯を取られて大に後悔したりとなり。○いかなる帯ぞはなだの帯のなかは絶えたる。その帯はいかなる帯ぞと或る人の尋ねしにその女之に對へてそは藍色藍色のや、薄きもの帯なりしが彼の高麗人に引かれし、爲めに中絶えたりといひし意なり。○かやるかあやるか中は絶えたるか。かやるかあやるかの意明かならず。「入綾」を始めとしてその他の諸註皆な従ふべからず。殊に「入綾」の説の如きは中に就て取るべきがやうにて實は何故にかく説くに

か定かならず。即ち入綾はかの問ふ人の詞にて悔るか背るか中は絶えたるかといふ意ならんといひ又かやるとかゆると普通ひあやるとあゆると普通へりもしこの意ならば帯を取られていよく悔ゆるか又その絶えたるにあやかりて本の男の中を絶えて高麗人に従ふかといふにやとまで解き試みたりと終に要領をえず。私考するにかやるかあやるかはもと同語を繰返したるまでならん。何となれば「かれ」あれ「通ずればなり。さて「かやるは「かやする」にてその「す」文字略されたるにあらずや。若し然らば次の如き意となるべし。即ちその高麗人に断ち取られたる半の帯を見事彼れに返へすことをうるか。またその帯を絶たれたると同時に全く高麗人と關係を絶つことをうるか。或る人がその女に揶揄的に尋ねしものならん。卑見實に上の如くなれどもとより妥當ならじ。よき説なければかくいひ試み置くなり。○一首の意は高麗人と相戀愛したる女が彼れのあまりに喃喃たるを厭ひて別離せんとするを彼れいたく憤怨してその帯を握みしに逃げん逃がさじの刹那に中絶えたり、その時或る人其女に冷笑的に尋ねていふやうさるにても帯を絶れしと

はいと惜しき事なりき、いかなる帯なりしにかといひしに女そまわが秘蔵する花田色の帯なりきと答へしかばかの人更らにからかひて、さる秘蔵の帯まで断ちし高麗人なれば一層その半の帯をかへして別る、方よからんげにその帯の絶えたる如く全く縁を切りてはいかゞされどさる断乎たる決心をなすをうるやといひしものなり。要するに高麗人の歸化してや、久しくなりしかばかく近隣の女と通ずるまでに至りしなり。

奥山 一段

おく山に、木きるやをぢ、木をやはけんづる、まきやはけんづる、木削んづるをぢ。

○おく山に木きるやをぢ。深山にて伐木する翁なり。木樵などをいふならん。○木をやけんづるまきやはけんづる。木を削るかとの意。「やは」とあれど反語にあらず。「ははたゞ」句調の上より添へしまでなり。「まきは」木と同じことにて繰返しの際に「ま」を加へしなり。「いさご」「まさご」の例にて知るべし。

○一首の意はもとより明かなり。されどたゞ表面丈の意にあらず、必ず裏面には何か諷する處ありしなるべし。しかしまた一方より考ふればこの歌元來二段三段のものなりしがその未失はれてかく不可解のものとなりしにあらずや。證するにこの歌文字以外に何等かの意ありしものと知るべし。

奥々山 一段

おく山に、木流すと木きるをぢ、木やと木やと、木をやはけんづる、まきやはけんづる、木けんづるをぢ。

○木なかすと木伐るをぢ。木を伐りてそを筏として川に流すことを務めとする翁の意なり。「木ながすと」とは「とて」の義なり。○木やと木やと木をやはけんづる。木よとて木よとて木を探し求めてその木を削づるなり。「やは」は前の歌に見えたと同意。○一首の意は前の歌の如し。何か諷刺せしものか或は二段三段の落ちしものなるべし。

我家 一段

わいへんは、とばりちやうをも、たれたるを、おほぎみ來ませむこ
にせん、みさかなに、何によけん、あはびさだえか、かせよけん、あは
びさだえか、かせよけん。

○わいへんは、とばりちやうをも垂れたるを。我が家には帳臺やうのものを
垂れ作りたればの意。元來とばりは戸張りにて窓などに垂るゝものちやう
は床上に張る几帳の如きものなれど催馬樂などいふ謠物には類似の語を連
續して句調の上より使用することあればこゝも帳臺位に説きてよかるべし。
○おほ君さませむこにせん。高貴の公達よわが家をたづね給へかしわが娘
の婿に取り申さんとなり。おほきみはもと天皇より諸王までをいふ名詞な
れどこの歌にては身分よき家の公達ほどの意に見るをよしとす。○みさか
なには何によけん。かゝる婿君を歡待する御料理には何にかよかるべきと
なり。○あはびさだえかかせよけん。御肴には石決明か榮螺子が甲贏か何
がよかるべきかとなり。甲贏は海中に生じて陰精なるが故にかく名くとい

へり。要するに公達の響應に陰門に似通ひたるものを列記したるなり。か
の土佐日記に、なにの芦陰にことづけんほやのつまのいすしあはびをぞ
心にもあらぬはぎにあげて見せけるなど、同じ洒落のさまなり。○一首の
意はわが家にはいと麗しき娘あり。そを盛装せしめしのみならず調度より
くさくのしつらひまで心を盡したり。特に我が娘の婿君と相睦れ相し親
むべき料の帳臺をも心を籠めていと清らに物したり。あはれやんごとなき
優さ公達よ幸に一顧の枉駕を賜はらば喜びて直ちに婿の君としてかしづき
申さん。さて婿君として迎へまつりての後の御あるじには何にかよからま
し。仰せのまゝに調へまつらんがまづあはびか榮螺子かがぜのうちぞふさ
はしからましとなり。思ふにこは入綾の説の如く何か諷する所ありしなる
べし。もしはさる高貴の公達に漁色の君ありてその逍遙セウヤウはやがて多くのた
はれめを誘ひ低聲微吟世の風趣を壞らんの傾向ありしかばさる無名の詩人
その淫猥の行爲を惡み倫理振肅の志を懷いて歌ひしものならんか。なほ催
馬樂歌律呂の結末をこの「我家」といひかの「隱名」といひ戀愛詩の甚しきものを

以て結びしはちもふにこの樂の俗謠なる所以によりしものなるべし。
 ◎さて以上律呂六十篇説き去り説き來りてこゝに愚見の一端を了せり。顧みれば催馬樂歌は前にいへる如く聲調として後世俗謠の先驅を爲し、こと多く、いとちもしろけれどその内容思索としてはまことに趣味いと狭く時に茫然として歎せざるべからざるものあり。ことに俚歌の常としてその大半の戀愛詩のみにして長上父兄の前にて口にする能はざるもの多數なるは到底健全なる文學といふ能はざるなり。さばれそのうちに可憐無邪氣の春風詩と巧妙都雅なる諷刺詩との存するあるはいと面白き處といふべし。いはんやその句調の變化といひ風俗の表彰といひ歴史地理の參考といひ後世文學への影響といひ大に尊重すべき價值あるをや。要するに催馬樂はその詩形短少なりとはいへその總數僅少なりとはいへ十分各種の學者によりて研究の對象とせらるゝに足るべきものといふべし。(催馬樂歌評釋終)

東遊歌風俗歌解題

一 東遊歌の起源・沿革・名稱及撰定

東遊歌風俗歌はともに記紀の歌謠を祖として神樂歌催馬樂歌の系統を引ける謠物の一種なり。今東遊の起源をいはんに「體源抄」などを始めとして樂家の記録にむかし駿河國有度濱に天女舞ひ下り歌舞せしさまを模して「東遊」中の駿河舞は出來たりとあればその起源はいと古きが如く見ゆ。殊に「童蒙抄」にはこの事跡を記し又後拾遺集には伊豫の三島明神に東遊して奉けるによめると題して能因法師の歌に「うとはまに天の羽衣むかし着てふりけん袖やけふのはふり子と見えさて又謠曲羽衣には白良といふ漁夫を點出し三保の松原に東遊の駿河舞を奏てしまに作りたればその事跡いよく疑ひなきさまとなれり。されどこの事跡は所謂他説の傳説にして丹後風土記に見えたる比沼山に天女の降りたりといふ話の附會なるべし。此の如くこの傳説は全然準據すべきものにあらざるが如しといへどもその歌調の上より觀察すれば平安朝の極初期のものなるべしと思はる。

これより後に述べんとする「風俗歌」とはその類を同うしてその時に於ては遙かに古きものなるべし。

「東遊」の起源は如上の時期に發生せしものなりと雖もこの語の始めて史上に見えしは「三代實錄」の貞觀三年三月十四日、東大寺大佛供養の條なり。その條にいはいく大唐高麗林邑等之樂、鼓鐘肆陣、絲竹方聲、先令内舍人端貌者廿人、倭舞次近衛壯齒者廿人、東舞と。おもふにこの頃は獨りこの樂の朝廷に用ゐられしのみならず佛寺の儀式などには外來樂と共に盛に奏せられしなるべし。その後宇多天皇の御宇、十一月の賀茂臨時祭を始められし時、東遊の舞樂を用ゐられたり。「大鏡」に、

この御門(宇多天皇)いまた位につかせ給はざりける時十一月廿餘日の程に、賀茂の御社の邊に應つかひ遊びありさけるに、賀茂明神託宣し給ひけるや、此の邊に侍る翁どもなり、春は祭多く侍り、冬のみじくつれく、なるに祭たまはらんと申し給へば、その時に賀茂の明神の仰せらるゝと覺えさせ給ひておのれは力及び候はず、おほやけに申させ給ふべき事こそ候ふなれと申させ給へば、力及びせ給ひぬべきなればこそ申せ、いたく輕々キヤウクなるふるまひなせさせ

給ひそ、さ申すやう近くなり侍りとてかいけつやうにうせ給ひぬ。いかなることにかと心得ずおぼしめすほどにかく位につかせ給へりければ臨時の祭せさせ給へるぞかし。賀茂の明神の託宣して、祭せさせ給へと申させ給ふ日、酉の日にて侍りければ、やがて霜月のはての酉の日臨時の祭は侍るぞかし。東遊の歌は敏行の朝臣のよみけるぞかし。ちはやぶる賀茂の社の姫小松よろづ代ふとも色はかはらじ、これは古今にいりて侍り。

とあり。また朱雀天皇の天慶五年四月將門純友が反謀の發報として石清水の臨時祭を起されし時にこの樂を奏せられたり。これも「大鏡」に位につかせ給ひて將門がみだれ出てきて御願とぞ聞え侍りしこの臨時の祭は。その東遊の歌、貫之のぬしのよみたりし、

松もおひまたも苦むす石清水行末とほく仕へまつらむ

とあり。かくの如く兩社の臨時祭に「東遊」を用ゐられしよりこの事永く常儀となりて今日にも及べり。而して兩社へ舞人參向の時はまづ禁中にて試樂ありまた

祭の翌日には還立カマヤケの舞ありしこと、江家次第「公事根源等」に見えたり。この外、天延三年(圓融)祇園臨時の祭の東遊歌にも、神の代の八坂の里とけふよりぞ君が千とせはかぞへはじむると、白石樂譜にあり。要するに、東遊といへる舞樂には、東遊譜と稱する現存の定譜あれどもまたその都度く、に新に製作せられしものも少なからざりしならん。さてこの樂の今日に至るまで奏せらるゝ所はいづこなるかといふに、宮中にては春秋二季の皇靈祭及神武天皇祭の日、また神社にては賀茂、男山、春日、熱田、氷川、八坂、北野等を重なるものとす。また「東遊譜」に載せられたる歌篇は悉皆用ゐらるゝなり。但しその歌どものうち、求子歌はその用ゐらるゝ場所により少しく詞を代へて歌ふなり。今、繁を厭はず参考として左に示さん。

○神武天皇祭の時

ちはやぶる、かみの前の、姫小松、アハレ、アハレノ、姫小松

○賀茂神宮にて奏するもの

ちはやぶる、神の社の、姫小松、アハレ、アハレノ、姫小松

○男山八幡宮にて奏するもの

君が代に、水底すめる、石清水、アハレ、アハレノ、石清水

○春日神社にて奏するもの

春日なる、三笠の山の、青山の、アハレ、アハレノ、青山の

○氷川神社にて奏するもの

氷川の宮の、みたらしや、みたらしや、アハレ、アハレノ、みたらしや。

○八坂神社にて奏するもの

かみの代の、八坂の、里の、けふよりぞ、アハレ、アハレノ、けふよりぞ。

○北野神社にて奏するもの

北野の、みやの、木綿たすき、アハレ、アハレノ、ゆふたすき。

この樂の沿革は右の如し。その委しきは参考書の條に擧ぐる所の樂家の記録等につきて知るべし。

「東遊」の名義はいかにといふに「歌舞音曲略史」に「東遊」また「東舞」ともいへり、これはもと東國の風俗歌にあはする舞なるが故にかく名づけたり。とあるにて明かなり。東遊歌譜中に「駿河歌」などある、その地方の風俗歌たるの證とすべし。「東遊」の「遊」の

義は「神樂歌評釋」などに説明したるが如く音楽の遊びのことをいひたるものなり。たとへば「東國ぶりの音楽」などいはんが如し。

東遊歌譜の撰定はいつ頃なりしかといふに天治の古本によれば延喜廿年十一月十日勅定とあればこれぞ第一の撰定なるべき。されど神樂譜催馬樂譜の最も古き撰定は奈良朝の末淡海三船に依りて行はれしことは既に「神樂催馬樂評釋」にいへるが如くなればこの東遊譜もその頃に稍々一定の順序に調へられしにあらじか。もししからばこれを以て最初の撰定といふべきなり。さて延喜廿年の勅定は神樂催馬樂にありては右近衛少將藤原忠房によりて成されしものなれば東遊歌も亦たこの人の手にまとめられしならん。また神樂催馬樂にてはその後一條左大臣雅信及四辻季繼などによりて増補修正を加へられたればこの歌も少なくともこれらの人々によりて改善せられしならんと思はる。然らば東遊歌は神樂歌催馬樂歌と同じく長き時代を経て絶えず修補練磨せられたる古樂なりといふべし。

二、東遊歌の分類、價值、及異本、注釋書、參考書

東遊歌の曲名は何々ぞといふに天治本の東遊歌譜によりて擧ぐれば次の如く五首なり。

一歌 二歌 駿河歌 求子歌 加太於呂之(大坂歌と)

今これを例によりて分類すれば戀愛の歌最も多きことを發見するなり。即ち五首のうち二歌、駿河歌、加太於呂之の三首は全く愛情を歌へるものなり。その他、一歌は神樂歌の「阿知女作法」の如く歌唱を促す意の序歌ともいふべく「求子歌」は神威の尊嚴を諷誦したるものなり。之によりて考ふれば東遊歌は最も俗謠の特色なる戀愛趣味を多く保てるを見るべくまた神社の頌歌並に序歌等を有する點より神樂等に大に接近せるを知るべし。要するに東遊歌はその性質に於て神樂歌及催馬樂歌の中間に立つものなりと論ずることをうべしと思ふ。

東遊歌の價值は如何といふに、こは神樂歌催馬樂歌の如くその思想の天真爛漫なるにあり、その形式の斬新なるにあり、その内容形式の俗謠の先驅を爲したるに

あり。五首のうち面白しと思はるゝは、催馬樂歌の場合の如く、戀愛を歌へるもの
にあり。即ち駿河歌の巧緻なる、大廣歌の高雅なる、まことにえがたき名吟といふ
べし。「求子歌」の如きも亦た戀愛以外、神嚴幽玄の妙を備へたり。

東遊歌圖 群書類從第三百五十所載

東遊考本 加茂真淵撰

樂章類語抄本 小山田與清撰

注釋書もいと少し。

東遊考 加茂真淵撰

樂章類語抄 小山田與清撰

參考書は神樂歌催馬樂歌のそれと大同小異なれど例によりてこゝにかゝげ置か
ん。

鄂曲抄 群書類從第三百五十所載

梁塵秘抄口傳集 群書類從第三百五十二所載

御遊抄 續群書類從第五百廿七所載

鄂曲相承次第 續群書類從第五百卅三所載

歌舞品目 藤原守中撰

體源抄 豊原統秋撰

樂家錄 安倍季尙撰

樂道類聚 辻昌名撰

教訓抄 狛近真撰

續教訓抄 狛朝葛撰

四譜教 岡本保孝撰

歌舞音曲略史 小中村清矩撰

謠ひもの、變遷 佐々政一撰

これらの參考書のうち最も手に入り易きは歌舞音曲略史、歌舞品目などいふ刊本
なるべし。その他は多く寫本ながら體源抄、教訓抄、樂家錄などは稍々參閱の便あ
り。これらは共に樂家の記録なれば熟讀玩味せば蓋し大に得る處あるべし。な

ほこの項につきては「神樂歌評釋」「催馬樂歌評釋」を參看するを要す。

三、風俗歌の起源、沿革、名稱及撰定

風俗歌はもと神樂歌採物、神樂を除く催馬樂歌、及東遊歌など、同じく坊間に行はれし俗謠なり。さればその始めは記紀萬葉の部歌より當時俚巷に諷誦せられし長短歌をば總じて稱へし名なりけむをその後同巧異曲の歌篇、遍く上流貴紳の間に行はるゝに至りてそれらを蒐集して一卷の歌譜を作りこれに特殊の樂調を加へしものを風俗歌と稱ふるに至れり。即ち今存する處の風俗歌譜此れなり。故に風俗歌といふ名稱はもとすべての俗謠を總稱するものなりしが後ちにこの風俗歌譜二十五篇を指示することゝなりしなり。かの古今集大歌所の歌の中に「近江ぶり」「水莖ぶり」「四極山ぶり」など、ある又大嘗會の時、悠紀主基の兩國より奉れる歌などいづれも風俗歌ならぬはなし。風俗歌の起源は此の如く漠然たるものなりしが平安朝の初めに歌譜を制定せらるゝに至りてこゝに新起源を作ることゝなれり。さてこの後の沿革はいかにといふに平安朝の間はしばらく宮中並に私

人の間に流行せしならんも遂に「朗詠」「今様」「宴曲」などいふ新樂曲に壓倒せられ鎌倉時代にはもはやその隻影だも見るを得ざるに至りき。今日宮中に於て神樂、催馬樂朗詠などの古曲はなほ洋々として當時の餘韻を語れども風俗歌のみは絶えてその歴史を繰返へすこと能はず全く絶滅の悲境に沈淪したり。かくの如く獨り風俗歌のみ現時に傳らざるは大に怪しむべしと雖もこれ決して不思議の事にあらざるべし。かの神樂歌、催馬樂歌その他の如きも元より俗謠即ち風俗歌に相違なかりしもこれらは「神樂」「催馬樂」などいふ特殊の名稱と風調とを具してはやく宮中の式樂とせられしかば永く保存繼續せられ風俗歌はもと特殊の歌調を存し又特殊の樂譜を興へられしものなりしもこれは宮中の式樂とはせられずたゞ永く「ふぞく」と稱へて一般の流行歌と同一視せられしかば今日にても坊間の流行歌が世人の好尚を逸し忽ちその生命を失ふが如くこの歌も新流行に逐はれて遂に樂曲を失ふに至りしならむ。たゞしその歌篇の風俗歌譜として今日なほ嚴然として傳唱せらるゝはむしろ大に幸福なりといふべし。

風俗歌の名稱も「ふぞく」といふ方正しかるべし。枕草子「歌は」の條に「ふぞくよく歌

ひたる」とある證とすべし。かの「風土記」を「ふうどき」といはず「ふどき」といふも同じ。讀癖なり。風俗歌譜の撰定は神樂歌催馬樂歌東遊歌など、同じ比なるべし。されど神樂歌以下の如くいとやく淡海三船などによりて調べられしにあらざるべくまたそれらの如く數回の改訂は加へられざりしならん。思ふに圓融花山兩帝の頃一條左大臣雅信が神樂以下に一大増補をなし、時にこの風俗譜を撰定せしにあらざるか。私考にこの説信に近からんとおもふ。また一説には延喜年間に定められしものならんともいへり。

要するに風俗歌は神樂歌催馬樂歌東遊歌など、同じく古雅なる俗謡として今日より大に推奨せらるゝにも拘はらず獨り微妙の樂曲を失ひしは實に惜しみても餘りありといふべし。樂家の舊記秘録などに之を復興すべき材料とすべきものなきにや。

四 風俗歌の分類、價值、異本、注釋書及參考書

普通に行はるゝ風俗歌譜によるにその曲名左の如く凡て廿五あり。そのうち常

陸の曲は二首あればその數すべて廿六首ある筈なり。

乎津久波 小山流木 玉垂 鶯鴛 之太乃浦 君乎置天 越方 小車
陸奥 甲斐 常陸 筑波山 月面 大鳥 奈末不利 荒田 安豆末知
菅牟良 知々波々 我門 伊勢人 加比加禰 奈利高之 八千止女
彼乃行

なほ又一本によりて左の三首を補へり。

乎之高倍 宇婆良古支 多々良女

されば風俗歌はこれらを總括して凡て廿九首ありといふことをうべし。今例によりて大體の分類をすれば次の如くなる。而してこの風俗歌も他の俗謡の如くまた戀愛情緒に關するもの最も多きを見るなり。第一、男女の戀愛に關するもの。これは凡て十四首あり。その名目をあぐれば 小筑波 鶯鴛 之太乃浦 君乎置天 越方 小車 陸奥 常陸第二 筑波山 安豆末知 菅牟良 知々良々 乎之高倍 多々良女 等此れなり。全體廿九首のうち殆ど半數を占めたるに注意すべし。第二、人事に關するもの。すべて四首なり。その名目は 小山流木

玉垂 甲斐 伊勢人 等の如し。第三、自然の風景などに關するもの。これも四首あり。月面 奈末不利 加比加禰 彼乃行 等の如し。第四、祝賀及儀式に關するもの。三首あり。常陸 我門 奈利高之 等の如し。策五、諷刺に關するもの。二首あり。大鳥 宇婆良古伎の如し。第六、神事に關するもの。これには荒田 といふ一首あり。第七、天女に關するもの。これも 八乎止女 といふ一首あるのみ。

風俗歌の價値に就きて簡單に之を批評せん、この歌は前述の如く先きに評釋したる催馬樂歌など、その系統發展を同じうしたるものなるを以てその價値の長短等に就きては既に「催馬樂歌評釋」の解題の條に述べたるものと大同小異なり。然れどもなほ一つ附け加へて申し述べたきは、この歌の總數が催馬樂歌の半數なるが如くその稱揚すべき歌篇も亦た半數以下にあるなり、又この歌か樂譜として永く宮中の式樂に列せられざるほどの者なればにやその思想聲調も少なからず下れるやうに思はるゝことなり。要するに風俗歌に附きて研究すべきことまたその價値の如何は「神樂催馬樂評釋」以下を參照して知了せられんことを望む。第

一戀愛に關するものに就きて面白きものをあぐれば「君乎置天に

君を置きて、あだし心を、我が持たばや、ナヨヤ、末の松山、波も越え、越えなむや、なみも越えなむ。

とその貞操を末の松山に比喩したる、越方に

をちかたや、かのかたや、安達の原に、たゝるからに、たゝるからに、うわるからに、おのをによする、さぬとしなくに、よせばよせ、よせばよせ、よそふる人の、憎からなくに。

と始めは處女の如く後には脱兎の如き婦女の戀愛を寫したる、小車に、

小車、にしきの紐とかむ、よひりを君ばせや、よやな、われしのばせよ、われ忍ばせ、

そよまさに、ねてけらしえ、月の面を、さわたる雲の、まさやけく見ゆ、こさやけく見ゆ。

と遊治郎の月朧に人靜まりたる夜妹許忍ぶさまを詠じたる、いづれも俗曲の俗曲たる處にして長短歌の企て及ばさる一種微妙の聲調あるを見るなり。第二、人事

に關するものにては、小山流木、玉垂、最も味あり。小山流伎に

こよろぎの磯立ちならし、磯ならし、菜摘む、めざしぬらすな、ぬらすな、
沖にをれ、をれ波や、

ぬろくも、きみがめすべき、めすべき、菜をしつみ、摘みて、ハヤ。

と少女磯邊に大君の爲めに海藻を摘めるさまを歌へる、玉垂に

たまだれの、をがめをなかに据ゑて、あるじはもや、さかなまぎに、さか
なとり、こゆるぎのいその、わかめかりあげに、

と漁人の生活を示したる、皆な當時の風俗の一斑を知ると同時に諷誦のうち津々
たる興味を感ずるを覺ゆるなり。第三、風景に關するものにては、月面に

月の面を、さわたる雲の、まさやけく見ゆ、

なばのつぶら江の、秋なれば、霧立ち渡る、なばのつぶら江。

と秋江朧月のさまを詠へる、また、彼乃行に

かの行くは、かりかくとひか、馬ならば、ハレヤ、トウトウ、
雁なら、なのりぞせまし、なをくはひなりや、トウトウ、

と、無邪氣に叙景したる、特殊の趣味ありといふべし。その他祝賀の意味あるもの
にては、我門に

わがかどのや、しだらこやなぎ、サハレ、トウトウ、垂る小柳、しだらかいてば、ナヨ
ヤ、垂る小柳、

しだるかいてばや、國を富みせむ、郡を榮えむ、里を富みせむ、わいへぞ富みせむ
や、垂る小柳。

と國郡郷里の繁榮を欣喜してよく催馬樂歌の「大路」と「葛城」とに酷似せる、また諷刺
の意味あるものにては、大鳥に

おほとりの羽根に、ヤレナ、霜降り、ヤレナ、誰れかさいふ、千鳥ぞさいふ、かやく
さぞさいふ、みとささぞみやこより來て、さいふ。

と何事かは知らねど何にとなく超脱にして深奥の暗示を含めるが如く見ゆる、い
づれも俗調にして而かも古雅、また掬すべき旨味ありといふべし。なほ附け加へ
て置きたきは「宇婆良古支」といふ一曲なり。これも「大鳥」と同じく諷刺詩の方に屬
するものにて時世相隔りたる爲めその何事を意味するかは全く知ることを得ざ

れどもその落想の突飛なる處またいひがたきの味あり。参考の爲めこゝに掲げて一餐に供すべし。

うばらこきの下にはひたひ笛吹く猿かなづいなごまるは拍子うつさりくすは、鉦鼓打つ。

何たる空漠の比喩にあらずや。風俗歌の内容のおもしろきもの大方此くの如し。その形式の如きは「催馬樂歌評釋」の解題の條に付きて仔細に参照あるべし。

風俗歌の異本、注釋書及參考書はあまり多からず。まづ異本よりいへば

群書類從所收風俗歌

樂章類語抄本風俗歌

風俗歌考本の風俗歌

等最も顯著なるものなり。その他樂家に傳唱せるものいと多かるべし。それらは追つて尋ねべきなり。次に注釋書は何ぞといふに

風俗歌考 加茂真淵撰

の一種あるのみ。而してその注釋も概要にしてまことに簡單なるを憾む。高田

與清はその著「樂章類語抄」のうちに精細に解釋する心組の如くなりしも終に果すこと能はざりしは大に惜しむべきことといふべし。尤もこの二者の外に注釋を試みまたは中途にて果さざりし人もありしやも知らねど吾人の寡聞なる未ださることを聞かず。大方の讀者諸君にして幸に知悉せらるゝ所あらば講者に告ぐるを吝み給はざれ。次に參考書は東遊歌のそれと殆んど全く同一なり。この評釋解題(二)の條に述べたる參考書を一覽あるを要す。しかしこれらの諸書のうちに就きて最も必要なるべきは

體源抄 豊原統秋撰

四譜考 岡本保孝撰

歌舞音曲略史 小中村清矩撰

等なり。この外に隨筆記錄論說などに風俗歌のことを記述したるものまた少しとせず。それらは精細なる歌謠史を編まんには決して看過せられざるものなるべし。なほ樂家の零細なる舊記などのうちには恰好の材料少なからざらむ。それらは順次收拾の必要あるべし。

東遊歌

一歌

を、を、を、はれな、手をと、のへろな、歌と、のへろな、さかむのね、
を、を、を、を。

○を、を、を、を。こは神樂歌のうちの阿知女作法にありし、於々々と同じく返答の詞なるべし。かの祝詞宣命などに見えたる「唯」の如きも亦たおなじものなり。歌謠の始めにこの詞あるは聊か穩當ならぬが如くなれどもこの詞の前に「はれな云々さかむのね」といふ命令文ありしものと見ることが得るが故にそれに對してその返答と見れば少しも差支なかるべし。要するにこの「を」を「はれな、さかむのね」とあり。○はれな。神遊考には歌節の辭なりと思ふ。されど愚考するにこは「あはれな、あ」の省かれたるものにあらじやと思ふ。なほ委しくはと始め單に「あはれ」といひ來りしをいつのほどにか「はれ」と略

さるゝやうになら後ちそれに「な」といふ感辭が附きしものならんと考へらる。若しさる辭なりとせばこゝの「あはれ」は極く輕き意味にしてほとんど發語または拍子詞ほどの意なるべし。○手をと、のへろな。琴笛の手を調へよといふ意なり。「と」のへろのろは今俗語にいふ「見る」などの「ろ」に同じく命令詞の「よ」の義なり。「な」は感辭にして輕く添へしまでなり。○うたといのへろな。歌を調へよなり。○さかむのね。盛んによき音をいふ。○を、を、を、を。は前と同じく返辭なり。○一首の意は琴笛を調へよ、歌謠を調へよ、心を籠めて盛なるいとよき音に調へよと命ぜられたるに答へて「唯唯」といひたるさまを歌ひしものなり。

二歌

を、を、を、わがせこがけさのことでは、アハレ、七つ緒の、八つ緒の
琴を、調べたることや、なを、かけや、まのかつのけや、を、を、を、を。

○わがせこ。わが兄子にて妻より夫にいふと男子どち互にあがめて稱しあ

ふとの二義あれどもこゝにては妻より夫にいひたるものと見る方俗謠といふ點に適ひたりといふべし。○けさのこゝでは。今朝調べたる琴手は何ぞといふにの意。○七つ緒の八つ緒の琴を調べたることや。七絃八絃の琴を調べたることよとなり。八絃の琴は古事記の顯宗天皇の條に見えたり。七つ緒などいひしは句調のために添へしものならむ。○なをかけやまのかつのけや。この二句未だその意明かならねど琴笛などの調べを促したるものなるべし。ををををとあるはやがてその返辭なるべし。○一首の意は明かなり。

駿河歌

一段

やうと濱に、駿河なる、うど濱に、打ち寄する波は、なくさのいも、ことぞよし、ことこそよし、

二段

なくさのいもは、ことこそよし、あへるとき、いさゝねなむや、なくさのいも、ことこそよし、

三段

あなやすらけ、あなやすらやすら、あなやすらけ、ねりのを、ころもの、

四段

そてを垂れて、あなやすらけ、ちとりゆゑに、濱にて、遊ぶちどりゆゑに、あやもなき、小松がうれに、あみなはりそ、あみなはりそ、

五段

いはたしたに、笠忘れたりや、いはたしたに、とのはりも、しるくもかなや、笠まつりかむ、笠まつりおかむ、

六段

知らざらんあせがその殿原しらざらいはたなるやたへのとの
はちかき隣りをちかき隣りを。

○や。は呼び懸くる意の感動詞なり。神遊考に發言なりといへるもやがて
同じこゝろなるべし。神樂歌の早歌にしはく「や」といふ詞を用ゐたるも同
じ例なり。こゝは下の有度濱に呼びかけたるものと見るべし。○うど濱に
駿河なるうど濱に。駿河なる有度濱にといふを繰返したるまてなり。即ち
駿河にある有度濱有度郡の濱といふ義なり。○打ちよする波はななくさの
いもことぞよし事こそよし。その有度濱に打ち寄する波は七草の如き美し
き花卉を運びまたやがてこの濱に窈窕たる佳人を齎らし來りぬ而してこの
佳人の艶麗なること甚しとの意なり。ななくさの妹といふ語にその波の七
草を漂はし來りたるとその濱に七草の如きうるはしき妹の住へることゝを
含ませたるなり。ことぞよし云々は艶麗なることを稱へしにて、こととは漠
然とその妹に付きて指示したるなり。さてこの解釋は余の管見なれど神遊

考に於ける眞淵翁の説は大に之に反せり。今その大畧を引かんに言こそよ
しは人言のみいひよせらるゝをいふなるべし。萬葉に里人の言よせ妻とて
いまた我は定めぬを人言のしかなるなり。是よせといはてよしといふも同
じきは妻よしこそぬなどいへる多ければなりとあり。この説によれば言こ
そよしは男のその妹にいひ寄るもの多きをいひあらはしたる詞なるが如し。
されどもこの語寄の字の意ならば「ぞ」こそに對して「寄す」寄せとあるべきなり。
しかるに右の如くならざるはおもふに「善し」の意なればなるべし。ななくさ
の妹は同じく考に妹が名か所などなるべしと見えたるがこは地名とする方
穩當なるべし。地名よりやがてその妹の名の如くなりさて美しき意秋の七
草に用ゐられしならむ。○あへるときいさいねなんや。その妹に逢へる時
いざ相寐ばやとなり。「いざ」は「いざ」にて促す意。「さは」は「さ夜」などの「さ」と同じく
發語なり。○ねりのもころもの袖をたれてあなやすらけ。練糸にて織りた
る衣裳を付けその袖を垂らして遊ぶさまのいと安らけく樂しとなり。「やす
らけ」といふ詞を幾度も繰返したるは例の調の爲めにしかしたるにて意味に

は關係なし。萬葉に袖たれていざわが園に鶯の木づたひちらす梅の花みむとあるなど同じさまなるべし。○ちどりゆゑに濱にいで。千鳥の鳴きたる爲めに誘はれて濱邊に立ち出でしなり。○遊ぶ千鳥ゆゑにあやもなき小松がうれにあみな張りそ。おもしろう遊び居る千鳥を捕へんが爲めによしなき網などを小松の梢に張ることなかれとなり。このころはかの伊勢物語に見えたる春の野はけふはな焼きそ若草のつすもこもれりわれもこもれりに似通ひたりと眞淵はいへり。げにや千鳥楽しく遊べるを男女の互に相携へて逍遙せるにたとへたる者なればまことにふさはしき引歌なりといふべし。○いはたしたに笠わすれたりや。したは志太にて神遊考に同國志太郡の今いふ瀬戸川の西の岸の村を志太村といふこゝなるべしとあり。またいはたはその所の大名などにもあるべし。○とのばらもしるくもかなや。わがおもふ殿原の著く分明なるやうにあれかしとなり。俄雨などにあひて數多の男が駆け來る處などを見て詠めるものなるべし。神遊考に殿腹は貴き臣達の女の腹に生れし公等をいふ。皇女の御腹といふが如し。田舎に

てかくいふは守又郡守の子をも崇みていふなるべしとあり。されどこのとのばらの解釋はやゝ不穩當にあらじか。ばらは頃の義にあらずして名詞に添ふる接屬語にて複數を示すものなり。こゝに複數を以て殿原といひしは軽く添へておほまかに指したるものなるべし。たゞし殿原といふ詞は男子を尊稱せるものなれば眞淵のいへるが如く守又は郡司などの子にてもありしか。○笠まつりかむ。こは下に見えたる笠まつりおかむのちを略したるものにて同じ句を繰返したるまでなり。笠をその殿へ渡しまつらむの義なり。○知らざらんあせかその殿原。何故かその殿原を知らざらんの意。あせかはなぞかの轉訛なるべし。○いはたなるやたへのとのちかきとなりを。いはたのうちにあるたへといふ所に住まるゝわが殿原はちのがその女が住める里の隣ともいふべきほどなればいかでか知りまゐらせであらんとなり。いはたは前の句にも見えし如く志太たへなどを含める大名なるべし。たへは益頭郡八田郡のことならんと眞淵はいへり。その考證によれば八田はまた八田部とも稱し後ちたへと略せられしなるべしとなり。○一首の意

はほゞ以上の解説にて悟了せられしなるべし。この駿河歌は元來三種の歌の結合せるものならん。第一二段は駿河なる有度濱にいとよき乙女ありこれを得たしといふことを述べ、第三四段は美衣盛装していとゆるやかに男女が濱邊を逍遙するを妨ぐる勿れと歌ひ、また第五六段は男の俄雨に逢へるに笠をまゐらせたとはいへる女の情を表彰したるものなり。共に好箇の俗語なりといふべし。中に就きていとよきは第一二段の歌なり。此の如くこの歌は三種に分つをうるを以てかの一歌二歌の如く駿河歌の一歌二歌三歌とするも不當ならざるべし。

求子歌もとここのうた

アハレ、千早ぶる、かもの社の、姫小松、アハレひめ小松、よろづ經とも、いろはかは、アハレいろはかはらじ。

○この歌は千早振加茂の社の姫小松よろづ代ふとも色はかはらじといへる短歌を用ゐしものなり。藤原敏行朝臣の歌にて古今集に見えたり。大鏡な

どもこの事ありて寛平の頃加茂社の臨時祭の時この朝臣に詠ませ給へる歌なり。○ちはやふる。逸速やぶるの意にて神の枕詞。こゝは加茂の社にかけたり。○加茂の社の姫小松。加茂社は山城國愛宕郡にある上賀茂下賀茂の社の總稱なり。上賀茂は加茂別雷神を下賀茂は加茂御祖神を祭れり。姫小松は女松のことにて住江の岸の姫松など歌に多くよめり。幹赤き松の加茂社にありしを詠みたるものならん。○よろづ代經とも色はかはらじ。その小松の縁は千代萬代經ともいよくますく榮えゆかんとなり。アハレなどあるは例の調子詞にて稱へたる意なり。○一首の意は加茂社の神前の姫小松の色深さをめで、やがて神徳を祝ひたる歌なり。典雅雍和の風ありてまことに王城鎮護の神威を頌せるに適當のものといふべし。

大廣歌おほひろのうた

おほひれや、をひれのやまは、よりてこそ、よりてこそ、山はよらなれや、とほ女はあれど。

○おほひれをひれの山は。大比禮小比禮の山はの意。たゞし大比禮などいふ山名を聞かされば大比枝小比枝の誤ならじか。○よりてこそ。寄りてよと願望する意なり。こそは萬葉などに見えたるてにをはにて希求の義なり。○やまはよらなれや。山は寄りぬなればにやあらんの意か。即ち山に寄りこくといへど寄りぬならんとなり。○とほ女はあれど。吾が思ふ女は遠くにあれどとなり。○一首の意は比叡の山に速く寄り來よといへど寄り來ぬごとくわが愛しき女は遠くにあれど逢ひ見ることいと難きかなとなり。着想高逸にしていと面白し。(東遊歌評釋終)

風俗歌

平津久波

をつくばを、こしゆすぐりきぬ、かへりきてや、たがこひすぐや、をつくばを、こゆすぐりきぬ。

○をつくば。小筑波なり。常陸の筑波山をいふ。○こゆすぐりきぬ。此處より過ぎ來ぬとなり。こしとはこの歌のうたはれたる里をいふ。○かへりきてや。歸り來てなり。これはその筑波山を往き復りしてもとの里へ歸り來りしをいふ。○たがこひすぐや。誰れかその戀を輕々に看過すべきとの意なり。○一首の意はさる男の筑波山を往反して元の里に歸り來りしがその間、譬ひ時も場所も大に經過又は變化したりとはいへいかでか兼ねて戀せし人を思ひ棄つべきぞとなり。眞淵翁の「風俗歌考」には「たがこひすぐや」丈が主要なる處にてその他は序歌なりといはれたれど然か見ざるをよしとす。